「海外フィールド演習･インドネシアプログラム」3 年間の成果

—インドネシアプログラム参加者たちの経験から—

仲野誠*，伊藤紀恵**

Outcomes of an Overseas Fieldwork Program of Tottori University and University of Muhammadiyah Prof. Dr. Hamka in Indonesia in the Last Three Years: Through Students' Experiences in Diverse Cultures

NAKANO Makoto, ITO Norie

キーワード: 海外フィールド演習，インドネシア，イスラーム，ムハマディヤ・ハムカ大学，経験，気づき

Key words: Overseas fieldwork program, Indonesia, Islam, University of Muhammadiyah Prof. Dr. Hamka, experiences, awareness

1. はじめに

2013 年 9 月に鳥取大学とインドネシアのムハマディヤ･ハムカ大学（University of Muhammadiyah Prof. Dr. Hamka，以下「ハムカ大学」）（写真 1）との学術交流協定および学生交流協定の締結が正式に承認されたことがきっかけで（仲野ほか 2013），2013 年 3 月に初めて鳥取大学地域学部の「インドネシアプログラム」が実施された。このプログラムは鳥取大学の学術交流協定校であるインドネシアの首都ジャカルタにあるハムカ大学（写真 1）との協働によって開講されている。2012 年度の初回はパイロットプログラムとしての実験的なものだったが，翌年の 2 回目から地域学部の正規の専門科目になった。

写真 1　ムハマディヤ・ハムカ大学（B キャンパス）外観（2015 年 12 月 24 日　仲野撮影）

この科目は地域学部で実施している複数の「海外フィールド演習」科目のなかのひとつである。インドネシアの他にも韓国，中国，ベトナム，北米などの地域で実施されており（仲野ほか 2013, 2014），日本学生支援機構（JASSO）留学生交流支援制度・短期派遣の「地域再生を担うインターリージョナルな協働人材育成プログラム」の一環として実施されている。

本稿は，2015 年 3 月に実施された鳥取大学地域学部の専門科目「海外フィールド演習・インドネシアプログラム」を概観する。このプログラムに参加した学生たちの経験を記したレポートをとお

*鳥取大学地域学部地域政策学科（執筆担当箇所：1., 2., 3., 5.）
**ムハマディヤ･ハムカ大学教育学部（執筆担当箇所：4.）

して，学生たちにとってのこのプログラムの意義や成果を明らかにする。そしてこの 3 年間の同プログラムの現時点での成果をまとめる。それにあたって，第 1 回および第 2 回のこのプログラムの参加者であり，現在はハムカ大学教育学部で日本語教師として働いている鳥取大学地域学部卒業生の伊藤紀恵がこのプログラムにおける自らの経験とインドネシアでの暮らしについて考察する。これらを通して，海外フィールド演習をとおして他者と出会うということの効用について考えるさまざまなヒントを提示したい。

なお，巻末にはこのプログラムの振り返りとして書かれた参加学生たちのレポートを資料として全文掲載する。

このプログラムのフィールドであるインドネシアとハムカ大学の概要については，これまでの 2 回のインドネシアプログラムの報告書（仲野ほか 2013, 2015）を参照されたい。

2. プログラムの概要と学生の経験

2.1 プログラムの概要

このプログラムの一義的なねらいは「世界の広がりを実感しながら，その土地で暮らす人間の多様な生き方を知るという基礎的な経験をプログラムの仲間とともにすること」である。これは具体的な目的合理性を内包するようなねらいではない。

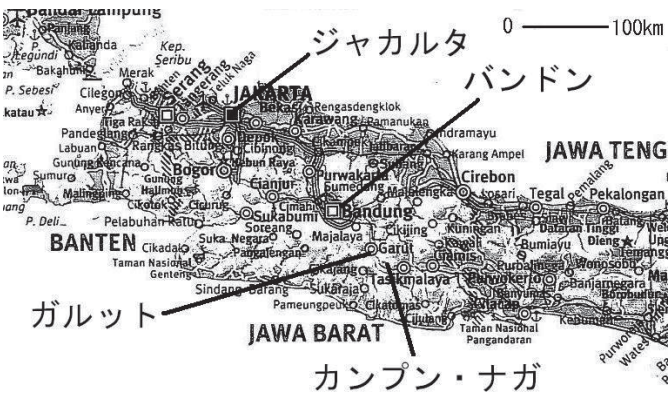

図 1　インドネシア西ジャワ地方（Periplus “Indonesia Wall Map” を加工）

そのなかでも特にこのプログラムで掲げた目標は「等身大のイスラームに出会う」ということだった。もっと簡易に表現すれば，それは「ムスリムの友人をつくる」とも言えよう。このような大変シンプルな目標を掲げることによってこのプログラムで重要視したことは，ムスリムであるハムカ大学の学生とともに約 10 日間を過ごすことによって一般的な知識の水準（あるいは頭だけで理解する「よそよそしい」知識の水準）のみで思考することからはみ出し，イスラーム社会やムスリムの友人たちの生き方を自分の身体で経験し，メディアに流布するイメージではない「等身大のイスラームに出会う」こと，あるいは「ムスリムの友人をつくる」ことだった。そしてその出会いを通して，自明視してきた自分が生きている地域や自分の生き方を相対化する機会を得ることをプログラムの基本的な目的とした。ハムカ大学の学生・教員たちや訪問先のインドネシアの村の人びとと出会い，彼／彼女らと寝食を共にし，インドネシアの日常の生活を経験することによって，自らのこれからの生き方やこの社会の将来を真剣に考える／考え直すための有益な経験をすることが期待された。

また，例年のことであるが，「これは国際交流ではない」ということを参加希望者たちに当初から明確に伝えた。もちろんこれは「日本の鳥取大学の学生たちがインドネシアのハムカ大学の学生たちに出会い，一緒に活動する」ことが主要な目的のプログラムである。その一方で，「国際交流」という言葉は往々にして私たちの思考が「国家」という枠組みの外にはみ出すことを許さない力をも

もっていることにも注意を向けた。後にこのプログラムで学生たちは実感することになるのだが，人間を区別したり，束ねたりする枠組みは国家だけではなく，世代，ジェンダー，階層，趣味，人種・民族など実に多様なものがあることや，それぞれの状況に応じて人間集団を切断／接合する境界線は不断に引きなおされ続けるということを理解するのも，このプログラムのもうひとつの重要な目的であった。

今回のプログラムへの鳥取大学からの参加学生は 8 名だった。その内訳は 2 年生が 7 名，3 年生は 1 名だった（学年は 2015 年度時点のもの）。学科別に見ると地域政策学科が 5 名，地域教育学科が 1 名，地域文化学科が 2 名で，地域環境学科からの参加者はなかった。性別に関しては，これまでではじめての男性参加者が 1 名あった。他の 7 名は女性だった。地域政策学科の仲野誠が引率教員として参加した。また，そのほか，他大学の学生 1 名が合流した。

ハムカ大学からは 8 名の学生が参加した（表 2）。全員同大学教育学部日本語教育学科の学生で，3 年生が 2 名，2 年生が 3 名，1 年生が 3 名だった。性別では女性が 6 名，男性が 2 名であった。この 8 名は鳥取大学の学生たちがホームステイするときに一緒にその家庭に泊り，学外でのフィールドワークに同行したコア・メンバーとしての学生の数である。ハムカ大学内で実施されたプログラムには日本語学科を中心とする大勢の学生たちが参加してくれた。

表 1　鳥取大学からの参加学生

	所属	学年	性別
1	地域学部地域政策学科	3	女性
2	地域学部地域政策学科	2	女性
3	地域学部地域政策学科	2	女性
4	地域学部地域政策学科	2	女性
5	地域学部地域政策学科	2	男性
6	地域学部地域教育学科	2	女性
7	地域学部地域文化学科	2	女性
8	地域学部地域文化学科	2	女性

表 2　ハムカ大学からの参加学生

	所属	学年	性別
1	教育学部日本語教育学科	3	女性
2	教育学部日本語教育学科	3	男性
3	教育学部日本語教育学科	2	女性
4	教育学部日本語教育学科	2	女性
5	教育学部日本語教育学科	2	男性
6	教育学部日本語教育学科	1	女性
7	教育学部日本語教育学科	1	女性
8	教育学部日本語教育学科	1	女性

学生たちは春組，夏組，秋組，冬組の 4 つに分かれた（写真 2～5）。それぞれ日本から来た学生が 2 名ないし 3 名，ハムカ大学の学生が 2 名，合計 4 名ないし 5 名で構成された。そして各グループにハムカ大学教育学部日本語教育学科の卒業生が世話役として 1 名ずつ付いた。

写真 2　春組のメンバー
（2015 年 3 月 14 日 仲野撮影）

写真 3　夏組のメンバー
（2015 年 3 月 14 日 仲野撮影）

写真 4　秋組のメンバー
（2015 年 3 月 14 日 仲野撮影）

写真 5　冬組のメンバー
（2015 年 3 月 14 日 仲野撮影）

2.2 プログラムの日程と学生の経験

本プログラムの日程は表 3 のとおりである。

表 3　2014 年度インドネシアプログラム日程

日　付	活　動　内　容
2015/03/13(金)	07:05 鳥取空港発（NH292）　08:15 羽田空港着 10:10 羽田空港発（NH855）　15:55 スカルノ - ハッタ空港着　夜：ミーティング
3/14(土)	ハムカ大学教育学部教員家族の結婚式に参列　夕方：ホストファミリー宅に移動
3/15(日)	ジャカルタ市内エクスカーション（独立宣言広場･独立宣言起草博物館，イスティクラル・モスク，ガンダリア･シティなど）
3/16(月)	午前：学生同士のワークショップ（ハムカ大学） 午後：教員によるセミナー（ハムカ大学）
3/17(火)	エクスカーション（ブカシ：廃棄物の山 バンタール・グバン Bantar Gebang とそこで働く人たちの子どもたちが通う学校（Yayasan Tunas Bangar Gegang）
3/18(水)	ハムカ大学見学（授業参加，お祈り，信仰などに関するディスカッションなど）
3/19(木)	朝：カンプンナガ村(Kampung Naga)に出発　午後：村に到着 夜：モスクでのお祈り，祈りに関する質疑応答・対話など
3/20(金)	カンプンナガ村フィールドワーク　昼：モスクでのお祈り　夜：村人との交流
3/21(土)	午前：宗教学校 Pesantren 訪問　昼：カンプンナガ村発　夜：大学着
3/22(日)	ホストファミリーとの活動日
3/23(月)	午前中：プログラムの振り返り　15 時：プログラム修了式 21:35:スカルノ - ハッタ空港発（NH856）
3/24(火)	07:00 羽田空港着　10:40 羽田空港発（NH295）　12:00 鳥取空港着　解散

次にこの表 3 に記載されたプログラム内容を順に概観しよう。その際，学生たちのレポートを適宜引用しながら，その時々に学生たちが受け止めたことやプログラムの現場に立ち上がった重要な

気づきや問いを提示しつつ，日付順にこのフィールドワークを振り返ってみたい。

3 月 13 日

この日の朝，鳥取空港を出発し，羽田空港経由でジャカルタのスカルノ - ハッタ空港に飛んだ。ジャカルタの空港ではハムカ大学の教員と学生たちに出迎えられ（写真 6），渋滞のなかジャカルタ市内へと移動した（写真 7）。その日のホテル近くの食堂で夕食をとり，ホテルでプログラムの打合せをした。その日はハムカ大学近くのホテルに宿泊した。

ある学生ははじめて訪れたインドネシアの最初の印象を次のように記している。

> インドネシアへ着き，最初に圧倒されたのは，インドネシアという地の異国感だった。まだ肌寒い日本とは異なる年中暖かい気候，インドネシア独特のお香のような香り，聞いたことのない言語，たくさんの車が渋滞している様子，その脇のカラフルな看板や屋根によって色であふれている町並みなど，インドネシアの全てが珍しかった。わたしはインドネシアを訪れたことはもちろん，海外へ出たことがほぼ初めてだった。日本と異なる場にいる，と直に体感した時だった。

ここにジャカルタ到着後の学生たちの気分の高揚が読み取れる。

写真 6　ジャカルタのスカルノ - ハッタ空港に到着した学生たち（2015 年 3 月 13 日　仲野撮影）

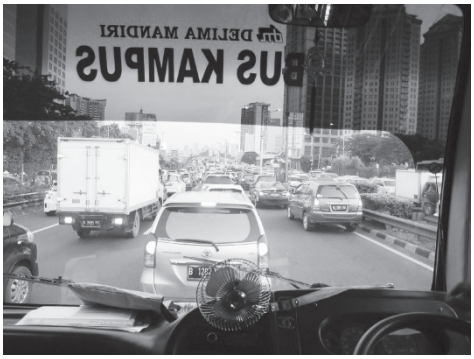

写真 7　空港からホテルに移動する道中のジャカルタの渋滞（2015 年 3 月 13 日　仲野撮影）

3 月 14 日

この日は，ハムカ大学教育学部日本語教育学科教員の家族の結婚式に参列した（写真 8）。はじめて参加するインドネシアの結婚式に緊張していた学生は，その会場に居合わせた多くの初対面の参列者たちと一緒に歌い，踊ることによって一瞬にして打ち解けるという経験をした。

この結婚式での経験は単なる「異文化理解」という学びを大きく超えて，やや大げさに言えば「人との向き合い方」や「人間の優しさ」あるいは「自分の存在」というようなより大きなテーマと直面することになる。

ここにも狭義の「国際交流」を超え，世代や共通の

写真 8　インドネシアの結婚式に参列（2015 年 3 月 14 日　仲野撮影）

趣味で一瞬にしてつながる学生たちの姿が見て取れる。しかしその一方で，同世代で共通の話題や趣味を共有しているかのように思えるインドネシアの友人たちが，自分たちに似ているようで何かが確実に違うことをも確実に意識しているようだ。

これは，前述した「国際交流」という枠にとらわれずに現実をとらえるというこのプログラムの目的のひとつをプログラムの開始当初から学生たちが実感したことを示す記述ではないだろうか。最初はやや身構えていた学生たちが，共通の歌を歌うという素朴な行為によって，無意識のうちに国家や国籍という枠組みを軽々と一瞬にして飛び越えてしまったことを表している。

写真 9　結婚式で初対面の参列者とともに踊る（2015 年 3 月 14 日　仲野撮影）

結婚式に参加するというこの経験は，単なる表面的な「文化の違い」というものをはるかに超え，自分の存在について考えるほどの刺激を得たようである。学生たちは結婚式での踊り（写真 9）に参加した経験について次のように述べている。

> そんな中で結婚式が始まった。私が印象的だったことは，儀式が終わってからの出来事だ。みんなが集まり，歌やらダンスやらを始めたのだ。私も見よう見まねで，初めて会う人たちと一緒に踊った。すごく楽しくて，私たちを受け入れてくれているような気がした。言葉は通じないけれど，目を見ると「一緒に踊ろう」という気持ちが自然とわかるような気がした。どきどきと不安ばかりだったが，自然とその場にひきこまれ，溶け込んでいる私がいた。そしてこの楽しくて，自然と笑顔があふれる場に誰かを呼びたいと思い，いつの間にか私も初めて会う人の手をつれ，一緒に踊っていた。
>
> 新郎新婦だけが主役ではない。一緒にダンスし踊りを通して，みんなが主役で，一人一人の存在意義を感じた。初めて参加し，初めて会う人の結婚式であったが，最初に感じていた「私はここにいていいのか」という思いは自然となくなっていた。そして，「私もいていいのだ，ここにいたい」と感じていた。結婚式に来ていた人の笑顔や温かさがあったからだと思う。とても幸せな気分になった。我を忘れるということは，このようなことだと思った。その場へ溶け込み，ケバヤを着てインドネシアの化粧をした私は，インドネシア人のようだった。

インドネシア滞在 2 日目にして，学生たちはすでに自分の居場所や存在というかなり根源的なことにまで思いを馳せるきっかけを得たようだ。

3 月 15 日

この日はジャカルタ市内のエクスカーションを実施した。訪れた場所は独立宣言文起草博物館（Museum Perumusan Naskah Proklamasi），独立宣言広場（写真 10），

写真 10　独立宣言広場を訪問（2015 年 3 月 15 日　仲野撮影）

東南アジア最大のモスクといわれるイスティクラル・モスク，そして近代的なガンダリア・シティ・ショッピングモールであった。独立宣言博物館では，現在のインドネシアを理解するためにはオランダや日本による軍政支配の歴史を理解することが必要であることを実感しただろう。また巨大な近代的ショッピングモールのガンダリア・シティを訪問したことにより，ジャカルタの多様な側面を実感した。

3 月 16 日

午前中は双方の大学生同士のワークショップ活動を実施し，それぞれが双方の社会で生きている現実を共有する時間をもった。午後は教員同士のプレゼンテーションを実施した。ハムカ大学からは歴史学のヘンドラ教授が「インドネシアのイスラームの歴史」について，鳥取大学からは仲野誠が「＜弱さ＞と＜強さ＞のパラドクス――日本社会の近代化をとおして」という題目で発表を行った。

また，その後，ハムカ大学のアクバル学科長とザイナール講師によって開発独裁のスハルト政権を倒した 1998 年にジャカルタの学生運動についてのレクチャーがあった。そしてその後ディスカッションを行った。

3 月 17 日

この日は，ジャカルタ郊外のブカシというまちにある廃棄物の山であるバンタール・グバン（Bantar Gebang）を訪問し，そこで暮らし，働く人たちからその山を案内してもらった。それはジャカルタ首都圏のゴミを一手に引き受けている場所で，同様に有名なフィリピン・マニラのスモーキーマウンテンに相当する。そこではゴミの山から有価物を拾って生計を立てる人たちが集落を作って暮らしている。そこで働く人たちの子どもたちが通う学校（Yayasan Tunas Bangar Gegang）も訪問し，バンタール・グバンでの暮らしや教育について学んだ。

写真 11　バンタール・グバンを歩く（2015 年 3 月 17 日　仲野撮影）

学生たちはバンタール・グバンの訪問について次のような感想を残している。この訪問自体が大きな衝撃であったことがうかがえる。

> 実際にゴミ山を目の当たりにすると心臓のドキドキが止まらなかった。おそらくその時の私はそのゴミ山を怖いと思っていたと思う。あまりの衝撃に何も発することが出来なかったのを今でも覚えている。
>
> そのゴミ山で私は 1 人の少年と出会った。その少年は中学校を卒業した後，1 人でここに来て朝から晩までゴミを集めている。少年に「こうして外国から人が見に来ることをどう思う？」という質問をしたときのことだ。私は心の中で，きっと少年は私たちに早く帰って欲しいと思っているだろう，きっと怒っているだろうと直感的に思った。批判的な言葉が返ってくることを確信して身構えていた。しかし，少年から返ってきた言葉は思いがけないものであった。「ここに来てくれて嬉しい。来てくれてありがとう」と少年は言った。
>
> その瞬間，私の中で何かが崩れるような，そんな感覚に陥った。無力さを感じ，私は涙が出

た。……ゴミ山で出会ったその少年に思いがけず感謝の気持ちを言われたあの瞬間，自分の中で何かが崩れた瞬間を私はこの先ずっと忘れることはない。

次の学生は，構造的な矛盾あるいは構造的暴力の象徴であるこの地で，自分もその構造の中に生きる人間であることを自覚させられ，「絶望感」に襲われたようだ。

ゴミ山から帰るときに，ゴミを持っていた私に，「捨てて帰りなよ」とハムカの学生が言った。私は「自分で出したゴミだから」と言って，持ち帰ることにした。しかしそれは意味のないことであった。ゴミを持ち帰り，ゴミをゴミ箱に捨てても，結局バンタールグバンに行ってしまう。私はそれに気付きながらも，結局持ち帰った。しかしそれは，バンタールグバンの人に対するものでなく，自分の気休めに過ぎないのではないだろうかと思った。ゴミ山で生活している人，働いている人を見てしまったため，どうにか自分の気持ちを整理し，落ち着けたくてした行為ではないかと思ってしまったからだ。

そしてとてつもない絶望感におそわれた。加えてインドネシアの 10 日間で出したゴミが全部あそこに行ったのだと思うと，つらい。今もやるせない気持ちがよみがえる。

この訪問の日が誕生日の学生がいた。バンタール・グバンにある学校で，そこの子どもたちに心からのお祝いをしてもらう友人の姿を見て，その日は自分の誕生日のように感じた学生もいた（写真 12）。

写真 12　バンタール・グバンでの誕生日
（2015 年 3 月 17 日　仲野撮影）

私たちはバンタールグバンにある学校に行った。そこで鳥取大学の学生の誕生日のお祝いをした。ハムカ大学の学生がサプライズでケーキを用意してくれたのだった。それだけでも感激だったのだが，そのケーキを渡すとき，バンタールグバンの学校に通う子どもたちが一緒に Happy birthday to you を歌ってくれた。大きな声で。笑顔で。それも何度も。止めるまでずっと全力で何度も。それを見て涙が溢れて止まらなくなった。私は誕生日の学生よりも先に泣いてしまっていた。泣かずにはいられなかった。

初対面，言葉も通じない，いわば知らない人，彼らにとって私たちは勝手に自分の生活に土足で足を踏み入れた人たちである。そんな人の誕生日をこんなに盛大に祝うことができるなんて，とてもすごいと思った。私は家族や友達の誕生日ですら，ここまでの熱を持って祝ったことはなかったと思った。これほど強く胸に残った人の誕生日ははじめてである。この場に立ち合えてよかった。子どもたちからすごくパワーをもらった気がした。この日は友人の誕生日でもあり，私の何かが変わった，私の誕生日かもしれないと思った。

人のことで，これほどうれしかったのは初めてだった。私はどうしても自分と人は分けて考えてしまう。だから自分では人のことを思っているつもりでいるが，どこか本気で喜んだり，悲しんだりできていないのではないかと感じていた。だから人のことを本気で考えることのできる人がうらやましかったし，そうなれない冷めた自分が嫌いだった。しかし，ここで仲のよ

い友人が知らない人から盛大に祝福され，感謝ということばでは表しきれない感情があった。とても幸せな気持ちになった。自分のこと以上に嬉しくて，嬉しくて心が温かくなった。私も人のことを本気で思えているのだと気付いた。そしてずっと背負い続けた肩の荷が降りた気がした。

3 月 18 日

午前中はハムカ大学教育学部日本語教育学科の授業見学をした（写真 13，14）。本稿の筆者の一人であるハムカ大学の伊藤紀恵がカウンターパートとともに教える「病院」や「病気」に関する「会話」の授業であった。ロールプレイの練習には鳥取大学の学生たちも参加した。

午後は「ワークショップ」とよばれるハムカ大学日本語教育学科の学生の共同学習室でハムカ大学の学生たちと交流し，学生活動を視察した。16 時 30 分からは，伊藤紀恵を囲む懇談会を開き，伊藤の学生時代の学びや卒業研究のこと，あるいはインドネシアとの出会いとインドネシアで働く決意をしたこと，そしてインドネシアでの暮らしについて対話する時間を設けた（写真 15）。伊藤のインドネシアでの一連の経験については，本稿で後述する。

伊藤の経験に耳を傾けることは，いままさに自分の将来について考え，不安も感じている学生たちにとってとても貴重な経験となったようだ。少し長くなるが，ある学生の感想を次に引用する。

> 鳥取大学の卒業生であり，ハムカ大学で日本語を教えている紀恵先生の話を聞く機会があった。なぜ，インドネシアを訪れることになったのか，インドネシアでのエピソードなどを聞いた。紀恵先生がインドネシアに来たばかりの頃，紀恵先生をさみしくさせないために，ハムカ大学の先生や学生が毎晩一緒にいてくれたそうだ。いつも誰かが隣にいてくれ，紀恵先生はたくさんの人に守られていた。紀恵先生は「人の温かさ」と「私があなたを守る」という言葉を何度も何度も言っていた。私は，先生のエピソードを聞いただけだったし，インドネシアを訪れて数日しかたっていなかったけれど，

写真 13　ハムカ大学の授業に参加（2015 年 3 月 18 日　仲野撮影）

写真 14　ハムカ大学の授業に参加（2015 年 3 月 18 日　仲野撮影）

写真 15　伊藤紀恵と学生たちの対話（2015 年 3 月 18 日　仲野撮影）

それでもその話がすーっと自然と実感できたのだ。それは，カンプンナガでの水浴びで感じた，そばにいてくれる友人の“愛おしさ”や“安心感”を自分自身で経験していたからかもしれない。

また紀恵先生が，インドネシアの人たちは「今は今」と一瞬一瞬を大切にしている。一方で私たち日本人は，将来のことを意識しすぎて，今すべきことがわからなくなると言っていた。まさに私のことだと痛感した。将来のことを考えすぎて，将来のために，将来のために，と最近の私は頭の中はそればかりで，大切なこと今すべきことを見失っていた。しかしこの言葉を聞き，「今は今でいいのか」と気持ちが楽になり，今までの悩みを話したら，ただただ，涙が止まらなかった。日本にいて，初めて会う人の前で，こんなに号泣したことはない。自分の悩みすら打ち明けていなかった。しかし，インドネシアでは「大丈夫だよ」「私がそばにいるよ」という何でも受け止めてくれるという安心感があった。それは，紀恵先生やその場にいるみんなが教えてくれた。紀恵先生は「今度は私があなたを守る」と私を強く抱きしめてくれたのだ。インドネシアの学生も，「どうして泣いているの？泣かないで，私まで泣いちゃうから」と一緒になって泣いてくれた。そして，強く抱きしめてくれた。

日本にいて，誰かに抱きしめられるということはあまりないと思う。誰かを抱きしめたり，または誰かに抱きしめられることは，恥ずかしいように感じる。しかし，そのような感情はなかった。その安心感が私を包んでくれて，誰かに抱きしめられることが，こんなにも幸せで居心地がいいものだとは思っていなかった。だからこそ，紀恵先生の言っていた，「人の温かさ」や「私があなたを守る」という言葉を心の奥底から体のすみずみまで感じることができた。その温かく優しいぬくもりを私も誰かに伝えたい，大切な人を抱きしめたいと思った。

この対話は，単に自分の進路の悩みにとどまらず，人間への信頼や人とのつながり方という，より根源的な気づきを学生たちにもたらしたことが読み取れる。

3 月 19 日

9 時半に大学を出発し，ジャカルタを離れ，途中昼食を兼ねた休憩をはさみ，17 時ごろにカンプン・ナガ（Kampung Naga）という村に到着した（写真 16，17）。この村は電気と水道がひかれていない村として知られており，ホームステイをしながら村の暮らしを経験させてもらった。近代化された便利な暮らしに慣れた学生たちは，ここでも自分のあたりまえを問い直す機会を得た。

写真 16　カンプンナガ村遠景（2015 年 3 月 19 日 仲野撮影）

まず日本での生活様式とはさまざまな点で大きく異なるしくみをもつこの村で感じるのは，強烈な違和であった。ある学生はこの村で感じた安心感や他者への敬意について次のように述べている。

この村で，この住民たちと自然とが共に生きていけるにはどうしたらいいのかを考えているように感じた。ここでは，常に自分と他者がいて，自分より他者を大切にし，尊重している。私もその「自分より他者を大切にする」ことを実感した出来事がある。それは，お風呂に入るときに感じた。私は，日本の学生と一緒にお風呂に入った。お風呂といっても外にあり，竹で覆われた柵に，川から田んぼへ浄化されて出てきた水で体を洗う。電気は懐中電灯のみで，真っ暗だ。インドネシアの学生が心配してくれて，外で懐中電灯を照らしてくれた。最初は，「早く出たい」という思いで，水を浴びていた。無防備で冷たい水を浴びて，二人で叫んでいた。しかし，その叫びが，だんだんと笑い声になってきた。笑いが止まらなく，むしろ清々しい。野生になった気分であった。そして，一緒に水浴びをした学生と外で待っていてくれるインドネシアの学生が愛おしく思えた。一緒にいてくれる安心感や心強さを実感した。

写真 17　カンプンナガ村に到着（2015 年 3 月 19 日　仲野撮影）

ここでは，助け合いながら生きなければならない。だから，他者を大切に尊重しているのではないだろうか。

また，別の学生はカンプンナガで本来の自分が姿を現し始めたと言う。

最初は水も濁っているし，早くでたい，という気持ちで，一緒に水浴びしていた日本人の友達と，ギャーギャー言い合って，早くでようと急いでいた。けれどこの野性感がだんだん面白くなってきて，気持ちいい！と思うようになってきた。日本のお風呂では，お風呂でマッサージしたり，雑誌を読んだり，半身浴をして血流をよくするなど，お風呂でも忙しい。
しかし，カンプンナガでの水浴び場では，余計なものがないので，体を綺麗にするという本来の行為をちゃんとできる。そのことがなんだか，とっても気持ちよかった。「自然よ，ありがとう！人よ，ありがとう！私は優しい人になりたいです！」と叫びたくなった。カンプンナガでの水浴びを通して，本来の自分がチラッと顔をみせた気がした。

写真 18　カンプンナガ村を歩く（2015 年 3 月 20 日　仲野撮影）

この村には 2 泊 3 日滞在した。翌 2 日目は終日村の中で過ごした。

3 月 20 日

この日は村の人びとの案内でカンプンナガの村歩きをし，暮らしや生業あるいは信仰などに

ついてゆっくりと学ぶ時間を得た（写真 18）。また 20 時からは村の人たちとの交流会をもち，村の伝統的な歌や踊りに触れた（写真 19，20）。

次の学生の感想からは，この交流会が村の伝統芸能の鑑賞にとどまらず，自分自身を解放していくダイナミズムや日本社会を相対化する視線が包含されていたことがわかる。

写真 19　村人との交流会（2015 年 3 月 20 日　仲野撮影）

写真 20　村人との交流会（2015 年 3 月 20 日　仲野撮影）

踊りたくてたまらず，うずうずしていた私がいた。そんな私の気持ちが伝わったのか，踊りたいという気持ちが顔に出ていたのか，村の人が手を差し伸べてくれ，一緒に踊ろうと言ってくれたのだ。照れながらも，待ってました！と言わんばかりに，張り切って行った。伝統ある踊りのようで，とても難しかったが，それ以上に村の人が笑顔で，私も自然と笑顔になっていた。自分を「表現」する楽しさを味わい，いつの間にか我を忘れて歌い，踊っていた。

この空間が私にとって幸せの場であった。ひとり一人の笑顔が輝いて見える。そして何よりも，村の人から見守られていて，受け入れられているこの「瞬間」がたまらなく幸せであった。そして，日本にいるときは，自分を思い切り表現できていなかったことに気づかされた。周りの目を気にし，「冷めた目」で見られることがとても怖かったからだ。しかし，この場で一緒に歌い踊ったことで，受け入れられていることを感じることができた。

私は，いつもなら時間に縛られていて，何かに追われているような気持ちになり，毎日毎日せかせかとしていた。何かをゆっくり考えたり，本を読んだり，自分と向き合う時間をつくったり，そんなことはできなかった。気付いたら朝起きて，授業を受けて，アルバイトに行って，そんな時間に追われた毎日を過ごしていた。しかし，ここにいると，時間を忘れてしまうくらいゆったりと時間が流れていた。私は何をそんなに急いで焦っていたのだろうか。そして，自分が便利で生きやすいことを最優先にしていた。自然や人を大切にし，「生きる」ことを実感できるこの場所は魅力にあふれていた。私はここにいるぞー！と叫びたくなった。

このような一つ一つの経験や行為から，学生たちは大切な気づきをていねいに受け止めていることがうかがえる。

3 月 21 日

9 時にカンプンナガの集落を出発し，10 時に集落の外にあるプサントレン（Pesantren）とよばれるイスラームの宗教学校を訪問した。ここでは日本の中高生に相当する生徒たちが全寮制で学んでいる。生徒たちによる歌や踊りを見学し，交流する時間をもった。

13 時半にカンプンナガ地区を出発し，21 時にハムカ大学にも戻った。

写真 21　イスラームの宗教学校を訪問（2015 年 3 月 21 日　仲野撮影）

3 月 22 日

この日，学生たちは自分のホストファミリーとともに終日過ごした（写真 22）。ハムカ大学側のプログラム・スタッフおよび仲野は参加学生に贈る記念品作成や翌日のプログラムの振り返りの準備を進めた。

ホストファミリーと過ごした最後の日は，自由日であり，一日中ホストファミリーと過ごした。インドネシアの島々について紹介されているテーマパークに連れて行ってもらった。……たった 10 日間ではあったが，そのなかに，こうして実感できる愛情があった。

そうして迎えた最後の夜，私たちはホストファミリーに向けて，準備したプレゼントを渡した。写真も取って，最後にホストマザーと話したとき，私は涙が止まらなかった。自分でも思いがけない反応で，涙を止めたくても止められない。ホストマザーに「遠く離れていても家族は忘れない。あなたは私の娘だ。」と言われたときに心の奥から溢れて出してくるものがあった。たった 10 日間なのに，娘として，家族として受け入れてくれたこと，私にとってこの場所が，ただ泊まるだけの場所でなく，いつの間にか家族になっていたことに気づいたのである。泣き出した私をみて，ホストマザーは私をぎゅっと抱きしめてくれた。その強さに，私はまた涙が溢れてきたのである。

写真 22　テーマパークでのホストファミリーとの自由日（2015 年 3 月 22 日　加藤聖月撮影）

部屋に戻り，まだ涙が止まらなかった私は，ベッドの上で泣いていると，気づいたら一緒に泊まっているハムカの学生が側に来てくれて，「泣かないで」と慰めてくれた。私は，その優しさにさらに泣いてしまった。包み込まれるような安心感と，優しさを感じずにはいられなかった。

ホームステイで，学生たちは新しい家族を得，そして新しい愛情の形に出会ったように読める。それはこれまで日本社会でなかなか経験し得なかったものであった。

3 月 23 日

この日の午前 9 時からハムカ大学教育学部のマイクロティーチング演習室でプログラム全体の振り返りを実施した。春組，夏組，秋組，冬組それぞれのグループごとに，それぞれのメンバーがこのプログラムをとおして学んだことやもっと学びたかったこと，あるいは課題などを発表し，それを全員で共有する時間をもった（写真 23，24）。

写真 23　プログラムの修了証を受け取る（2013 年 3 月 23 日　仲野撮影）

特に印象的だったのは，インドネシアあるいはイスラームというような「他者」のことを知りたいという動機でこのプログラムに参加した多くの日本から来た学生たちが，結果的にはインドネシアあるいはイスラームが鏡となって，自分たちの社会を深く振り返る大切な気づきを多く得たということだった。そしてそれは日本社会のことのみならず，そのなかで生きてきた，あるいは生かされてきた自分自身を問うという行為でもあった。

写真 24　振り返りの後の集合写真（2015 年 3 月 23 日　仲野撮影）

昼食をはさんで，振り返りを続け，このプログラムにおけるそれぞれの経験を共有した。日本から来た学生たちの振り返りに続き，ハムカ大学の学生およびスタッフの意見にも耳を傾けた。

その後，ハムカ大学の学生たちによる歌，そして日本から来た学生たちによる踊りを相互に披露しあった後，プログラムの修了式を開催した。そして 17 時にハムカ大学を出発し，スカルノ=ハッタ空港に向かい，その日の夜行便で翌朝羽田空港に到着し，そこで飛行機を乗り換え，同日昼ごろに鳥取空港に帰還した。

3. インドネシアプログラムの 3 年間の成果

本プログラムの成果以外にも，ハムカ大学との交流の 3 年間で次のような成果が挙げられた。まず，このプログラムの実施がきっかけになってハムカ大学から鳥取大学に留学した学生たちは 2015 年末までで合計 6 名いる。うち 2 名は 2015 年度末時点で留学継続中である。

写真 25　2014 年度の「鳥取大学 短期日本語・日本文化研修プログラム」留学生たち（2014 年 7 月 13 日　仲野撮影）

その内訳は，まず夏季に鳥取大学国際交流センターが主催する「鳥取大学 短期日本語・日本文化研修プログラム」への留学である。2014 年 7 月 12 日から 7 月 28 日まで，ハムカ大学教育学部日本語教育学科の 2 年

生 2 名（全員女性）がこのプログラムに参加して日本語を学んだ（写真 25）。翌 2015 年は 6 月 28 日から 8 月 4 日まで，同学科の 1 年生 1 名（女性）と 2 年生 1 名（男性）の計 2 名が同じプログラムに留学した（この年度の短期日本語・日本文化研修プログラムの名称は「鳥取大学 グローバル化社会における多文化共生のための協働力育成プログラム」だった）（写真 26）。このプログラムは日本学生支援機構（JASSO）の奨学金を得ての留学だった。

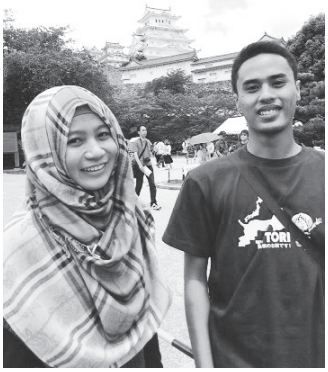

写真 26　2015 年度の「鳥取大学 短期日本語・日本文化研修プログラム」留学生たち（2014 年 6 月 28 日　仲野撮影）

次いで，2015 年度には鳥取大学は 2 名の国費留学生をハムカ大学から迎え入れている（写真 27）。そのうち 1 名は「国費外国人留学生（日本語・日本文化研修留学生）」である。これはハムカ大学の 2 年次を終了した学生（女性）が 2015 年 10 月から 2016 年 9 月までの 1 年間，国費外国人留学生として日本語・日本文化を学んでいる。もう 1 名の国費留学生は，ハムカ大学教育学部日本語教育学科で講師をしている男性である。彼も 2015 年 10 月から鳥取大学での留学を開始し，最初の 1 年半は本学地域学研究科の研究生として社会科学を学び，その後，同研究科の大学院生になる予定である。

また，学生のみならず，教員の招へい活動も毎年実施されている。ハムカ大学の教員が鳥取大学を訪問したのは，学術交流および学生交流協定の締結のために 2013 年 10 月 4 日から 10 月 8 日まで来日したのが最初であった。その時の来訪者はハムカ大学学長，副学長，同大学教育学部長，教育学部副学部長，同学部日本語教育学科長の合計 5 名だった。

写真 27　2015 年 10 月から鳥取大学で学んでいる文部科学省国費留学生たち（2015 年 10 月 1 日　仲野撮影）

次いで，2015 年 3 月 4 日から 3 月 10 日まで，ハムカ大学教育学部長，教育学部副学部長，同学部日本語教育学科長の 3 名が地域学学部の招へいで鳥取大学を訪問した。この訪問の目的は，講演会「インドネシアにおけるイスラームについて――その暮らしと信仰」でのレクチャーおよび鳥取大学国際交流センターとの意見交換であった。

また，2016 年 3 月にも地域学学部の招へいでハムカ大学の 4 名の教員がインドネシアに関するレクチャーのために来日することが予定されている。

以上はハムカ大学から鳥取大学への訪問の履歴である。その一方で，鳥取大学地域学学部地域政策学科の 2013 年度の卒業生が，2015 年 2 月にハムカ大学教育学部日本語教育学科の日本語教師として赴任した。現在も任務を継続中である。

これらの交流を表にまとめると次のようになる。

表 4　鳥取大学とハムカ大学の人的交流（インドネシアプログラム以外）

関係性	種　類	時　期	目的･内容	来訪者
ハムカ大学から鳥取大学へ	学生の交流	2014 年 7 月 12 日～7 月 28 日	「鳥取大学　短期日本語･日本文化研修プログラム」への留学	ハムカ大学教育学部日本語教育学科の 2 年生 2 名（全員女性）
		2015 年 6 月 28 日～8 月 4 日	「鳥取大学　短期日本語･日本文化研修プログラム」への留学	ハムカ大学教育学部日本語教育学科の 1 年生 1 名（女性）と 2 年生 1 名（男性）
		2015 年 10 月 1 日から	文部科学省国費外国人留学生（日本語・日本文化研修留学生）	ハムカ大学教育学部日本語教育学科の 2 年修了生 1 名（女性）
		2015 年 10 月 1 日から	文部科学省国費外国人留学生（研究留学生）	ハムカ大学教育学部日本語教育学科講師 1 名（男性）
	教員の交流	2013 年 10 月 4 日～10 月 8 日	学術交流および学生交流協定の締結	ハムカ大学学長，副学長，同大学教育学部長，教育学部副学部長，同学部日本語教育学科長（合計 5 名）
		2015 年 3 月 4 日～3 月 10 日	講演会のための地域学部による招へい	ハムカ大学教育学部長，教育学部副学部長，同学部日本語教育学科長（合計 3 名）
		2016 年 3 月（予定）	講演会のための地域学部による招へい	ハムカ大学教育学部長，教育学部副学部長 2 名，同学部日本語教育学科長（合計 4 名）
鳥取大学からハムカ大学へ	教員の交流	2015 年 1 月から	ハムカ大学教育学部日本語教育学科の日本語教師として赴任	鳥取大学地域学学部地域政策学科卒業生（女性 1 名）

次に，2014 年 3 月に鳥取大学地域学学部地域政策学科を卒業し，2015 年 1 月からハムカ大学教育学部日本語教育学科の日本語教師として日本語を教えている伊藤紀恵の経験を記そう。

4. 私のインドネシアでの経験（伊藤紀恵）

4.1 学生としての参加

私は大学生の時，二度インドネシアプログラムに参加した。当時を振り返りながら，プログラムの時に何を感じ,そしてどのような経緯でインドネシアで働くことになったのかを述べていきたい。

4.1.1 一回目の参加

プログラムに参加した理由

私はパイロットプログラムとして実施された一回目のインドネシアプログラムに参加した（写真

28)。数回にわたる事前学習会でにイスラームに関する本を講読したり参加メンバーで意見を交わしたりしていたが,イスラーム圏の国に行ったことがなく,インドネシアやイスラームについてあまり具体的なイメージがもてずにいた。

そもそも私がこのプログラムに参加した理由は,大学2年生の時ムスリムの方に出会ったことが関係している。鳥取大学の国際交流課が募集していた日本語パートナーに登録したことがきっかけでサウジアラビア出身のムスリムの女性と出会った。彼女とは授業の合間に数回会い，宿題を手伝ったり，家族のことなど話をしたりした。

写真28　第1回目のプログラムでカンプンバンダンの子どもたちと
（2014年3月16日　伊藤撮影）

ある時彼女が「今度おうちへ来て下さい」と話してくれた。私はまだ数回しか会っていない私を本気で招待しているとは思えず，社交辞令で言ってくれているのだと思った。しかし，次に会った時に「あなたを待っていた」と言われ，申し訳ないことをしたと思った。彼女はもう一度私を家に招待してくださり，おじゃますることがあった。家にたくさんの手料理を用意して待ってくれていた。私は彼女のおもてなしに感激したが，勘違いだったとはいえ最初は来なかった私に，どうしてここまでしてくれるのか分からなかった。彼女の人間性によるものなのかもしれないが，ムスリムであることが関係しているのかもしれないと思った。私はそのような疑問とムスリムへ関心があり，ぜひ自分の目と肌でムスリムやその人たちが生きる世界を感じたいと思い，プログラムに参加した。

一回目のプログラムで気づいたこと

はじめて訪れたインドネシアには多くの発見があった。さまざまな場所を訪れ，そこでたくさんの人と出会い，私のなかにはなかった新しい考え方や生き方と出会った。電気を通していない村ではシンプルな暮らしの素晴らしさを全身で実感した。スラムで笑顔で迎えてくれる人びとと出会いお金や生活の安定だけを基準に幸せを定義していたことに気づかされた。

もし，このプログラムに参加していなければ，立ち止まって考えることなく，私のなかの固定された価値観や幸せの理想像を疑うことなく，生きていたかもしれない。しかし，このプログラムのおかげで，さまざまな考え方や生き方と出会い，これまで信じていたものを疑い私に自分で考える機会を得た。

プログラムのなかでも私にとって一番影響が大きかった出会いが，ハムカ大学の人びととの出会いである。移動中のバスも，ご飯を食べる時も，寝る時も，ずっとハムカ大学の人たちと一緒だった。彼らと一緒に歌い，踊り，お腹がいたくなるまで笑った。道路を歩く時は車から私たちを守るように車側を歩いてくれ，お土産選びに真剣に付きあってくれた。

彼らと一緒にいると，自分の悩みやちっぽけなことに思え，心配や不安は消えていった。もっと楽しく笑顔で生きていけるはずだという希望も湧いてきた。そしてプログラムが終わって，日本とインドネシアで離ればなれになっても，遠くで再会を楽しみに待っていてくれる人がいるということだけで，私は大変心強い気持ちになれた。彼らと過ごした1週間はかけがえのない大切な宝物になった。

帰国後の日記を読んでみると，毎日が幸せと記録を残していた。周りの友人らからは「酔ってるの？」や「キラキラしすぎてまぶしい」と言われた。私の日常のなかで何かが劇的に変わったわけではないが，幸せだと思える瞬間が増え，毎日がわくわくした。私のなかで何かが変わったのは確かだった。

私の人生を大きく変えたできこと

このプログラム中，私の人生を大きく変えるできこともあった。それは私がインドネシアで働くようになったきっかけとなったカンプンナガという村のあぜ道での立ち話である。

当時私は日本語教師を目指していた。そのことを知っていたプログラムのコーディネータである仲野先生がハムカ大学の日本語教育学科の先生に,「(日本語教師として)ハムカ大学にどうですか」と私を推薦した。フィールドワークで来ていたその村のあぜ道を歩きながら，ハムカ大学の日本語学科長の先生は「いいですよ」と二つ返事だった。この時私もそばでその話を聞いていたが，まさか即答でそのような回答が返ってくるなんて思っておらず，その先生の返事をほとんど信じられなかった。

この時は特にこれ以上具体的な話が展開しないままに帰国した。帰国後もこの件に関して特にハムカ大学から連絡はなかったので「あのような急な話，きっと社交辞令での返事だったんだろう」，「すべては白紙になってしまったんだろう」と考え，あまり期待していなかった。

プログラム後の展開

このプログラムから 6 カ月が経った 2013 年 10 月，鳥取大学との協定を結ぶためにハムカ大学の学長をはじめ 5 名の先生が鳥取大学へ来られた。この時，学長や副学長の前で，私がハムカ大学で働く件について確認する機会があった。期待しないようにしていたとはいえ，この件はやはり実現できないと言われてしまうのは怖く，不安だった。しかしハムカ大学の先生方の返事はプログラムの時と同じだった。私だけが勝手に不安になり，信じられなかっただけで，ハムカ大学は最初から本気だった。私もこの時にやっと，「これは本当の話なんだ」と思った。

この時先生方から直接返事を聞くまではインドネシアで働くことはあまり信じられなかった。しかし，実は私の返事はほとんど決まっていて，チャンスがあればぜひ働きたいと思っていた。将来のことを考えて悩んだ時もあった。インドネシアのことはまだ分からず，そもそも海外で生活することも想像できず不安もあった。しかし，プログラム中にハムカの人たちと過ごした時間はこれまでになく幸せで，帰国後もその幸せは継続していた。ハムカの人たちと過ごして感じた自分の気持ちを信じたいと思った。

4.1.2 二回目の参加

参加した経緯

大学 4 年の時，もう一度このインドネシアプログラムに参加した。この時期，周りは卒業式に出たり，卒業旅行をしているころだった。卒業間際でしかも二回目のインドネシアプログラムに参加することは少し無理があったかもしれない。しかし，無理をしてでも，このプログラムに参加したいと思った。先に述べたように，一回目のプログラム後，幸せと感じることが増え，毎日わくわくしていた。インドネシアでの経験と出会いが私を支え続けてくれていた。

そのような一回目の自分の感じたものを疑うつもりはないが，インドネシアやハムカ大学の人び

との何が私をここまで惹きつけるのかよく分からなかった。言語や文化が違い，家族もいないインドネシアで働くことを私に決意させたものは何だったのか，はっきりと知りたいと思った。だからこそ，もう一度プログラムに参加し，ハムカ大学の人びとと過ごし，もっとインドネシアのことや彼らのことを知りたいと思った。

二回目の参加で感じたこと

初めてのプログラムの時は，目に映るもの，出会うものが全て新しく，興奮していた。二回目のプログラムでは発見と興奮の連続というよりも，前回のプログラムでは見えなかったハムカ大学の人たちの魅力を私はたくさん見つけた。

たとえば,彼らは目の前に起きたどうしようもない状況に文句を言うわけでもなく「仕方がない」と受け入れることができる。ホームステイさせてもらっていたハムカ大学の先生の車に乗っている時，道路に空いた大きな穴で，車体が大きな音をたてて擦れてしまった時があった。傷を心配したり，怒ったりするかと思えば，車内のインドネシアの皆さんは爆笑だった。彼らは車が擦れてしまったことを受け入れ，そのできごとを笑いに変えてしまっている。

また，彼らは相手を差別することなく，誰かを排除することもせず，みんなで一緒にいることができる。インドネシアには路上のゴミを拾ったり，歌を歌ったりしてお金を稼ぐ仕事がある。私は少なからず差別があると思っていた。しかし，彼らはないと言い切った。仕事の種類で優劣をつけようとせず，どの仕事も認められている。

そして，彼らの他者との距離はおどろくほど近かった。二回目のプログラム中，バンガローに泊まったことがあった。その地域は肌寒く，夜はさらに冷えた。毛布も足りず眠れずにいると，隣で寝ていたハムカの学生が，ぐいぐいと私の体を自分に引き寄せ，毛布をしっかりかけてくれた（写真 29）。そして，なぜか，その学生の隣の学生までも手をぐっと伸ばし，毛布からはみ出さないよう，私の体を抱き寄せてくれた。このような距離の近さは，私にとっては涙が出るほど嬉しいことであった。

写真 29　夜，毛布をかけて暖めてくれた学生たち
（伊藤撮影）

このような彼らと一緒にいると包み込まれているような安心感があり，彼らの前ではもっと甘えたり，素直に振舞っていんだと思えた。

インドネシアは私の「ホーム」だと感じた。たとえ言語が通じなくても，彼らはプログラムの時と同じように，体温を感じるほどの距離間で，私とまっすぐに向き合ってくれる。彼らといる時は自然と「素」の自分が出せた。だからインドネシアで働くことへの不安はなくなった。「この人たちがいるなら大丈夫だ」と私は確信した。

4.2 インドネシアでの生活

こうして私は二回のプログラム参加を経て，インドネシアで働くことを決めた。「インドネシアなら，この人たちなら，大丈夫だ」という確信をもっていたとはいえ，プログラムでの滞在は 10 日間

程度で，二回のプログラムで私が見て感じたものがインドネシアの全てではない。暮らし始めてプログラムでは関わることのなかった地域の人とも関わりはじめた。ここでは実際に住み始めて，地域の人とプログラムで出会っているハムカの人たちとどのような生活をしているのか述べていたい。

4.2.1 地域の人たちと私

私の住んでいる地域

まず，私がどのようなところに住んでいるのか少し説明したい。現在はハムカ大学の敷地内の寮に住んでいるが，以前は大学近くの下宿に住んでいた。そこは大きな一軒家の二階が下宿になっており，5〜6畳がくらいの部屋が10部屋あった。一階には下宿の管理人の家族が暮らしている。部屋にキッチンはないためご飯は外で買って家で食べるか，外食するかの二択だった。

下宿の周りは大学近くとあって，車が２台ぎりぎり通れるぐらいの道に学生がよく利用するコピー屋や安い食堂，飲み物店などが連なっている。他には住宅や学校もたくさんあり，少し歩いたところには果物の市場もある

この地域は都心部から離れており，私のような外国人は珍しいため，道ですれ違う男性や店の前でたむろしている人たちの視線をつねに感じていた。バイクを運転しているのに，わざわざ後ろを振り向いてまで私を見てくる人もいた。視線だけでなく，声をかけられることも多かった。当初インドネシア語で何を言われているのか分からず，視線を浴びたり話しかけられること自体が怖く，話しかけられても無視して通り過ぎることしかできなかった。

そのような私になんとかして関わろうと思ったのか，「ありがとう」や「ドラえもん」など，とにかく知っている日本語で話しかけてきた。それでも，私はそのような振舞いさえも怖く，また私をバカにしているようにしか思えず，警戒してしまっていた。

彼らとの接触をできるだけ避けて生活したいが，この地域は誰とも話さずに一日が終わることが考えられないほど，人と出会う機会，話す機会がある。商品に値札が付いた店はほとんどなく，聞かなければ値段は分からない。食事を買う屋台や食堂では，メニュー表がおいてあるところもあるが，メニュー表がないところもあり，自分で何が欲しいか言わなければならない。そして多くは自分の好きなようにカスタマイズできるところであるため，自分の好みを詳しく伝えなければならない。

たとえばラーメンのようなものを食べるときも，麺の種類はどれにするのか？何をトッピングするのか？香辛料は必要なのか？などを伝えなければない。メニュー表があれば指さすだけでいいが，ここでは必ず会話が必要になる。

もちろん学生や先生に頼めば食事を買いに行くのを手伝ってくれる。しかし，私は一人で頑張りたかった。なぜなら食事は毎日のことであり，ずっと甘えていたままじゃだめだと思っていたからである。そして，自分の食事のためにわざわざ誰かの助けを借りるのは申し訳ないと思っていた。しかし，インドネシア語が分からなった私にとって，ここで食事をすることはかなりの難題だった。

初めて一人で入った食堂

最初はあまり会話をしなくてもいいコンビニでご飯を買っていた。しかしコンビニの食事にも耐えられなくなり，食堂に行こうと決意した。インドネシア語に対する不安と，過剰なまでのまなざしを注いでくる男性への恐怖心があったため，男店主でなく，男性客が少ない食堂を探していた。ようやく見つけた食堂は，下宿から離れたところだった。そこは40代ぐらいの女性が営み，その女性の娘らしき人も近くに座っていた。その娘が英語を話してくれたおかげで，なんとかご飯を買うことができた（写真30）。

写真30　はじめてひとりで入った食堂の家族
（伊藤撮影）

その時，そのお母さんから「どこに住んでいるのか」「何をしているのか」「ここまで何で来たのか」などたくさん質問された。一人で下宿に住んでいることや他の店に入れずここまで歩いてきたことなどを話すと，お母さんは「お腹がすいたらここに食べに来なさい」と言ってくれた。この一言で，緊張と恐怖心でガチガチだった体はふっと楽になった。安心して食事ができる食堂をやっと見つけた。

食堂での出会い

この日以降は遠くても，一人で食事をする時はこの店に行った。この店以外はまだ一人で入ることができなった。最初の頃は食事を持ちかえり，自分の下宿で食べていたが，お母さんや娘と仲良くなり，店内で食べるようになった。

ある日，店内で食事をしていると狭い店内に男性客が2人入ってきた。私は内心「嫌だな」と思った。しかし，お母さんはそんな私の気持ちを知らず，その男性客に私のことを紹介しだした。男性客も私の前に座り，自己紹介を始めた。彼らのやりとりから，彼らはこの店の常連客だということが分かった。「どこから来たの？」などの定番の質問を一通りされたあと，彼らは急にドラえもんの寸劇を始めた。これならインドネシア語や英語が分からなくても伝わると思ったらしい。私より少し年上に見えるいい大人二人がジャイアンの太い声やしずかちゃんの高い声を真似しながらやりとりしているのは，たまらなく面白かった。私もお母さんたちはもちろん，店にいたみんなが笑った。

常連だけで盛り上がることなく，まるで私も昔からの常連かのように会話の輪のなかに自然に入れてくれた。それだけではなく，目の前にいる私を全力で笑わそうとしてくれた。お母さんは常連さんに私を紹介してくれたことや男性客が必死に笑わそうとしてくれたことは，新参者である私を認めてくれているように感じで嬉しかった。初めて会った人と一緒にご飯を食べ，みんなで笑うことがこんなに幸せだとは思わなかった。

私を見守る視線

行きつけの食堂をみつけて以来，地域の人と少しずつ繋がっていった。初めは怖くて警戒し，無視していたが，まずは顔を合わせてお互いがにこりと笑いあうことからはじまり，それからはあい

さつを交わしたり，立ち止まって会話をするようになった。道で出会うと「のりー」と私の名前を呼ぶ人，日本の歌を突然歌ってくる人，私がコンビニから出てくると何を買ったか聞いてくる人など実にさまざまな人がいた。恐怖でしかなかった視線や話しかけてくることは，「あなたと関わりたい！」という純粋な気持ちからだったのだと気づいた。彼らの強引なまでに絡んでくる姿勢は今では愛おしくすら感じ始めている。

そっと私を見守ってくれる地域の人もたくさんいる。食堂のおばさんは私の好きなもの，苦手なものを覚え，何も言わずともおかずをよそってくれる。朝パンを買う屋台に久しぶりに行くと店主のお兄さんは「昨日は早く出発していたね」と，私が店に行かない時も私のことを見てくれている。初めて行ったクレープ屋さんのおじさんは咳をしていた私に現地でよく効く薬をぼそっと教えてくれた。

これまで見られていることは怖いことだと思っていた。しかし，それは，私のことを気にかけてくれているということである。地域の人と少しずつ繋がっていくなかで，見られていることが嬉しくなった。警戒していたはずの彼らの視線に今は守られていると感じている。

4.2.2 ハムカ大学の人たちと私

インドネシアに着いた時からずっと私のことを気にかけてくれていた。私の知らないところで，たくさんの方が私のことを相談して，動いてくださっていた。彼らとはどのような付き合いがあるのか以下で述べていきたい。

どんなことがあっても信じられる人たち

長い休みに入る前，私は日本への一時帰国を予定し，帰国のための準備もしていた。しかし，トラブルがあり一時帰国が延期になってしまった。インドネシアの食や気候の違いのために疲れが限界にきていたうえ，帰国日までにテストの作成と採点を終わらせなければならず，ハードな日程で疲れていた。そのような状態での延期だったため，ショックも大きく，気持ちが落ち込んでしまった。日本のように予定通り物事が進まないことは分かっていたとはいえ，ショックで何も信じられなくなり，少しの間一人になりたいと思った。部屋に戻り一人になったかと思うやいなや，すぐに外から「のりえさん！のりえさん！」と私の名前を呼ぶ声が聞こえる。私の帰国が延期になったことを知った学生は，一人では絶対に食べきれない量のファミリーパックのお菓子を持って部屋に駆けつけてくれた。「休みの間，私の家にいなさい」と言ってくださる先生もいた。やっと一人になれた時も，心配した友達が電話をかけてくれた。電話にも出たくなかった私に，私の反応があるまで電話とメールをしてくれた。

「一人になりたい」や「電話に出たくない」など，この時の私は幼稚で自分勝手で周りの好意や心配に対して大変で失礼な態度をとってしまった。散々彼らの気遣いを無下にしてしまったのに，だれ一人私と距離を置く人はいなかった。私が一人でいたいと思った時ですら，誰も一人にさせてくれなかった。すぐに声をかけたり，すぐに抱きしめてくれたり，一緒に泣いてくれたり，片時も私から目をそらなかった。何があっても私から離れないでいてくれた。ここには何があっても信じられる人がいる。

守られているという実感

休日，バンドンというまちへ知人と出かけていたことがあった。このまちでは私の使っている

wi-fi は通信エリア外になり，インターネットがつながらなかった。連絡手段であるアプリの調子も悪く，連絡がつきにくい状況だった。

そのような時，日本にいる私の母は私から返事がこないことを心配し，以前連絡先を教えていたハムカの先生に私の様子を尋ねようと連絡をした。しかし，その方も当然私と連絡がつかない。すると，その方はハムカの先生や学生に連絡し，方々で私の捜索を始めてくださった。大学の警備員にも私を見なかったか聞き，必死に情報を集めてくださっていた。

そのような状態になっているのも知らず，私は大学へ戻った。それは夜だったのにも関わらず，学生が正門で私を待っていた。汗をかいて焦った表情の学生を見て，すごく心配してくれていたことが分かった。次の日は会う人会う人に，「先生，どこに行っていたんですか！？」と心配された。ハムカのみなさんは本気で心配してくれ，連絡をとりあって私を探してくれていた。今回は何も問題がなかったが，私に問題があった時彼らが全力で守ろうとしてくれるのが嬉しいほどに分かった。

こちらではよく「守る」という言葉が使われる。二回目のプログラム中，ハムカ大学の先生方と仲野先生と私で，私がハムカ大学で働くことについて具体的に話す機会があった。インドネシアは日本とは保険制度などが違い，病気などなにかあった時の心配を口にすると，日本語学科長の先生が「紀恵さんは私たちが絶対守ります」と言ってくださった。その場にいた他の先生方も戸惑う様子もなく「うんうん」とうなづいていた。

三回目のプログラムの時，仲野先生が「紀恵さんをよろしくお願いしますね」と一人の学生に言うと，私よりも 4 歳も年下その学生は「紀恵先生のことをぜっっったいに守ります！」と言い切った。

大学を守る警備員たちは「大学の中は安全。そして，のりが道で歩いているのがみえると，何かないか私たちは見ている。悪い人がいればのりは私たちが守る。だからのりを傷つける人はいない」と言ってくれた（写真 31）。私はこれらの言葉の度を聞くたびに涙がとまらない。そして，ここに来てよかったと心の底から思う。上で述べたエピソードからも分かるように，この「守る」ということが言葉だけではない。彼らは本当に人を守る。このような人たちに囲まれて働けることは本当に幸せである。

写真 31　ハムカ大学の警備員たちと伊藤（右端）
（2015 年 9 月 24 日　仲野撮影）

4.3 プログラムの受け入れ側として

4.3.1 学生たちのこと

鳥取大学の学生について

プログラムに参加した学生は，大学の後輩であり，過去の自分を見ているようで，彼らのことを知りたいと思った。一方で，このプログラムにおいて，ハムカ大学の学生と鳥取大学の学生同士が一緒にいる時間がなによりも大切だと思っていた。そのためプログラム中，学生に話しかけることは少なかった。

彼らの様子を見ていると，プログラムの折り返しのあたりから表情がぐっと変わっていくのがみて分かった。初めて出会うインドネシアに戸惑いを感じながらも，安心しているようで，いつも笑顔だった。インドネシアの人びとの大きすぎる優しさに，嬉しくて涙を流して喜んでいた。彼らもインドネシアの人たちの愛にしっかりと包まれていることが分かった。鳥取大学の学生が，のびのびと踊ったり，どんどん笑顔になったり，ハムカの人びとのまっすぐな優しさに触れ，涙を流したりしている様子は，まるで二年前あるいは昨年の自分とまったく同じであった。インドネシアでの経験や出会いが彼らにどのような影響を与えるのか分からないが，プログラム後もずっと心に残り続けるものであればいいなと願っている。

ハムカ大学の学生について

一方，ハムカ大学の学生たちは日本人の生の日本語に格闘しながらも，自分のもっている日本語でコミュニケーションとろうと一生懸命だった。鳥取の学生の体調のことなどを相談している姿は本当に愛おしかった。プログラム中，全てが予定通りということではなかったが，ハムカの学生が陰で動き，プログラムを支えていた。姿が見えないと思えば，お昼の食事の手配をしに出かけていたり，ホームステイ先の先生と打ち合わせをしていた。毎日遅くまで付き合い，相談や情報を共有し合っていた。指示する先生方がいるとはいえ，学生たちがこんなに動いているとは，受け入れ側になるまで知らなかった。ハムカ大学の先生方のご協力はもちろん，学生の協力があってのプログラムだったと感じた。

4.3.2 自分自身のこと

私にとって今回は三回目のプログラム参加だった。まだ私自身がインドネシアでの生活や大学に慣れておらず，受け入れ側とはいうものの，頼りない存在だった。ハムカ大学か鳥取大学かどちらのスタッフなのか立場も微妙だった。プログラム中，鳥取の学生と話す時間をとっていただいた。大学時代のこと，今ここにいる理由，今のインドネシアでの生活を話した。学生は初めてのインドネシアに戸惑っていた頃で，私の話もまとまりがなかったため「この人，何を言っているんだろう」と思われるだろうと思っていた。しかし，学生が思っていた以上に私の言葉を受けとめてくれて，涙を流しながら自分のことも話してくれた。その姿が，大学時代とにかく不安で悩んでいたこと自分と重なり，学生たちの気持ちが痛いほど分かった。気づいたら，不安で泣いている学生を抱きしめていた（写真32）。

写真 32　大学の後輩を抱きしめる
（2015 年 3 月 18 日　仲野撮影）

プログラム中，鳥取の学生たちとしっかりと話したのはこの時が初めてで，お互いのことはまだよく知らない時だった。しかし「今度は私が守らなきゃ」と思った。まだまだインドネシアでの生活は落ち着いておらず，自分のことで精一杯なところもあった。それでも目の前の後輩を守りたいと思った。

インドネシアに来てまだ1カ月余り，大学で教え始めてからまだ数週間，日本語教師という仕事も始めたばかりで，まだまだ頼りなく，不安も大きかった。しかし気がつけば目の前の後輩たちを守りたいと思うようになっていた。私のなかで何かが劇的に変わったり，たくましくなったわけではない。しかし，インドネシアの人びとから愛され，守ってもらっているという安心感が，私の表情や振舞いに影響を与え，誰かを守ろうという気持ちにまでさせてくれたのだと思う。インドネシアの人びとが私を愛し，私を守ってくれるから，私も目の前の後輩を愛し，守りたいと思ったのだと思う。自分が愛されていること，自分の今いる環境がどれだけ恵まれた幸せな環境なのかを後輩との関わりのなかで気づかされた。

4.4 まとめ

インドネシアで過ごした8カ月の間には，日本ではかからない病気になったり，ビザの更新がうまくいかなかったり問題はたくさんあった。ストレスも爆発して，本気で怒って，たくさん泣いた。疲れている時でも，コンビニで私が何を買ったかみんな知りたがることなど，地域の人との関係が煩わしく思うこともあった。しかし，あらためて自分が参加してきたプログラムとインドネシアでの生活を振り返ると，自然と嬉しかったことや幸せだったことばかりが浮かんできた。問題と思っていたことも，実は大した問題ではなく，彼らと一緒なら乗り越えられることばかりであった。

そして，振り返れば振り返るほど，どれだけ自分がハムカや地域の人たちに愛され，守られているかが分かる。今はまだ彼らからもらってばかりである。これからは私が彼らを全力で愛し，彼らのことを守っていきたい。そして，彼らに返すだけではなく，他の誰かのことも愛し，守れるようになりたいと思う。

5. おわりに

以上，伊藤のインドネシアプログラムおよびインドネシアでの経験を記述した。

本稿の最後に，今回のプログラムに参加した学生たちの言葉を借りながら，このプログラムの成果について概観したい。

5.1 他者イメージの変容と自己の相対化

このプログラムは具体的あるいは合理的な目的を達成することがねらいだったわけではなく，あくまでも「等身大のイスラームに出会う」という素朴なねらいが設定されていた。それはイスラームにまっすぐに出会うと同時に，イスラームあるいはインドネシア社会が鏡となって，自分自身の姿が映し出されるということにもつながった。

まず学生たちは，「イスラーム」あるいは「途上国」という言葉から抱いていたイスラームあるいはインドネシアに対するイメージが大きく変わったようだ。ある学生は次のように述べている。

> 私の出会ったインドネシア人はとてもやさしく丁寧で，まっすぐ私に語りかけてきてくれるということである。私は，彼らの笑顔を忘れることはできないだろうと思っている。そして，これらの笑顔はまっすぐに私にさまざまなことを語りかけてくれた。それは自分の生き様であったり，思考であったり，社会のことなどだ。

また，別の学生は「イスラーム」というイメージが変容していったことについて言及している。

「イスラーム過激派組織」といった名前をテレビで耳にすることで，何の知識もないまま「イスラーム」というワードに対して，危険という印象を持つようになった。……私はインドネシアを訪れる前に１ヶ月ほどカナダに行ったことがある。周りの友人や家族，親戚に「カナダに行く」と言ったとき，「いいなぁ！楽しんできてね！」と言われることが多かった。しかし，今回「インドネシアに行く」と言うと必ず「テレビでイスラーム，イスラームって言っているけど大丈夫なの？危なくないの？」と言われることがとても多かった。やはり，「イスラーム」に対して，危ないというイメージが持っている人が多いのではないかと思う。

結論から言うと，研修を通して実際に見て感じたイスラーム教は，私が今まで思っていた“怖くて危ない”ものとは全く違うものであった。１日に５回あるお祈りは，思っていた以上に時間にルーズだし，モスクの中では私語も写真撮影も大丈夫だった。豚肉を食べても気が付かなかったら大丈夫と言っていたし，ラマダンは期間を自分でずらすことも出来るらしい。私は，イスラーム教は厳格で守らなければ何か罰があるのではないかとまで思っていたし，１日５回のお祈りやラマダンはとても辛くて彼らは我慢しながらこなしているものだと思っていた。しかし，彼らにとってそれらは“生き方”であると聞き，それでも最初はどういうことなのか理解できなかった。しかし，約10日間ムスリムである彼らと行動を共にすることによって，少しずつ“生き方”という意味が理解できるようになった。それはおそらく私の中にあった「宗教＝怖い」というイメージがなくなったからかもしれない。インドネシアに行くまで，私は本当にイスラームに対して勝手なイメージを持ち，さらにそのイメージを疑うことなく日々を暮らしていた。

等身大の他者に出会った学生たちは，それまで自分がもっていた他者に対する勝手なイメージが大きく変容していくのを実感する。さらには，イメージが変容あるいは修正されるのみならず，出会った人たちの姿を見てそれまでの自分の生き方自体を反省的に問い始める学生が多く現れるのもこのプログラムの特徴のように思われる。

たとえば，ある学生は次のように述べている。

今まで，政治のことはよくわからないし，私が考えても考えなくても関係ないでしょうと全く向き合おうとしていなかった。自分たちの力で独立し，自分たちの国という意識が強いインドネシア人の姿や，インドネシア研修で同じ班だった子が真剣に日本社会のことを話している姿を見て，私は自分がこの国のことを知ろうともしていないことに恥ずかしい気持ちと情けない気持ちでいっぱいだった。それから私は，今まで何気なく見ていた政治に関連するニュースを，もっと自分のこととして真剣に考えるようになった。鳥取は何もないと言われることは多いし，以前は私もそう思っていた。しかし，鳥取でどういう動きがあってどのような人が暮らしているのか，その人たちがどのような想いを持っているのかを知っていくうちに，鳥取ってすごく面白いなぁと思うようになった。

上のコメントは，インドネシアに行ったことがきっかけになって自分の足元を見てみよう，自分の地域と出会いなおしてみようという気づきや意思を受け取ったといえるだろう。

また，次のコメントは，自分の生き方そのものを反省し始めたことが明確に読み取れる言葉である。

わたしたちに対して敬意をもった向き合い方をしてくれたおかげで，わたしはわたしのこれまでの生き方を振り返り，わたしを取り巻く社会について考えることができた。彼らのように人を決めつけず，１人の人間として誰かと向き合えているだろうか，誰かを１人の人間として見ているだろうか，わたし自身と正面から向き合えているだろうか。わたしはたくさんのことを彼らから静かに問いかけられた。一貫しているのは，わたしがわたしを含めて，人を大切にしているか，ということだ。これがわたしがインドネシアで得た気づきだ。人を決めつけず，敬意を払い，まっすぐ向き合うことをさりげなくやれる彼らをうらやましく思い，自分をもどかしく感じ，そしてわたしが変えられたのだ。

興味深いのは，インドネシアあるいはイスラームのことを学びたいと出かけていったはずが，考察の主体と対象が逆転して，インドネシアの友人たちから自分が問いかけられていると感じ始めたことだろう。まさに「わたしが変えられた」のだ。

また，それまでの自分の生き方を反省するのみならず，これからの行き方の模索へとつなげようと格闘する言葉も目立つのは興味深い。たとえば次の言葉が挙げられよう。

現実から逃げ，自分と向き合おうとしなかった弱い自分と少しずつではあるけれど，向き合えている。誰かを大切にすること，毎日をていねいに生きることへと変化している。一番の変化は，私自身が「誰かを頼る」ことができていることだと思う。自分の殻をやぶり，困ったことがあったら，友達と納得するまで話しをするようになった。毎日をていねいに，支え，支えられながら，今を一生懸命生きること。当たり前であるが，その当たり前で大切なことを学んだ。

「誰かを大切にすること，毎日をていねいに生きること」あるいは「誰かを頼る」というとても基本的な作法を体得しようとしている。「今を一生懸命生きる」というのは，この学生が言うように「当たり前」のことであろうが，このようなきっかけがないとそのような覚悟をもつことすら難しいのがこの時代の困難なのかもしれない。そのような大切な基本に気づけたのが，この学生にとってはこのプログラムの大きな収穫だったのではないだろうか。

さらには，このような気づきが，これからの自分を支える力に転換されていく様子もうかがえる。たとえば次のコメントにそれが現されていると考えられる。

みんながレミオロメンの「3 月 9 日」を歌い始めた。

瞳を閉じればあなたが／まぶたの裏にいることで／どれほど強くなれたでしょう／
あなたにとって私もそうでありたい。

このフレーズを聞いた瞬間，再び涙が止まらなくなった。悲しくもなんともないのに，バスの中１人で泣いた。私はおかしくなってしまったのか。日本で聞いたら単に「いい曲」であるこの曲に，言葉ひとつひとつに，インドネシアで感じた優しさを照らし合わせながら聞いた。今の私にとって，ここにいるみんなは愛おしく，心強い。歌を聞きながら目をつぶると，そこには，もうインドネシアのみんながいた。私のそばにはみんながいてくれる。私には大切な「心

の友」がたくさんいる。

インドネシアで出会った友人たちはかけがえのない友になり，離れてもずっと「心の友」でい続けることだろう。それは離れていても自分を支えてくれ，いつもまぶたの裏に存在し，自分を強くしてくれる友だ。

それが学びへのモチベーションを上げることにもつながっていく。ある学生は，インドネシアから帰ってきてから「授業が楽しくてしかたがない」という。それはインドネシアの友人たちの力が自分の中に織り込まれて，自分の力に転換されていきつつあるということなのかもしれない。

> インドネシアから帰ってきて，授業が楽しくてしかたがない。今までも楽しいと思うこともあったが，その比ではない位に楽しい。授業の一番多い水曜日が待ち遠しい自分がいる。それまでなんとなくノートをとっているだけ自分から，ノートに思ったことを書き加えている自分に変わっていた。授業の感想を書いていると気付いたら授業時間がとっくに過ぎることも多くなった。自分自身の変化に戸惑っている。
>
> ……インドネシアから帰ってきて，あれ？授業楽しくない？と気付いてしまったのである。気付いてからはもう大変である。時には睡眠不足で眠たくなったり，身が入らなかったりすることもある。しかし考えずにいられない，楽しまずにいられなくなっていたのだ。もはや学んでいるという感覚ではない。楽しいことをしている，遊んでいるという感覚に近い。何も苦ではない。そして学びは自分と離れたもの，ただ新しい知識を吸収するというものではなくなり，自分に引き寄せて，人生を考えることそのものになっていったのだ。その結果，生きているということを実感する大切な時間になっている。私にとって，とてもかけがえない時間になった。

また次のようなコメントもある。授業だけではなく，インドネシアプログラムが終わってからいよいよ自分が大切に思っていることを考えざるを得なくなったというコメントである。「インドネシアから帰ってきて自分の歯車が動き出した」という言葉は興味深い。

> それよりも自分自身のことをたくさん考えることができた。私は何を大切にしているのか，どう生きたいかなど，今まで考えたことはなかったが考えなければならないことが思い浮かぶようになり，考えずにはいられなくなったのだ。「インドネシアから帰ってきてからもプログラムは続く」「プログラムが始まる」このことばが胸に染みる。自賛はしたくないのだが，インドネシアから帰ってきて自分の歯車が動き出した気がする。

この記述からも，インドネシアで出会った人たちの力が自分の力あるいは自信に転換されている様子がうかがえる。

5.2 織り込まれる他者と自己

もちろん，インドネシアで自分が力や愛をもらうということは，そのような一方的な関係性に限定されるものではなく，次の段階として，それを誰にどのように返すことができるのだろうかという課題も生まれている。たとえば次のコメントにそのような格闘が描かれている。

インドネシアで出会った人たちからもらった，温かさや優しさ，たくさんの愛を私はどう恩を返していけばいいのだろう。インドネシアのみんなが，日本に来たとき，私たちは同じような優しさや思いやり，それ以上の愛を伝えることができるだろうか。私が出会ったインドネシアのみんなは，温かく優しさにあふれ，人として豊かであると感じた。ふとしたときに，「私は幸せものだ」と感じることが何回もあった。人と人とのつながりや，人がもっと安心できる場所をつくりたい。インドネシアでの経験は，自分の生き方や生きてきたものを見直すきっかけとなった。

インドネシアに行く前の私は，せかせかと時間に追われ，この大切な「今」を忘れていた。しかし，そんな現実から遠ざかり，逃げていた自分にはもう戻れない。瞳を閉じればインドネシアのみんながいて，遠く離れていても，つながっていることを実感できる。私には，辛いとき，支えてくれる大切な「心の友」がいる。私も，インドネシアのみんな，家族や友達，たとえ初めて会う人であったとしても，その人たちの支えとなりたい。私がそうしてもらったように。直接恩を返すことはできないかもしれない。しかし，いつかどんな形であっても，みんなのもとへ恩を返せるように，大切なことを教えてくれた「心の友」の笑顔や優しさを忘れず「今」を生きたい。

自分がもらった力や恩を，誰にどのように返していけるのか。これらのコメントは，このような無償の相互扶助の輪の中で人は生かされるということを実感しはじめたように読める。換言すれば，これは「社会的ネットワーク，およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」（Putnam 2000=2006:14）である社会関係資本そのものであろう。このプログラムでは学生たちが出会うことによって社会関係資本が創出されているといえるのではないだろうか。

そのような社会関係資本あるいは離れていても自分を支えてくれ，そして自分も人を支えたいという意思をもたせてもらえる「友人」という存在の再考にもつながっていく。

日本では「また会いましょう」とタテマエで言うけれど，彼らはいつだって本気でぶつかってきてくれる。その証拠に，あれから半年たった今でも，「会いたいよ」とビデオメッセージ越しに泣いてくれる。わたしはそんな心からの友達をインドネシアでつくることができた。うれしいという言葉では言い表せないくらい，本当に，とてもうれしい。また，インドネシアで得た大事な掛け替えのない一生の友達とリアルな経験が，今後わたしの仮面を取り去り，さらなる変化を生んでいく大きな力になると強く感じる。

今回本当に，わたしの不自由な頭と表現力では表現することのできないくらいのたくさんの力をもらうことができた。本当に感謝してもしきれない。心の底からこの出会いにありがたさを感じ，関わった全ての人にひとりひとり，お礼を言いたい。そして，人を“ひとりの人”としてみることができ，壁や境界線をつくることを知らない，“持たない力”を持った彼らのようになりたいと心から思う。わたしはインドネシア人になりたい。

国籍の取得というような制度の次元ではなく，自分の存在そのものの次元で，「わたしはインドネシア人になりたい」という願望は根源的に不可能に思える。しかし，その一方で，その願望は果たして不可能と言い切れるのだろうかという疑問もわいてくる。「彼らのようになりたいと心から思う」あるいは「わたしはインドネシア人になりたい」――このたいへんシンプルでまっすぐな願望は，

それまで紹介してきた学生たちのインドネシアの友人たちがもつ愛情や思いやりあるいは優しさへのあこがれや感謝とはおよそ似て非なるとらえ方のように思う。かなり単純化していえば，あくまでも近代的な「自立した個人」という，インドネシアプログラムに参加するまでに教育されてきた理念を前提にしてインドネシア社会をとらえているのではなく，この「わたし」はインドネシア的共同体の中に取り込まれ，近代的個人とは別次元でインドネシア共同体（あるいはムスリム共同体）の中に生きるインドネシア人たちの無数の「わたし」とすでに溶解しあっているのではないだろうか。

日本社会における個人のあり方は，「自立した個人」を（少なくとも理念的には）めざしてきた。一方，インドネシアの，特にイスラームの個人のあり方はあくまでも共同体に包摂されていることが前提になっている。そこにあるのは西洋近代的な「自立した個人」という理念ではなく，見返りを求めずに人を助けるという規範を全身で背負った人たちの集合体である。そこには実は「日本―インドネシア」という境界線すら実はもう存在しないのだ。

換言すれば，このようにも言えるかもしれない。わたしたちは自立した主体として，自分とは異なる他者（ここではたとえばインドネシア人やムスリム）を問うているように思いがちであるが，実は問われているのはそのように自己と他者と二分法で考えてしまう自分の思考そのものかもしれない。

「『独立・自立した個人』という近代的人間像を批判的に乗り越え，時空間を超えてつながる無数の他者たちが幾重にも織り込まれて〈わたし〉が存在する」（仲野 2011:124）と考えた時，わたしたちはいかにインドネシアで出会った友人たちの祈りや願い，あるいは存在そのものを自分のものにすることができるだろうか。他者をいかにして自分の内に織り込んでいけるのだろうか。

人類学者の竹沢尚一郎（1997:213）が言うように「他者とは私たちがなりえたかもしれないもうひとつの自分であるのだから，他者とは私たちの可能性であり，それゆえ私たちの未来」であろう。そう考えるならば，インドネシアプログラムの本質は，わたしたちはひとつであるということ，その気づきにあるのではないだろうか。そうすると〈わたしたち〉の生はインドネシアの友人たちの生とともに一枚の布に織られていくことによって存在する，あるいはもう既に織られているといえるのかもしれない。それは「わたしたちはひとつである」ということの認識である。

このような意味で，インドネシアプログラムは他者から学び「他者の力」を借りながら鍛え上げられていくような，まさに「生き方としての学問」（鳥越 2006）であろう。それは揺れながら試行錯誤し，他者と自己が相互に織り込まれながらお互いが変容し続けていくような実践であるように思える（仲野 2011:124）。

「わたしはインドネシア人になりたい」――このような願いが学生から生まれたのはこのプログラムの大きな収穫であった。他の学生の経験も，この気づきからそう遠くないところにあるように思う。

参考文献

外務省「各国・地域情勢　インドネシア」http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/indonesia/data.html#04（2015年1月30日ダウンロード）

竹沢尚一郎, 1997,『共生の技法――宗教・ボランティア・共同体』海鳥ブックス.

鳥越皓之, 2006,「学問の実践と神の土地」新崎盛暉・比嘉政夫・家中茂編『地域の自立　シマの力

（下）』コモンズ, 276-294.
仲野誠，2011，「生きられる地域の〈リアリティ〉」柳原邦光・光多長温・家中茂・仲野誠『地域学入門―〈つながり〉をとりもどす』ミネルヴァ書房, 104-125.
仲野誠・小泉元宏・アクバル・ナドジャル・ヘンドラ・ハリ・ナレディ・デスビアン・バンダルシャ，2013，「『海外フィールド演習』における他者との出会いの効用―インドネシアプログラムを事例として」『地域学論集』10(2): 1-44.
仲野誠・小泉元宏, 2015, 「『海外フィールド演習』における他者との出会いの効用（2）――インドネシアプログラムに参加した学生の経験から考える」『地域学論集』11(3): 55-108.
水本達也, 2006, 『インドネシア――多民族国家という宿命』中央公論新社.
Burhani, Ahmad Najib, 2013, “Liberal and Conservative Discourses in the Muhammadiyah: The Struggle for the Face of Reformist Islam in Indonesia,” Martin Van Bruinessen ed., *Contemporary Developments in Indonesian Islam*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 105-144.
Putnam, Robert D., 2000, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, New York: Simon & Schuster. （＝柴内康文訳，2006，『孤独なボウリング――米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房）.

資　料

「2014年度 海外フィールド演習･インドネシアプログラム」に参加した鳥取大学地域学部学生のレポート

本稿の資料として，このプログラムに参加した鳥取大学地域学部の 8 名の学生たちが帰国後の2015年4月に提出したレポートを掲載する。それぞれの学年は2014年度時点のものである。

“ひとりの人”として出会う
――他者に敬意をもって向き合うインドネシア社会から得たこと――

中村 稜子（地域政策学科3年生）

はじめに

大学3年生の3月，わたしはインドネシアへ行った。たった10日間の短いプログラムだったが，これに参加したことで，わたしの人生が大きく変わった，と言い切ることができる。大げさな表現ではなく，むしろ，これでは言葉が足りないくらいの大きな学びと生きる力を得た経験となったのだった。

これから記述するのはあくまで“わたしの体験”だ。“わたしの体験したインドネシア”を“わたしのために”書いた。このレポートがあわよくばたくさんの人に読まれ，あわよくばその中の誰かにとって何らかの刺激になれば，とてもうれしい。

1. “リアルなインドネシア”

インドネシアへ着き，最初に圧倒されたのは，インドネシアという地の異国感だった。まだ肌寒い日本とは異なる年中暖かい気候,インドネシア独特のお香のような香り,聞いたことのない言語,たくさんの車が渋滞している様子，その脇のカラフルな看板や屋根によって色であふれている町並みなど，インドネシアの全てが珍しかった。わたしはインドネシアを訪れたことはもちろん，海外へ出たことがほぼ初めてだった。日本と異なる場にいる，と直に体感した時だった。

しかし，この時わたしが感じた“異国のインドネシア”は，わかりやすく目に見えていて，インターネットで調べればわかるような情報に過ぎない。この後わたしが見て感じていくことになる“リアルなインドネシア”は，インターネットでは知ることのできない，わたしの住む社会との違いを身体全体を使って感じさせられる出来事ばかりだ。そしてその違いに気づけたことこそが，このプログラムで得られた大きな発見だった。わたしの感じた“リアルなインドネシア”とはどのようなものだったのか，これから述べていきたい。

2. 受け入れるという力

2.1 受け入れられる感覚

インドネシアでは,常にハムカ大学の学生とその卒業生や先生がわたしたちに付き添ってくれた。

特に多くの時間を共にしたのは，ハムカ大学の学生だ。10 日間，寝食を共にした彼らは，日本のことが好きなごく普通の同じ年代の学生だった。だからこそわたしたちと同じ日本語を話す彼らが，同じ日本人に思えることが度々あった。いや，日本人として捉えるというよりは，彼らをインドネシア人だと意識して接することが少なかった，といった方が正しい。そのくらい彼らはわたしたちに壁を感じさせなかったのだ。自然と懐に入れてもらえたために，わたしたちは彼らに警戒することがなかった。

このことにおかしいと気づいたのは，日本へ帰ってからだ。彼らはなぜあんなにもたやすく“異国人である日本人”を受け入れ，心に自然に入ってきたのか。しかし，このプログラムを振り返った時，わたしには彼らから特別で衝撃的なことをしてもらった覚えがなかった。にもかかわらず，「インドネシアの彼らは受け入れてくれていた」ということが，帰国してから確信をもってわたしのなかにインプットされ続けている。どこからくるのかわからない謎の根拠と，根拠の答えになりそうな経験がないことに頭が混乱した。なぜわたしは「受け入れてくれた」と考えたのだろうか。

2.2 心から自然と相手を思いやる

落ち着いてこのインドネシアプログラムを振り返ってみると，彼らがさりげなくやっていたことがたくさんあることに気づいた。例えば，トイレへ行く時は必ずついてきて，誰も 1 人にならないように配慮してくれていた。フィールドワークが終わるたびに，「どうだった？」と話しかけられ，わたしたちが楽しんでいるかを常に確認していた。体調の悪い学生が別室で休んでいる一方でわたしたちが盛り上がっていたら，「彼のことを忘れないで」と思い出させた。

このような配慮はできそうなこと，ともすればわたしたち日本人の方が自然とできる，と思われるかもしれない。けれど多くの日本人はできないだろう。なぜなら日本人とインドネシア人では，“受け入れる力”が違うからだとわたしは感じている。

ここでわたしが言いたい“受け入れる力”とは，“心から自然に相手を思いやれる力”のことだ。インドネシアでもらったたくさんの優しさは，彼らが“わたしたち（日本人）のために”やっていた。寂しくないように，楽しんでもらえるように，と配慮され，みんなで 1 つだという意識を持たされた。わたしたち一人一人をないがしろにせず，“心で”対応してくれた。しかも，これらはすべて無条件で見返りを求めず，“自然と”，インドネシア人の誰もがやってのけていた。「彼らのように受け入れることはなかなかできることでない」とどこかで感じていたからこそ，日本へ帰ってから彼らが受け入れてくれたと確信していたのだ。

2.3 日本を疑う

わたしは，「優しく，おもてなしの心を持っている」と言われる日本を，インドネシアへ行くまで，その通りだと思って過ごしてきた。けれど，インドネシアの友人たちに出会って，その優しさやもてなしは上辺だけのものだったと気づいた。それは，日本では，インドネシアのような“受け入れる力”が当たり前に行われていなかったからだ。もともとはインドネシアと同じく，“心から自然に相手を思いやれる力”を備え，他者に敬意を払ってもてなしをしていたはずの日本は，いつしか形や枠だけが残され，それが中身のない作業となってしまっている。現に，田舎のおばあちゃんのもてなしとファミリーレストランのもてなしは全く違う。受け入れている風に見せかけて，それは自分を飾り立てるための手段になっており，心から相手のために尽くすのとは根本的に違う。わたしたちの住む社会では，“思いやる行動は礼儀のうち”であり，心が伴わない。つまり自分が悪く言わ

れないようにするための仮面なのだ。これからこの仮面の人たちに，仮面をかぶりなれた自分に，どう立ち向かえばいいのだろうか，とインドネシアでの経験を通して考えるようになった。

3 仮面に気づく

3.1 空気を読む社会「日本」

ここで少しわたしの話をする。これまでわたしは話す相手が今どのような言葉を欲しているかを考えることが当たり前だった。その人との会話の中で，わたしに何と言ってほしいのか，常に読み取ろうとしていた。そして，わたしは相手が言ってほしそうな言葉を選んで返していた。おいしくなくてもおいしいと言ったり，面白くなくても笑ったりした。

インドネシアで他者を受け入れる力を知ってから，わたしが発した“相手に合わせた言葉”たちは，相手のためになっている風に見せかけた，上辺の言葉だったと気づいてしまった。その言葉には日本のもてなしと同様に，心が入っていない。わたしが相手のためを思ってしていたことは，“相手のため”でなく“相手の期待に応える自分のイメージを維持するため”だと感じた。このことに気づいたとき，自分に大きくがっかりした。

今の日本社会では，空気を読まなければならない場面が多々ある。わたしはこれまで人と関わるときに空気を読んで返答をしてきたのだが，インドネシアの彼らと接したことで，そもそも気に掛けるべきは空気を読むことではないことに気づいた。空気を読まなければいけないのは，自分の価値を貶められないようにするためであった。むしろそれよりも先に，自分のことよりも先に，相手のことを考えられる人になりたいと思った。インドネシアの友人たちは空気を読む以前に，わたしたちを受け入れる努力をしていた。その様な努力や気遣いを，わたしたちはしなければならない。

インドネシア人が空気を読んでいないわけではない。むしろわたしたちよりも空気を読んでいた。繰り返すことになるかもしれないが，彼らは“自分のために”ではなく，“相手のために”空気を読んで行動してくれていた。

そのように他者のために空気を読める日本になれば良いが，今は「空気を読むこと」＝「場を平穏に保ち，争いを避け，自分が攻撃されないように行動すること」のように思う。それならばいっそ，空気を読むことは気に掛けるべきでないと思ったのだ。

3.2 “いい子”はあたりまえ

このような空気や価値観が支配するこの社会のなかで，わたしはいったいどのように生きてきたのだろう。

振り返ってみると，わたしは，これまでよく「いい子だね」と言われてきた。この言葉をかけられると，たいてい嬉しく感じ，同時にホッとする時があった。「これであってるんだ」と思った。だから，大人の期待にそうようなことをしたり，言われたとおりのことを率先してやったりしていた。宿題をやれと言われたらそれをするし，先生をおかしいと思ったこともなかった。先生を悪く言う人がいたら，なぜ悪く言うのかわからなかったし，言われたとおりにした方がいいのに，と思っていた。ごく自然と。“いい子”でいるのが当たり前で，わたしよりも上の人に従うことは当たり前，反抗するどころか，従うことへの疑問もわいてこなかった。

3.3 “いい子”を演じていたわたし

ここで思い出すひとつのエピソードがある。わたしが小学5年生の時，担任の先生に，不登校に

なってしまった同級生と一緒に学校へ通うことを頼まれた。いい子のわたしは断る理由がなかった。その同級生がかわいそうだし，わたしは先生に頼まれたのだから行こう，と思った。今思えばとても失礼なことだ。なぜなら，わたしはその同級生と友達になるために行ったのではなくて，“かわいそうな子を救う”という“先生のお達し”があったから，行っただけだからだ。そこにわたしの意思はない。もちろんその人のことを本当に心配していたし，一緒に学校に行けるようになってほしい，と思ってはいた。しかし，言われたからやっただけの受動的な行動であり，かつ無自覚な上から目線の気持ちがあったことは，今振り返ってみれば事実である。

その同級生を学校に行かせるという目的で通っていたため，結局わたしは友達になることができなかった。それは，その人の気持ちになってみれば当然だったろう。友達のふりをした同級生と，いっしょに学校に行くことはできないだろうから。わたしなりに努力していたとは思うが，“不登校でかわいそう”というレッテルを彼女に張り付けたまま接していたために，その同級生はわたしを信頼することができなかったのだ。わたしは“いい子”という役割を演じただけだった。

3.4 ジロジロ見られないインドネシア

一方，インドネシアで驚いたのは，わたしが不登校の同級生を“不登校の”というレッテルを貼り付けてみていたのとは逆に，“外国人”としてわたしたちが見られなかったことだ。わたしたちはプログラム中にさまざまな場所へフィールドワークに出かけたが，どこへ行ってもジロジロと見られることはなかった。見るからに“違う”わたしたちに対して，インドネシアの人たちはとても“鈍感”だったのだ。

日本にいる時，外国人を見れば多くの人が“見る”。他の日本人が目の前を通り過ぎるのには鈍感だが，“違った人（つまり外国人などの明らかに日本の中で普通でない人）”が通ると，瞬時に注意を向け，近づかないようにしながらも，眼の端に捉えて様子をうかがう。日本は，“普通でない”人にとても敏感なのだ。実際，インドネシアからやってきた留学生と日本の定食屋で並んで待っている時，留学生の女の子が突然わたしの方へ身を寄せてきたので，「どうしたの？」と聞いた。すると，「みんなが見てる」と言うのだ。ムスリムの女性が頭にかぶるジルバーブが珍しかったのだろう。わたしもそちらへ目を向けると，彼女が浴びていた人びとの視線をわたしも感じた。とても不快だった。“ひとりの人”への注目ではなく，“ジルバーブという異質なものを被った人”への注目であることがわかったからだ。

その人自身を見ようとせず，“ジルバーブを被った人”という外見への興味本位的な視線は，とても不気味で気分が悪い。その留学生の女の子は，「インドネシアではジロジロと見られない」と言っていた。もちろんイスラム教徒の多いインドネシアでは，ジルバーブを被る彼女が目立たないのは当たり前だが，インドネシアの人から見て普通でないわたしが，インドネシアでジロジロ見られる経験をしなかった。外国人に対して“鈍感”だったと書いたが，“外国人”というレッテルに鈍感だった。あるいはそのようなレッテルを貼って，先入観で人を決めつけるということがあまりないのかもしれない。わたしたちを物珍しく見ることもなく，他のインドネシア人と共にわたしたちがいることを当たり前の風景として受け入れていた。そうでなければ，“わたしたち”に関心を示し，話しかけ，質問してくれて，“わたしたち”を知ろうとしてくれた。距離を取りながら一線を引いて眺めるのではなく，いっしょに写真を撮ることを頼まれたり，もう会うことのないだろうわたしの名前やどこからやって来たのかを聞かれたり，わたしに関心を示してぐっと近寄ってきた。どちらの行動も，わたしたちを不快な気分にさせるようなことはなかった。これは，簡単にまねできること

ではない。インドネシアの人びとに深く根付いている受け入れる力を思い知らされた。

3.5 仮面が外れない

さて，わたしの小学5年生の時の話に戻ろう。わたしは，あの時不登校になった同級生がなぜ学校に行けないかを想像できなかった。「なんで行けないんだろう，嫌でも行ってみればいいのにな」とすら思っていた。苦しむ同級生が抱えている問題を表面だけ見て，本当にある内側の苦しみを理解しようとしていなかった。にもかかわらず，それがわかっていない状態で先生たちと一緒になって，無理やり学校へ行かせようとしていた。心の奥を想像する力，問題の本質を見る力，考える力がなかったのだ。わたしは「おかしい」，「間違ってる」，「なぜ」ということを考える力がなかったから，“いい子”になれたのだと思う。わたしは自然と，自分を周囲の状況や期待に合わせる術を身に着けていて，わたし自身がどう思うか考えられなくなっていた。

インドネシアから帰り，“いい子”だったわたしのことに気づき，それがとても不健全に思えた。わたしはなぜ考えることができなかったのだろう。従うことが当たり前だったのだろう。まるで操り人形のようだと思った。どうにか抜け出したいと思うけれど，わたしは“いい子”の仮面をつけたままにしすぎていて，いつしかそれを取り外すことができなくなっていた。どうすれば空気を読まないでいられるか，どうすればいい子の呪縛から解放されるのか。刷り込まれてしまったわたしの仮面にどうしようもなさを覚えた。

4 気づく→変わる→

4.1 “ひとりの人”をみる

インドネシアにいったことで，そのような重大な気づきを得てしまい，日本へ帰ってからが大変だった。わたしは仮面をつけていることに気づいてしまったし，わたしの日常が大きく変化してしまった。つまり，インドネシアへ行ってわたしが変わってしまったということだ。もう前のわたしに戻ることはできない。インドネシアに行かなければ，変化する前のわたしのまま，子どものころから変われないわたしのまま，過ごしていたかもしれない。そう思うと，ゾッとする。そのくらい，わたしはこの変化に満足している。

このわたしの変化については後ほど述べるとして，先に，インドネシアでわたしが得たものは結局何だったのかを伝えたい。わたしが得たのは，“ひとりの人”として，“個”として生きる，ということだった。これは，個人で孤独に生きるということが言いたいのではない。彼らは，ひとりひとりに敬意を払って生きていたのだ。わたしたちに対して敬意をもった向き合い方をしてくれたおかげで，わたしはわたしのこれまでの生き方を振り返り，わたしを取り巻く社会について考えることができた。彼らのように人を決めつけず，１人の人間として誰かと向き合えているだろうか，誰かを1人の人間として見ているだろうか，わたし自身と正面から向き合えているだろうか。わたしはたくさんのことを彼らから静かに問いかけられた。一貫しているのは，わたしがわたしを含めて，人を大切にしているか，ということだ。これがわたしがインドネシアで得た気づきだ。人を決めつけず，敬意を払い，まっすぐ向き合うことをさりげなくやれる彼らをうらやましく思い，自分をもどかしく感じ，そしてわたしが変えられたのだ。

4.2 インドネシアな日本の大人たちに出会う

帰国してわたしがわたしの仮面に気づきもやもやしていた時，ある飲み会に参加することになっ

た。その飲み会は，在日朝鮮学校の学生が作った作品を展示する展覧会を開催するために結成された実行委員会だった。通称“学美”と呼ばれるその集まりは鳥取県の倉吉市で行われた。学美の美術はふつうの美術とは違っていて，子どもがどれだけ感情を作品にのせられるかを尊重する。倉吉では，その子どもたちと子どもたちの作品とそれを支える先生たちに魅了された大人たちが集まっていた。

初めて学美での集まりへ参加するために緊張していたが，驚いたことに，インドネシアを彷彿とさせる集まりだった。自分を取り繕うことのない大人たちが，空気を読まず，人とまっすぐ向き合う会話が飛び交っていて，わたしは胸が熱くなった。わたしの暮らす日本は仮面社会だと思っていたが，ちゃんと“個”を大切にして生きている人が，ここに，わたしの身近にいるのだ，ということを知ることができたからだ。とても大きな出会いだった。わたしが，レッテル無くわたしとして生きることのできる場所があった安心感と，身近にわたしを支える人たちがいたことに希望をもつことができた。

“いい子”だったわたしは大人に従ってきたため，常に“大人と子ども”というタテの関係が当たり前だと思っていた。しかし，この学美での出会いを重ねるうちに，大人も子どももフラットな位置に立っていることを強く感じさせられた。まさにインドネシアで感じた，人を“ひとりの人”として見ることが，ここで行われていたのだ。子どもを引っ張る側であったはずの大人が，子どもと一緒にもがく姿を見ることができ，わたしは学美でインドネシアを感じた。これからもしばらく学美へ通い続けることで，わたしはまっすぐ人と向き合う力が身に着く気がしているし，学美で関わる大人たちのように生きたいと思う。この出会いがあったのも，インドネシアでわたしが自分の仮面の存在に気づけたおかげだった。

4.3 ちゃんと遊ぶ

さらに，学美への参加によって新たに生まれたものがあった。わたしの卒業論文の調査対象となる大人の方と出会うことができたのだ。なぜその人を調査対象にしたかというと，わたしのいい子の仮面を取り去る術を持っておられると感じたからだ。自ら遊びながら他者とあそびを共有し生き生きとしているその人を調査することで，わたしは仮面が外せるような気がした。というのも，遊ぶというのは，怠けたり物事に真剣に取り組まないで投げ出したりすることではなくて，自らの意思でやりたいことを全力で表現したり実行したりできる力のことだと思ったのだ。ちゃんと遊ぶことができれば，わたしはもっと自由に物事を考え，もっとわたしのことを大切にできると考えた。わたしがもっと考えて生きられるようになるために，その人に出会ったことはとても重要である。この出会いは，インドネシアの経験がどんどんと外部へつながっていったおかげだった。

4.4 わたしに正直に

最後に，インドネシアへ行ったことで最も大きく変わったことを述べる。インドネシアの経験はわたしが将来進む道にも大きな影響を与えたのだ。わたしはもともと子どもと関わることが大好きで，将来子どもと関わりのある仕事をしたいと思っていた。大学 3 年生の 4 月の時点で，学科の専門としては異なるけれど，わたしは幼稚園の先生になりたいと思い，ある先生に相談した。その先生には，今からだと遅いから別の道が良いよ，と言われてしまった。その時は，そうなのか，と簡単にあきらめてしまい，それでも子どもに関わる仕事がしたいと思ったわたしは，子どもが使うであろう文具や子ども服の会社への就職を志望することにしていた。

インドネシアから帰国し，わたしが就職活動を本格的に行っていた時，ゼミで就職活動の経過を話したのだが，わたしはどこか自信なくもごもごと口ごもりながらその会社へ行きたい理由をぎこちなく話していた。そしてわたしの話が一段落すると，ある後輩から，「稜子さん，そんなに子供が好きやったら先生になったらええのに」と言われた。それはいっしょにインドネシアへ行った後輩だった。まさに自分が心の奥で願っていたことをズバリと言い当てられた。本来わたしは子どもと直に関わりたかったのに，なぜこんなに遠回りをするようになったのだろう。インドネシアで人とまっすぐに向き合う方法を学んだはずが，わたしはわたし自身とまっすぐ向き合えていなかったのだ。後輩がそれを気づかせてくれたおかげで，わたしは今，卒業後に幼稚園の先生の資格を取るための準備をしている。一見，多少回り道をすることになるが，わたしが“わたしの人生”を生きるためには，それは全く遠回りではない。開き直りなどではなく，自信を持って，遅くはないと言い返すことができる。わたしはインドネシアへ行ったことで，自分に正直に生きる覚悟をもつことができた。そして，こうして気づけたのは，わたし自身が気づけなかったわたしの心の奥底を読み取って伝えてくれた後輩のおかげだ。わたしが間違いそうになったら正してくれる仲間ができたことが，とてもありがたい。この変化はとても大きくて大切な変化だ。

さいごに

1 さらなる気づき

このレポートを書いている時，わたしが伝えたいこととこのレポートに書かれていることが必ずしも一致していないという違和感にとても悩んでいた。わたしはインドネシアで得た経験をどうにかありのままに表現したかった。しかし，表現したいことが表せない，上手くいかないことに悔しさを感じた。

そんな中，仲野先生と一冊の本について話をした。『世界のシェー!!』という名のその本は，ふざけているようにしか見えない本だったが，わたしがこのプログラムで得た経験がよく表現されている本だった。この本は，世界のあちこちで肌の色や衣装などの外見がそれぞれ異なるさまざまな人びとが，ひたすらマンガ『おそ松くん』のシェーのポーズをしている様子がうつされている写真集だ。あらゆる人びとがシェーのポーズをとっていることによって，国も，言葉も，性別も，年齢も越えて“人”と“人”がつながっていた。外見の違いは多少あれど，みんな同じ人間だった。それを，ひたすらシェーのポーズをとった写真だけで表したのだ。外側でなく，内側からつながるその様子に，インドネシアでわたしが得た経験を思い出した。同じだ。そう思って『世界のシェー!!』のさいごの文を読んだ。「感動は与えられるものではない。あなたの中にあるものだ。」「中身はみんないっしょ。外側が少し違うだけ。」インドネシアでまさにその意味の分かる体験をしていたので，胸がスッとした。そして，この本のおかげでわたしはこのインドネシアプログラムをもう一度振り返ることができた。シェー!!に意味がこめられたように，わたしの体験にもしっくりくる言葉をつけたかった。

このレポートの冒頭で，わたしはインドネシアで“受け入れられた”と書いた。実はこの言葉はわたしの経験を表すのに必ずしもしっくりするものではなかった。その違和感のせいで，インドネシアで確かに感じたはずの目に見えない力を，色々な言葉を重ねてごちゃごちゃと説明するしかなかったのだが，『世界のシェー!!』のおかげでわたしがインドネシアで得たことに限りなく近いものに気づくことができた。わたしが言いたかったのは，インドネシア人が待ち構えてわたしたちに何かしよう，受け入れよう，としているのではなく，逆にわたしたちの方が彼らに対して身構えてい

たのだ，ということだ。わたしは，インドネシアの人たちが，インドネシアと日本の間に存在する壁や境界線を越える力を持っていると思ったが，インドネシアの人たちは実はその力を持ってはいなかったのだ。国や性別，宗教などの壁や境界線と思われがちなものを“乗り越えてくる”のではなくて，もともとその壁や境界線を“つくっていなかった”のだ。

彼らは何か力を持っている，その力はなんなのか，と考えていたわたしがあほらしく思えた。本当に問題なのは，受け入れようと身構えたり距離を置こうとしたりする壁や境界線を“つくったわたしたち”だった。もともと“中身はみんないっしょ”なのに。彼らが持つ力をあえて言うなら，人と人との間に，違うものや異なるものといった壁や境界線を“つくらない力”，人の外側だけを“見ない力”だと思う。というより，壁や境界線をつくるという概念が彼らにはないはずだ。インドネシアの彼らがそもそもあると思っていない壁や境界線を意識し，“力をもっている”と感じることはできないだろうから。わたしは，何も持たずにいられる彼らをすごいと感じたのだ。手ぶらで向かってくる彼らに，わたしは自分自身をごてごてと飾り立てて挑もうとしていた。そのことに，このレポートを書くことで気づくことができたのだ。わたしは，力があるということは，何かを付け加えたり増やしたりとプラスされていくものだと思っていたが，無くしていき，減らし，ゼロの状態が力だということが衝撃的だった。わたしはわたしの中にある仮面や積み重なったものを無くしていかなければならない。減らしていくことで，インドネシア人のように“人”と“人”とをフラットにみて，人の内側を見ることができるのだから。

このことに気づき，このレポートを最初から書き直そうかと一時は考えた。インドネシアの人にあると思っていた受け入れる力は，色々な言葉を積み上げて書いた彼らの力は，プラスされた力であるかのように書いてしまったからだ。しかし，そうしなかったのは，わたしが今なお変化し続けていることを読んでいる人に知ってほしかったからである。このレポートを書いている過程で生じたわたしの変化や気づきをも，このレポートの中に記録しておきたいと思った。インドネシアがわたしに与えた変化を少しでも，このことから感じてもらいたい。

2 さいごのさいごに

インドネシアの友人たちは，わたしたちがインドネシアを発つ日，別れ際に「また会いたい」と言ってくれた。日本では「また会いましょう」とタテマエで言うけれど，彼らはいつだって本気でぶつかってきてくれる。その証拠に，あれから半年たった今でも，「会いたいよ」とビデオメッセージ越しに泣いてくれる。わたしはそんな心からの友達をインドネシアでつくることができた。うれしいという言葉では言い表せないくらい，本当に，とてもうれしい。また，インドネシアで得た大事な掛け替えのない一生の友達とリアルな経験が，今後わたしの仮面を取り去り，さらなる変化を生んでいく大きな力になると強く感じる。

今回本当に，わたしの不自由な頭と表現力では表現することのできないくらいのたくさんの力をもらうことができた。本当に感謝してもしきれない。心の底からこの出会いにありがたさを感じ，関わった全ての人にひとりひとり，お礼を言いたい。そして，人を“ひとりの人”としてみることができ，壁や境界線をつくることを知らない，“持たない力”を持った彼らのようになりたいと心から思う。わたしはインドネシア人になりたい。

参考文献

平田正弘，2010，『世界のシェー!!』理論社.

私が今ここで生きるための心構え

堺 泰樹（地域政策学科２年生）

はじめに

私の中では，インドネシアは発展途上国で将来に向かってギラギラしていて，まちは乱雑でむさ苦しい感じのイメージをしていた。インドネシアの地に降り立って，何日か過ごしてみて，このイメージはあたっている部分もあれば，見当外れの部分もたくさんあった。はじめに述べておきたいことは，私の出会ったインドネシア人はとてもやさしく丁寧で，まっすぐ私に語りかけてきてくれるということである。私は，彼らの笑顔を忘れることはできないだろうと思っている。そして，これらの笑顔はまっすぐに私にさまざまなことを語りかけてくれた。それは自分の生き様であったり，思考であったり，社会のことなどだ。

本レポートでは，短いプログラムではあったが，自分の中で印象に居残っているいくつかのエピソードから，このプログラム全体で得られたことが何だったのかを考えてみたいと思う。

人間を超越した何かの話

プログラム７日目から９日目，カンプンナガという村に二泊三日で訪れた時のエピソードから始めたいと思う。カンプンナガは西ジャワにある村で電気と水道をあえて通していないことで，昔ながらの生活を営んでいる村である。村は谷にあり，辿り着くまでには長い階段を降らなければならない。アミニズムの考え方も強く，村の人も入ってはいけない森があったりするらしい。そんな場所で私はずっと寝込んでしまった。インドネシアのみんなはお化けにとりつかれたと嘘か本当かわからないことを言っていたが，原因はわからない。僕はお化けにとりつかれたことにしておきたいと思う。前日までは体調は悪くなく元気だったが，バスでカンプンナガに近づくにつれて，どんどん気持ちが悪くなっていって，カンプンナガについた時にはもう倒れそうになっていた。おもしろいのは，カンプンナガを出るために長い階段を上るにつれて元気になっていったことである。お化けの仕業としか言えなくなってくる。ともあれ，カンプンナガの滞在中は，吐き気と下痢，体の怠さで動けずに寝込んでいた。当然，みんなが回っていた村巡りもできなかったり，ホストファミリーとの交流やそれからのお話もできなかったりと，とても他の参加者をとてもうらやましく思う時間であった。

しかし，このおかげかどうかはわからないけれど，それが故におもしろい経験ができたと思う。まず，少し霊的な話をしたいと思う。村についた時にしんどくて，プログラムの活動には参加せずに泊まる部屋で寝かせてもらうことにした。すると，誰からか水を飲めと言われ，コップを渡された。どうやら村長から回ってきたらしい。私は少しだけ口を付けて「もういいです」と言ったが，「村長からです。一気に飲んでください」と言われてしいまった。「ああ，村長だから失礼に当たるのかな」と思ったので，頑張ってコップいっぱい水を飲んだ。しかし，村長は私が倒れていることは知らないはずだし，誰も村長には言っていないと言っていた。ではなぜ，村長は水を飲めと言ってきたのだろうか。病人に対する優しさということもあったのかもしれないが，「何か村長は感じ取っていた」というプログラムに参加していたインドネシアの友人の言葉に，霊的なものを感じざるを得ない。村を出てから，インドネシアの先生から「カンプンナガで夢を見たか。そのお夢の中に川が出てきたか」と聞かれた。私は「見ていません」と答えると，先生は露骨に安心した顔をして

「わかりました」とだけ答えて，後は何も言わなかった。「見ていたら何か悪いことがあったのですか」と聞いても答えてくれなかった。恐らくアミニズム的な何かがあるのかもしれないが真相はわからない。ただ，僕はこの村で，霊的な現象に巻き込まれていた可能性は高いような気がしてくる。

世の中には人間世界から超越した何かが存在しているように思う。少なくとも，科学的に証明できない事象が世の中にはあふれていて，それを霊とするのか神とするのか，人間がそれを信じているという事実があった。私は，今回の経験から，自分自身もこうした超越したものに何か畏怖を感じていたり，敵わないもの，という感覚を持っているのだと感じさせられた。インドネシアでは多くの人がイスラム教を信じるムスリムである。今回のプログラムでは，お祈りを一緒にさせてもらったり，モスクに行ったりして，本気で自分の中のアッラーと向き合う姿を見て，どうして神の前にそこまで従順になれるのだろうかと不思議な感覚を持った。しかし，自分の身の回りを見返してみても，さまざまな信仰があった。私の家族はおばあちゃんから母親まで神仏に対する信仰が深い。毎朝仏壇に向かって念仏を唱えるし，正月や引っ越し，子どもの受験の時には決まって行くお寺が存在している。身近なところにも何か対して信仰心を表面的に出すということは存在している。人間を超越した存在に対して思いを馳せるのは，私たちと同じである。

一人にならなかった話

カンプンナガでは，霊的なことで驚かされたが，私が倒れている間にあった些細なことにもおもしろいことがあった。インドネシアでは，体調を崩した時に，クロカンという民俗的な施術が存在する。クロカンはコインで背中を横向きにこすり，背中に痣をつくる。赤くなったら体調が悪い証拠で，この痣が消えると悪い気が出て行って体調が良くなるというものらしい。私は，このクロカンを施してもらった。こすられている間は，痛いというか痒いというか微妙な感じで，体がたまに反応してピクッと動いてしまうと，周りで見ていたインドネシアの学生たちがみんな笑っていた。話を聞いているとみんなクロカンの経験があるらしく，赤くなっている痣を見るのがおもしろいようだった。

クロカンもそうだが，寝込んでいる間，インドネシアの人たちは私を放っておくことはなく，常に気にかけ心配していれていた。村にいる間，私は決して一人になることはなかった。部屋で昼間寝ている時もふと目が覚めると誰かがその部屋にいてくれたし，夜中にトイレに行こうとしたときも頼んだわけではないが誰かが支えてくれた。「大丈夫ですか」「何か必要な物はありますか」「何かしてほしいことはありますか」と，正直に言うと「そっとして寝かせてください」と思うくらいかまってくれた。しかし，その鬱陶しいくらいの距離感がどことなく懐かしく安心感があった。しんどすぎて死ぬかもしれないと感じ，死にたくはないと思いつつも，ここでなら死んでもいいかもと不覚にも思ってしまったこの安心感とは一体何だったのだろうか。一人ではない，私はここにいるという感覚がこれほどまでに，人を安心させることができるとは，頭ではわかっていても体で感じることはあまりなかったことだろうと思う。

人に頼るという話

また，村で寝転びながら，インドネシアの学生と話していた内容が私にとってとても心に刺さるものだった。それは，子育ての話だった。インドネシアでは「自分の子どもを育てるときに自分の親に手伝ってもらわないことは，親に失礼」であるという。日本ではどうかと考えてみると，自分のことは自分でしなければならないし，人を頼ることは迷惑をかけることとして良くないとされて

いるように感じる。病気になった時も同じであるように思った。私は，村で倒れている時にうまく「このように助けてほしい」と伝えることができなかった。私は失礼なことをしたのではないか。自分が困っている，助けを求めたい，どうして欲しいかということを相手に伝えないことは，信用していないということになってしまうのではないか。みんなが，いろいろな施術をしてくれて，声をかけてくれて，至れり尽くせりであったが，私は，一言「ありがとう」と言うことしかできなかった。

この空間は，家族のような空間だったと思う。誰かを心配し，無償で施しを与える。私は「ありがとう」の一言しか言わなかったけれども，面倒くさいくらいに心配してくれる空間であった。

幸せってなんだろうという話

安心できることは幸せにつながると思うけれど，幸せの条件はそれだけなのだろうか。面倒くさいほどの助け合いや人間を超越したものに守られている安心感によって満たされるものは計り知れないものだと思う。それでも，清潔な環境とは呼べないところで暮らしている人たちもいる。いくらつながりがあっても本当に幸せか，と無意識に思ってしまう。

プログラム 5 日目バンタルガバンという地域を訪れた。そこはジャカルタ市圏内のゴミを一手に引き受けている地域である。そこには見渡すかぎりのゴミ山が作られ，その地域で暮らす人の多くはゴミの分別をすることで生計を立てている。その中には，他地域から中学校を卒業してから働きに来る人も多いそうだ。その一方で，労働者の中では稼ぎは多いらしく仕事として成り立っているそうだ。

私たちプログラム参加者はグループに分かれて，ゴミ山とゴミ山の周りで暮らす人びとのコミュニティについての見学をした。そこでは，グループに一人ずつ，そこで働く少年が案内役として私たちのする質問に答えてくれた。私のグループについてくれた少年は 17 歳（2015 年現在），中学校を卒業してから家族を支えるために田舎から出てきた。身長は 160cm くらいで細身，よれた半袖の T シャツを着て，長ズボンの裾は長靴の中に入れられていた。お父さんは建設業で働いている。彼はビニールの分別を任されている。誰が何を分別するかはゴミ分別で生計を立てる人びとのコミュニティのリーダーが決める。年上の人のほうがお金になるものを分別することができる。遊ぶ時間はなく，働いたお金はタバコやお菓子を買うために使っている。食事はリーダーからもらえるらしく，余ったお金は月 1 回くらいの帰省に使うそうだ。今望むことは普通の会社で働きたいということだが，中卒しかないので働けないという。

この地域ではバスを降りた瞬間からゴミの匂いが立ち込めてきて一瞬眉をしかめてしまうが，2,3 分もすれば鼻も慣れてくる。地面は雨なのか，ゴミから出てきた成分なのかわからないものが混ざったヘドロで滑りやすくなっている箇所もある。私は実際にこの地域を訪れる前に，そこに住む人に失礼のないようにしようと思ってマスクをしないことにしていたり，しんどい中で暮らしていてこの環境が変えられるものなら変えていかなければならないと考えていたりしていた。しかし，これは一方ではとても上から目線で語っていることに気づいた。以前から，上から目線にならないようにとか，できる限り理解したいと思っていたが，実際にはその考え方すら傲慢であった。「外から来る人に対してどう思っているか」と聞かれた彼は「外国人が来るのは珍しい。来てくれて嬉しい」と答えた。この嬉しいとはどのような感覚だったのだろうか。バスに乗ってきれいな服を着て何をするだけでもなく仕事のじゃまをして帰る人に対して嬉しいというのはどういうことだったのだろうか。

また，ここから帰った後にホストファミリーの家で一日の振り返りをしている時に，日本から来た学生は，バンタルガバンの状況を分析し，何が問題で何を変えないといけないのかと話していた。私たちは一緒に泊まっていたインドネシアの学生に対して「なぜ彼はあの仕事をしなければならなかったのか」「もっといろんな可能性があるべきで，社会に押し付けられている」と話した。しかし，その学生は「それは仕方がない」と答えた。これは，この日見てきた少年を取り巻く社会構造を容認しているように思えた。しかし，彼は「できれば，少年が違うやりたいことがあるならば，そちらができた方が幸せだ」とも言っていた。

バンタルガバンの少年やインドネシアの学生は，今ある状況をそれでもやむなしととりあえず認め，受け入れることで，今ある状況の中でどうやって生きるのか，どうしたら幸せになれるのかを模索しているようにも見えた。イスラムの考えの中で，現世はテストであって，現世で善い行いをすれば死後，幸せになれるという考えがあるそうだ。将来に対して幸せを希望を見いだせるからこそ，今ここを生きることができる，今ここを大切にすることができるということなのかもしれない。バンタルガバンの少年は確かにそこで暮らし，働き，生きている。インドネシアの学生はこの少年の生き様を肯定し，社会構造を一旦認めることで彼の立場を守り，彼が存在する価値を見出していたのではないだろうか。

幸せとは何か，という話に戻るならば，今小さな答えが私の中に降りてきたように思う。幸せのあり方は人それぞれあるし，この少年が今幸せかどうかはわからない。ただ，今ここを生きていることを認められること，誰かが自分の存在を認識してくれていることに幸せの欠片があるのではないだろうか。

おわりに

私は，インドネシアに行ってみて良かったと思っている。大学入学時から海外に行きたいとは行っていたものの，何かにつけて行かなかった自分がいた。そこで，短期のプログラムではあったが，行く機会になり，これが，これからの学ぶ意欲やもっといろいろな世界を見てみたいという欲求につながっている。プログラムでは，インドネシアの学生もだが，日本から一緒に参加した学生も含めたかけがえのない友人と出会うことができた。この中で，人との関わり方，自分にとって幸せってなんだろう，などさまざまなことを考えさせられた。

プログラムから帰ってきてから学年が上がり，付き合う人間も少しずつ変わってきた。今まで行なってきた活動の中でも立ち位置が変わり，その中で自分のできる仕事，やりたいこと，将来の目標が見えてきたし定まってきたようにも感じる。今までは，思考するといった時に他人の言葉を借りてきただけでしゃべっていたり，自分自身が今何をしたいのかというよりも，「何かしなければならない」のような義務感，「これはあれだ」といった決めつけで物事を考え，自分と向き合っていなかったように思う。そして，ようやく，自分のことについて向き合い方がわかってきたのかなと，今感じている。

「もっと人を信じる，認める」ということは，頭ではわかっていたことだけれど，どこか自分の中で納得していないところや感覚としてわかっていないことがあったのだろうと，今になって感じる。それが，今なら体感としてわかってきたように思っている。インドネシアでの人と人の距離感や関わり方，モノの考え方を自分なりにアレンジしながら体に織り込んでこれから生きていきたいと思うし，生きていける気がする。

“心の友”と今を生きる

坪井 麻伊（地域政策学科 2 年生）

はじめに

私がインドネシアプログラムへ参加しようと思ったきっかけはさまざまある。そのひとつに，将来への不安があった。友達が，「先生になりたい」「公務員になりたい」と語っている姿を見て，私は将来何になりたいのか，自信をもっていえなかった。みんながキラキラ輝いているように見えた。私は何をしたいのか，そして自分と向き合うこと自体が怖くて，現実から目を背けていた。そんな時，インドネシアプログラムの時期となった。今までの自分を変えたいという思いと，新しい自分を見つけるために参加した。そして，インドネシアには，私が忘れてしまっていた「大切なもの」があった。

その場にひきこまれる

私たちはインドネシアを訪れ，結婚式に参加させてもらった。私は，日本で結婚式に参加したことがなく，どきどきと不安でいっぱいだった。初めて会う人の結婚式に参加してもいいのだろうかという思いもあった。それは日本の結婚式では，親族や友達など，交友関係のある人が呼ばれるからだ。そんなどきどきと不安の両方を抱えながら，結婚式に参加した。

結婚式会場に行き，インドネシアの伝統的な衣装の「ケバヤ」を着て，化粧をしてもらった。化粧はとても濃く，誰が誰なのかわからなくなるほどだ。自分も本当に自分なのかわからないくらいだったが，とても面白かった。

そんな中で結婚式が始まった。私が印象的だったことは，儀式が終わってからの出来事だ。みんなが集まり，歌やらダンスやらを始めたのだ。私も見よう見まねで，初めて会う人たちと一緒に踊った。すごく楽しくて，私たちを受け入れてくれているような気がした。言葉は通じないけれど，目を見ると「一緒に踊ろう」という気持ちが自然とわかるような気がした。どきどきと不安ばかりだったが，自然とその場にひきこまれ，溶け込んでいる私がいた。そしてこの楽しくて，自然と笑顔があふれる場に誰かを呼びたいと思い，いつの間にか私も初めて会う人の手をつれ，一緒に踊っていた。

日本では，新郎新婦が幸せになるようにお祝いをする。主役は彼らだ。しかし，インドネシアでは，新郎新婦だけが主役ではない。一緒にダンスし踊りを通して，みんなが主役で，一人一人の存在意義を感じた。初めて参加し，初めて会う人の結婚式であったが，最初に感じていた「私はここにいていいのか」という思いは自然となくなっていた。そして，「私もいていいのだ，ここにいたい」と感じていた。結婚式に来ていた人の笑顔や温かさがあったからだと思う。とても幸せな気分になった。我を忘れるということは，このようなことだと思った。その場へ溶け込み，ケバヤを着てインドネシアの化粧をした私は，インドネシア人のようだった。

幸せな空間

インドネシアにはカンプンナガという小さな村がある。私たちは，２泊３日カンプンナガへ行った。この村は，電気も水道もガスもない。最初，それを聞いたとき「どんな場所に連れて行かれてしまうのか」と正直不安であった。日本には，電気も水道もガスも身近にあるもので，なくてはならないものであり，これらがあることは当たり前であったからだ。

実際に訪れてみると，カンプンナガには日本の白川郷のような合掌造りの家屋があり，昔の日本のようだった。川や森といった自然に囲まれていたので，田舎のおばあちゃんの家に遊びにきたような安心感もあった。

村の人びとは川の水を田んぼへ流し，浄化された水を利用していた。村の人の言葉の中に，何回も「自然を守る」という言葉が出てきた。自然を大切に守り，自然の良さを活かしているからこそ，自然も自分たちを守ってくれているのだ。日本にもたくさんの自然があるが，自然災害も多い。しかし，この村では土砂災害など，大きな災害はないという。自然を活かし，自然と共に生きることを考えているからこそ，自然も人間を守ってくれている。

なぜ電気を取り入れないのだろう，その疑問に対し村の人たちは「貧富の差が生まれないように，みなが平等で生きていけるように」と言っていた。この村で，この住民たちと自然とが共に生きていけるにはどうしたらいいのかを考えているように感じた。ここでは，常に自分と他者がいて，自分より他者を大切にし，尊重している。私もその「自分より他者を大切にする」ことを実感した出来事がある。それは，お風呂に入るときに感じた。私は，日本の学生と一緒にお風呂に入った。お風呂といっても外にあり，竹で覆われた柵に，川から田んぼへ浄化されて出てきた水で体を洗う。電気は懐中電灯のみで，真っ暗だ。インドネシアの学生が心配してくれて，外で懐中電灯を照らしてくれた。最初は，「早く出たい」という思いで，水を浴びていた。無防備で冷たい水を浴びて，二人で叫んでいた。しかし，その叫びが，だんだんと笑い声になってきた。笑いが止まらなく，むしろ清々しい。野生になった気分であった。そして，一緒に水浴びをした学生と外で待っていてくれるインドネシアの学生が愛おしく思えた。一緒にいてくれる安心感や心強さを実感した。

ここでは，助け合いながら生きなければならない。だから，他者を大切に尊重しているのではないだろうか。

カンプンナガ最終日の夜に，村の人たちとの交流があり，手づくりの太鼓での演奏と伝統的なダンスを見せてもらった。結婚式でのダンスやら歌のことを思い出し，踊りたくてたまらず，うずうずしていた私がいた。そんな私の気持ちが伝わったのか，踊りたいという気持ちが顔に出ていたのか，村の人が手を差し伸べてくれ，一緒に踊ろうと言ってくれたのだ。照れながらも，待ってました！と言わんばかりに，張り切って行った。伝統ある踊りのようで，とても難しかったが，それ以上に村の人が笑顔で，私も自然と笑顔になっていた。自分を「表現」する楽しさを味わい，いつの間にか我を忘れて歌い，踊っていた。この空間が私にとって幸せの場であった。ひとり一人の笑顔が輝いて見える。そして何よりも，村の人から見守られていて，受け入れられているこの「瞬間」がたまらなく幸せであった。そして，日本にいるときは，自分を思い切り表現できていなかったことに気づかされた。周りの目を気にし，「冷めた目」で見られることがとても怖かったからだ。しかし，この場で一緒に歌い踊ったことで，受け入れられていることを感じることができた。

私は，いつもなら時間に縛られていて，何かに追われているような気持ちになり，毎日毎日せかせかとしていた。何かをゆっくり考えたり，本を読んだり，自分と向き合う時間をつくったり，そ

んなことはできなかった。気付いたら朝起きて，授業を受けて，アルバイトに行って，そんな時間に追われた毎日を過ごしていた。しかし，ここにいると，時間を忘れてしまうくらいゆったりと時間が流れていた。私は何をそんなに急いで焦っていたのだろうか。そして，自分が便利で生きやすいことを最優先にしていた。自然や人を大切にし，「生きる」ことを実感できるこの場所は魅力にあふれていた。私はここにいるぞー！と叫びたくなった。

私は１人じゃない

インドネシアでは，ホームステイをさせていただいた。私がホームステイでお世話になったのは，ハムカ大学で英語を教えている Tri 先生だった。ある日，Tri 先生に将来の夢について聞かれた。私は，正直ドキっとした。そして，やはりうまく言葉に表すことができなかった。自分のことなのに，自分のことすらわからない自分がすごく嫌になった。なおさら，自分が将来なりたいものを早く見つけなければならない，と焦っていた。

その次の日，鳥取大学の卒業生であり，ハムカ大学で日本語を教えている紀恵先生の話を聞く機会があった。なぜ，インドネシアを訪れることになったのか，インドネシアでのエピソードなどを聞いた。紀恵先生がインドネシアに来たばかりの頃，紀恵先生をさみしくさせないために，ハムカ大学の先生や学生が毎晩一緒にいてくれたそうだ。いつも誰かが隣にいてくれ，紀恵先生はたくさんの人に守られていた。紀恵先生は「人の温かさ」と「私があなたを守る」という言葉を何度も何度も言っていた。私は，先生のエピソードを聞いただけだったし，インドネシアを訪れて数日しかたっていなかったけれど，それでもその話がすーっと自然と実感できたのだ。それは，カンプンナガでの水浴びで感じた，そばにいてくれる友人の“愛おしさ”や“安心感”を自分自身で経験していたからかもしれない。

また紀恵先生が，インドネシアの人たちは「今は今」と一瞬一瞬を大切にしている。一方で私たち日本人は，将来のことを意識しすぎて，今すべきことがわからなくなると言っていた。まさに私のことだと痛感した。将来のことを考えすぎて，将来のために，将来のために，と最近の私は頭の中はそればかりで，大切なこと今すべきことを見失っていた。しかしこの言葉を聞き，「今は今でいいのか」と気持ちが楽になり，今までの悩みを話したら，ただただ，涙が止まらなかった。日本にいて，初めて会う人の前で，こんなに号泣したことはない。自分の悩みすら打ち明けていなかった。しかし，インドネシアでは「大丈夫だよ」「私がそばにいるよ」という何でも受け止めてくれるという安心感があった。それは，紀恵先生やその場にいるみんなが教えてくれた。紀恵先生は「今度は私があなたを守る」と私を強く抱きしめてくれたのだ。インドネシアの学生も，「どうして泣いているの？泣かないで，私まで泣いちゃうから」と一緒になって泣いてくれた。そして，強く抱きしめてくれた。

日本にいて，誰かに抱きしめられるということはあまりないと思う。誰かを抱きしめたり，または誰かに抱きしめられることは，恥ずかしいように感じる。しかし，そのような感情はなかった。その安心感が私を包んでくれて，誰かに抱きしめられることが，こんなにも幸せで居心地がいいものだとは思っていなかった。だからこそ，紀恵先生の言っていた，「人の温かさ」や「私があなたを守る」という言葉を心の奥底から体のすみずみまで感じることができた。その温かく優しいぬくもりを私も誰かに伝えたい，大切な人を抱きしめたいと思った。

そして，ホームステイ先の Tri 先生が，泣いている私の姿を見て心配してくれた。私は，哀しいから泣いていたわけではない。しかし，深く理由は聞かずにある曲を教えてくれた。

それは，日本の歌で，五輪真弓さんの「心の友」という曲である。この曲は，日本の昔の曲で，インドネシアでは有名な曲であった。

「心の友」
あなたから苦しみを奪えたその時　私にも生きてゆく勇気が湧いてくる
あなたと出会うまでは　孤独なさすらい人
愛はいつもララバイ　旅に疲れた時
ただ心の友と　私を呼んで

信じあう心さえどこかに忘れて　人は何故過ぎた日の幸せを追いかける
静かにまぶた閉じて心のドアを開き　私をつかんだら　涙ふいて
愛はいつもララバイ　あなたが弱いとき
ただ心の友と　私を呼んで

「辛いことがあったら私を呼んでください」と言ってくれているような気がした。Tri 先生も私たちを守ってくれる。私は，１人ではない。辛いとき，心が折れそうになったとき，支えてくれる「心の友」がインドネシアには何人もいる。その温かく，優しい先生の気遣いと言葉が嬉しくて，再び涙が止まらなくなってしまった。

インドネシアでの移動中は，よく歌を歌うことが多かった。みんな，日本の曲をよく知っている。ギターを弾きみんなで歌を歌い，バスの中はにぎやかであった。そんな中，みんなが「心の友」を歌いはじめた。その曲を聴いた瞬間，その歌詞の意味を考えながら聴いていたら，昨夜の Tri 先生の優しさを思い出し，また涙がとまらなくなってしまった。そんな姿を見たインドネシアの子が，心配してくれた。「どうして泣いているかわからないけど，私が話を聞くからね」と言ってくれたのだ。その小さい心遣いと優しさが嬉しかった。そして，みんながレミオロメンの「3 月 9 日」を歌い始めた。

瞳を閉じればあなたが
まぶたの裏にいることで
どれほど強くなれたでしょう
あなたにとって私もそうでありたい。

このフレーズを聞いた瞬間，再び涙が止まらなくなった。悲しくもなんともないのに，バスの中１人で泣いた。私はおかしくなってしまったのか。日本で聞いたら単に「いい曲」であるこの曲に，言葉ひとつひとつに，インドネシアで感じた優しさを照らし合わせながら聞いた。今の私にとって，ここにいるみんなは愛おしく，心強い。歌を聞きながら目をつぶると，そこには，もうインドネシアのみんながいた。私のそばにはみんながいてくれる。私には大切な「心の友」がたくさんいる。

自分と向き合い今を生きる

インドネシアから帰国し，少しずつではあるが自分の中で将来に対する焦りや時間に追われると

いう不安な心は変化している。未だに将来のことを考えてしまうこともあるが，前のように縛られているような感覚はなくなった。前までの自分は逃げていたような気がする。しかし，現実から逃げ，自分と向き合おうとしなかった弱い自分と少しずつではあるけれど，向き合えている。誰かを大切にすること，毎日をていねいに生きることへと変化している。一番の変化は，私自身が「誰かを頼る」ことができていることだと思う。自分の殻をやぶり，困ったことがあったら，友達と納得するまで話しをするようになった。毎日をていねいに，支え，支えられながら，今を一生懸命生きること。当たり前であるが，その当たり前で大切なことを学んだ。

インドネシアで出会った人たちからもらった，温かさや優しさ，たくさんの愛を私はどう恩を返していけばいいのだろう。インドネシアのみんなが，日本に来たとき，私たちは同じような優しさや思いやり，それ以上の愛を伝えることができるだろうか。私が出会ったインドネシアのみんなは，温かく優しさにあふれ，人として豊かであると感じた。ふとしたときに，「私は幸せものだ」と感じることが何回もあった。人と人とのつながりや，人がもっと安心できる場所をつくりたい。インドネシアでの経験は，自分の生き方や生きてきたものを見直すきっかけとなった。

インドネシアに行く前の私は，せかせかと時間に追われ，この大切な「今」を忘れていた。しかし，そんな現実から遠ざかり，逃げていた自分にはもう戻れない。瞳を閉じればインドネシアのみんながいて，遠く離れていても，つながっていることを実感できる。私には，辛いとき，支えてくれる大切な「心の友」がいる。私も，インドネシアのみんな，家族や友達，たとえ初めて会う人であったとしても，その人たちの支えとなりたい。私がそうしてもらったように。直接恩を返すことはできないかもしれない。しかし，いつかどんな形であっても，みんなのもとへ恩を返せるように，大切なことを教えてくれた「心の友」の笑顔や優しさを忘れず「今」を生きたい。

向き合おうとしなかった19歳，何かがくずれた20歳

永栄 早紀（地域政策学科2年生）

固まっていた私の考え

今回初めてインドネシアを訪れた。私は，インドネシアを訪れるまで「イスラーム教」や「ムスリム」についての知識は，ほぼ皆無だった。それにもかかわらず，イスラーム教に対して，“怖くて危ない”という勝手な感情を持っていた。

何故，イスラーム教に対してそのような気持ちを持っているのか考えてみた時，それは私が今まで生きてきた中で知らず知らずのうちに脳裏に植えつけられてきたものではないかと思うようになった。目だけを出した人たちがテロを行なっている様子，「イスラーム過激派組織」といった名前をテレビで耳にすることで，何の知識もないまま「イスラーム」というワードに対して，危険という印象を持つようになった。しかし，そのような感情を持っているのはきっと私だけではないはずだ。私はインドネシアを訪れる前に1ヶ月ほどカナダに行ったことがある。周りの友人や家族，親戚に「カナダに行く」と言ったとき，「いいなぁ！楽しんできてね！」と言われることが多かった。しか

し，今回「インドネシアに行く」と言うと必ず「テレビでイスラーム，イスラームって言っているけど大丈夫なの？危なくないの？」と言われることがとても多かった。やはり，「イスラーム」に対して，危ないというイメージが持っている人が多いのではないかと思う。

結論から言うと，研修を通して実際に見て感じたイスラーム教は，私が今まで思っていた“怖くて危ない”ものとは全く違うものであった。１日に５回あるお祈りは，思っていた以上に時間にルーズだし，モスクの中では私語も写真撮影も大丈夫だった。豚肉を食べても気が付かなかったら大丈夫と言っていたし，ラマダンは期間を自分でずらすことも出来るらしい。私は，イスラーム教は厳格で守らなければ何か罰があるのではないかとまで思っていたし，１日５回のお祈りやラマダンはとても辛くて彼らは我慢しながらこなしているものだと思っていた。しかし，彼らにとってそれらは“生き方”であると聞き，それでも最初はどういうことなのか理解できなかった。しかし，約10日間ムスリムである彼らと行動を共にすることによって，少しずつ“生き方”という意味が理解できるようになった。それはおそらく私の中にあった「宗教＝怖い」というイメージがなくなったからかもしれない。インドネシアに行くまで，私は本当にイスラームに対して勝手なイメージを持ち，さらにそのイメージを疑うことなく日々を暮らしていた。

インドネシア研修を通して私の中でさまざまな変化があった。変化した私の考え方と研修後の私の行動を中心に述べていこうと思う。

人生最高の誕生日

３月１７日，午前。私たちは，ある地域の学校を訪れていた。その学校は経済的な問題から学校に通うことが出来ない子どもたちが無償で通うことが出来るように建てられたものであった。

この日は，約 10 日間のインドネシア研修の中で最も心に残っている１日である。その日は私の20回目の誕生日だった。プログラムの前半に行なった自己紹介の時に，この日が誕生日であることをアピールした効果もあって，その場にいたみんながサプライズでお祝いをしてくれた。サプライズケーキが出てきた瞬間，私は一瞬戸惑った。本来なら学校にも通うことが出来ないほど貧しい人たちの前でケーキと共にこんなにも盛大なお祝いをしてもらっても良いだろうかと思った。その気持ちは，インドネシア研修が終わった今でも少し引っかかっている部分でもある。それでも，そこにいる全員が見ず知らずの私の誕生日に，全力で歌を歌ってくれたときのあの光景は忘れることの出来ない一生の私の宝物である。何回もその光景を思い出しては，今でも心が温かくなって涙が出そうになる。ありがとうという言葉じゃ足りないほど，あたたかい気持ちがいっぱいあふれ出るような誕生日だった。

何かが崩れる瞬間

3 月 17 日，午後。午前中に味わった幸せな気持ちを持ったまま，次の場所へと向かった。そこは，インドネシア中のゴミが最終的に集まってくる場所だ。私は正直，その場所にあまり行きたくなかった。すごく臭いという話を聞いていたし，基本的にゴミというものに良い感情は持っていないからだ。きっとすごい場所なのだろうという覚悟はしていた。バスの中でマスクが配られたが，私はそのマスクをあまり付けたくないと思った。ゴミ山といえども，そこには住んでいる人がいる。仮に自分が住んでいるところに見知らぬ集団がマスクをして入ってきたら，きっといい気分はしないだろう。しかし，バスを降りた瞬間，その強烈な臭いに耐えることが出来なくて私はマスクをしてしまった。それでも臭いがわかるぐらい，ゴミ山の臭いは想像以上だった。私は以前，同じような

ゴミ山の光景をテレビで見たことがあった。その時の衝撃もすごかったが，実際にゴミ山を目の当たりにすると心臓のドキドキが止まらなかった。おそらくその時の私はそのゴミ山を怖いと思っていたと思う。あまりの衝撃に何も発することが出来なかったのを今でも覚えている。

そのゴミ山で私は 1 人の少年と出会った。その少年は中学校を卒業した後，1 人でここに来て朝から晩までゴミを集めている。少年に「こうして外国から人が見に来ることをどう思う？」という質問をしたときのことだ。私は心の中で，きっと少年は私たちに早く帰って欲しいと思っているだろう，きっと怒っているだろうと直感的に思った。批判的な言葉が返ってくることを確信して身構えていた。しかし，少年から返ってきた言葉は思いがけないものであった。「ここに来てくれて嬉しい。来てくれてありがとう」と少年は言った。

その瞬間，私の中で何かが崩れるような，そんな感覚に陥った。無力さを感じ，私は涙が出た。物事を正しいか正しくないかだけで判断することはあまり良くないことだと心の中ではわかっていたが，それでもどこか自分の価値観で物事を決めつけている部分があることに気が付いた。大切なことはそのような事実が“ある”ということを知り，受け止めるということである。ゴミ山で出会ったその少年に思いがけず感謝の気持ちを言われたあの瞬間，自分の中で何かが崩れた瞬間を私はこの先ずっと忘れることはない。

その後の私

私は今まで海外や鳥取以外の地域など，外にばかり興味を持っていたが，インドネシア研修を終えたあと，私は改めて自分の生まれ育った「鳥取」を見つめ直すことにした。すると，空き家を再利用して地域活性化を図るリノベーションなど，鳥取でも面白い人が集まり，面白い動きが起こっていることを知った。今まで，私はそのことに気が付かなかったし，鳥取で生まれ育ったから鳥取のことを知っている“つもり”でいたのだということに気が付いた。それは，鳥取だけではなく日本に関しても同じだった。今まで，政治のことはよくわからないし，私が考えても考えなくても関係ないでしょうと全く向き合おうとしていなかった。自分たちの力で独立し，自分たちの国という意識が強いインドネシア人の姿やインドネシア研修で同じ班だった子が真剣に日本社会のことを話している姿を見て，私は自分がこの国のことを知ろうともしていないことに恥ずかしい気持ちと情けない気持ちでいっぱいだった。それから私は，今まで何気なく見ていた政治に関連するニュースを，もっと自分のこととして真剣に考えるようになった。鳥取は何もないと言われることは多いし，以前は私もそう思っていた。しかし，鳥取でどういう動きがあってどのような人が暮らしているのか，その人たちがどのような想いを持っているのかを知っていくうちに，鳥取ってすごく面白いなぁと思うようになった。

最後に

インドネシア研修を通して，自分の常識や価値観で物事が正しいか正しくないかを判断するのではなく，そのような現実が“ある”ということを受け入れて，その上で自分で考えることが大切だということを知った。研修の中で「知ったからには責任がある」という言葉がとても心に残っている。研修を通して知った，「いろいろな価値観，いろいろな生き方がある」ということを受け入れて，自分の言葉で伝えていきたいと思っている。研修は約 10 日間という短い期間だったが，この 10 日間，特に 3 月 17 日のあの 1 日の出来事は私の中の何かを変えることになった。知ってしまったことで，その分もやもやすることが多くなった。そのもやもやを苦しいと感じることもある。以前から

仲野先生が「そのもやもやする気持ちが大切」と言っていた。私は，そのもやもやの正体が何なのか，考えても正解は見つからないから仲野先生のその言葉がどういうことかよくわからなかった。しかし，最近になってそのもやもやを考え続けることが大切な理由が感覚的にわかるようになってきた。

今，私はやっと自分がやりたいことが何なのか，自分自身の人生と向き合うことが出来てきたように思える。それは，この研修を通して出会ったインドネシアの仲間と同じ研修に参加した仲間との出会いが自分の中で本当に大きいものだったからだと思う。これから先，いっぱいもやもやしたり，悩んだりすることが多くなると思うけど，ここで出会った仲間を頼って焦らず進んでいこうと思う。

インドネシア研修で出会った全ての人に感謝の気持ちを伝えたい。ありがとう。

インドネシアを通して，わたしを問いなおす

米村明畝（地域政策学科 2 年生）

1. はじめに

フィールドワークでは，その対象の人や地域を調査した結果，それももちろん分かるのだが，自分自身の見方や考え方を気付かされることがよくあると言われている。今回のプログラムはそれを心から実感したものであった。

私は 2 年の夏，学内の英語研修プログラムでマレーシアに行った。そしてイスラームに出会った。マレーシアに行く前は，イスラームというと「テロ」「戒律が厳しい」「排他的」というイメージが強く，不安を持ちながらその地に赴いた。しかし，わたしと関わったムスリムのみなさんは，その言葉とは無縁であった。あたたかくわたしを迎え入れ，手厚く歓迎してくれた。そして生活を共にしていくなかで，優しい彼らがイメージで怖いと言われてほしくないと思うようになった。

私がイスラームのことを知り広めていくことができれば，少しはマイナスのイメージを払拭できるのではないかと思った。そこでインドネシアプログラムに参加すれば，よりイスラームについて知ることができると思い，参加を決意したのだった。

2. インドネシアに教えられたこと

2.1 自信と勇気

インドネシアプログラムが終わってからもずっと，毎日インドネシアのこと，インドネシアでの出来事を考え続けている。ふとした瞬間にインドネシアの人びとの顔が頭に浮かんでくる。あの子今どんな生活をしているだろう？と気になって仕方がない。だからと言ってこまめに連絡を取ってはいない。彼らならきっと幸せな生活を送っていると信じているからである。それと同時に彼らは私の胸の中にいて，励ましてくれるからだ。たとえどんなことがあっても，彼らは私の見方でいてくれて，応援してくれる。絶対にそう思えるのだ。離れていてもつながっているような感じがする。彼らがいるということ，存在があるというだけで，助けられ幸せな気持ちになる。

こういう気持ちは生まれて初めてだった。彼らは絶対に応援してくれるはずだから，大丈夫！と

思えるようになったおかげで，少し自分に自信が持てるようになった。今までチャレンジできなかったことにも，挑戦する勇気が出てきた。

報告書のはじめに感謝の言葉を伝えたい。ありがとう。

2.2 まなざしを疑う

まなざしを疑う。つまり，ものの見方や考え方を捉えなおす。それは今まで自分がしたことのない作業だった。

わたしにはわたしの考えがあり，その誰かには誰かの考えがある。いろんな価値観の人がいる。今となりにいて，楽しく会話している人でも，考えが違う。国，宗教が違えばなおさらだ。そんなごく当たり前である，みんなひとそれぞれちがうということが理解できている気になっていた。しかしそうではなかった。

「イスラームは生き方そのものである」と聞いたことがある。しかし私はピンとこなかった。特段の信仰心がない私は，宗教は宗教に過ぎないと思っていた。個人の内面の問題であると捉えていたからである。それゆえ私は，現代社会において宗教は優先されるべきではないと考えていた。ムスリムに対しても同様である。

ムスリムが現代社会，とりわけ西洋的社会で生きるとき，困難が生じると思う。例えば，お祈りである。彼らは1日に5回のお祈りをしている。これはムスリムにとって義務で，当たり前である。例えばこんなケースは考えられないだろうか。ビジネスの現場で，ムスリムと無神論者あるいは他の宗教を信仰する者がミーティングをしていたとしよう。そこでムスリムが突然，お祈りがあるので少し休憩をくださいと言い出したら，どうなるだろうか。相手は仕事よりもプライベートなことを優先したと驚くかもしれない。

実際にはお祈りは，私が想像した厳しすぎるものではなく，とても柔軟であった。タイミングを逃してしまったら決められた他の時間にしたり，旅行などの移動中でお祈りができないと考えられる場合はお祈り2回分を一度にしたりしていた。とても厳しいと思っていというに，それってありなの？それでいいの？と驚くことも多くあった。

だから，私が想定したケースは多くないのかもしれない。しかしグローバル化がさらに進み，世界が結びつきを強めていく中で，ありえない話ではないと思うのだ。このような場合，私は無条件に現代社会に合わせるべきだと思っていた。たとえ困難があっても現代社会に合わせるしかないと思っていた。しかしその考えは間違っていたことに気付いた。彼らと共に行動し会話をしていく中で，イスラームの教えなしで彼らはいないということに気付かされたからである。イスラームは彼らの生活すべてを網羅するものであり，切り離せるものではなかったのだ。私は自分が彼らを厳格な宗教を信仰する現代社会に合わない人として見ていたのに気付いた。

私は知らず知らずのうちに，ものの見方や考え方を知ろうとせず，自分の考え方が正しいと考えていた。人にはいろいろな考え方があり，多様性は大切にすべきものだと言いながらも，実際は自分の考えしか大切にせず，他の考えを尊重できていなかった。その結果，自分の価値観を他人に押し付けていたように思う。

私は部活内での私が思い浮かんだ。部員で何かを決めるとき，自分の意見とは違う方向性に決まると，素直に受け入れることができなかった。受け入れたように振るまうが，内心もやもやしているということが多くあった。それは自分の考えと他の考えを比べて，優れているからだと思っていた。しかし実は，自分の意見は絶対正しいはずだとおごっていたからであるのではないかと思うよ

うになった。

このインドネシアプログラムでは，インドネシアにいる日本人である私は少数派であった。インドネシア人，ムスリムにとっての当たり前が私たちにとっての当たり前ではなかったし，逆も然りであった。今までとは違う少数派という立場に立ったとき，自分の持つ価値観は，あらゆる価値観のひとつに過ぎないというのを本当の意味で理解できた。これに気付いて，私は以前よりも人の話が聞けるようになったと感じている。すると自分はものをどう見て，どう考えているのかが分かるようになり，自分のことが分かるようになった。まなざしを疑うということは他人との協調をはかるだけでなかった。自分のアイデンティティを知ることもできたのだった。

2.3 幸せになるということ

インドネシアに行く前にインドネシア人の方が，日本人よりも幸福度が高いということを知った。物質的に豊かな国よりも，そうでない国の方が，幸福度が高いというのはよくあることである。私はこれに対して，経済や物質的に豊かな社会を知らない人たちは現状を良いと思うほかないと思っていた。今思うととても恥ずかしい考え方である。

インドネシアの人びとはいきいきと生活している人が多い。いつも笑顔だ。日本人とはまるで違った。相手が誰であろうと笑顔で接しており，見ている私も笑顔になる。私はそれを見て，彼らは経済という指標ではなく，自分のこころで幸せをはかっていると感じた。彼らも（経済）成長を目指しているが，（経済）成長と幸せと結びつけて考えていないのではないかと思った。

日本は物質的に豊かな社会を求めた結果実現したが，その代償として精神的に豊かでない社会がもたらされた。精神的豊かさは人とのかかわりによって成立する。しかし仕事に追われ，家族や友人・恋人との時間が十分にとることができない。生きるために仕事をしているはずなのに，仕事のために生きているような感覚になる。もはやそのことさえも気付けないような忙しい社会になっている。幸せを自分のこころではなく，経済で判断するようになってしまった我々はこういった事実を知りながらもなお，我々は効率化した社会を求め続けている。

この時代，この国に自分は生きている。就職活動を控え，これから人生の多くの時間を割くであろう仕事を選択していくことになる。お金ではなく，自分の幸せを見失わないようにしようと思った。

2.4 今を生きる

彼らは今を生きるということを大切にしている。その瞬間を懸命に生きようとしている。未来を気にしていない。いまここに全力なのだ。

わたしはこの考え方がわからなかった。自分の今現在している行動は，未来の目標のための行動であったからだ。

日本は毎日毎日忙しい日々が流れている。流れているというより，むしろ走っていると表現したほうがいいのかもしれない。決められた時間，決められた場所，決まられたルール，いくつもの縛りの中で生活している。効率をよくすれば生きやすくなるだろう，幸せになれるだろうと思って生きてきた。しかしも実際にそれが生み出したのは皮肉にも逆の結果だった。人との情報交換・共有をするために，電話が作られた。電話の登場により，それまで手紙などを使い数日かかっていたやりとりが，今この瞬間にできるようになった。その後，電話は持ち運びができるようになり，またインターネットも使用できるようになり，不特定多数の人と膨大な情報を共有することができるよ

うになった。そこで私は気になっていることがある。それがＳＮＳでの写真投稿である。私自身もするのだが，何か出来事があったとき，楽しかったから写真を撮って載せていたつもりでいた。しかし，気付けばＳＮＳにアップしたいから写真を撮るようになっていた。それに違和感を覚えて，一番利用していたＳＮＳをやめてしまった。このように私たちは人間が生きやすくするために作られたものにいつしか振り回され，翻弄されている。

私はインドネシアの生活をとても窮屈に感じた。朝一番に移動するときから渋滞に巻き込まれ，時間通りに行かず，明日の予定が分からないこともざらだった。今日のことが決まってないなんてこともある。日本のきっちりした時間感覚とは大違いだ。

私は結構アクティブに活動する方であると思う。部活に，アルバイトに，学外の活動などをしている。しかしそれは単にその活動を楽しみたいからではなく，将来役に立つだろうと思っての活動だった。そのため目標を見失いそうになると，がんばれなることが多くあった。予定，これからのことに囚われすぎて，今を淡々とこなす。今を消化試合にしている自分に気付いた。そしてこれからは，インドネシア人の今を大切に生きる生き方にシフトチェンジしたいと思った。

2.5 全力で生きる

前述の「今を生きる」と重なる部分も多いと思う。私は人生に対して，常に一生懸命ではなく，力加減を身につけてしまった気がする。インドネシアで見る人びとはいつも全力に見えた。

私たちはハムカ大学で日本語を指導されているリナ先生の娘さんの結婚式に招待され，インドネシアの結婚式に参列した。インドネシアの結婚式は我々日本人がイメージする結婚式とは大きく異なっていた。インドネシアの結婚式は，はじめに儀式的部分があるのだが，その後は料理が立食，人が自由に行き交い,それぞれのタイミングで新郎新婦に挨拶をしにいくというスタイルであった。そして，会場のマイクでカラオケをはじめたり，ダンスをしたり，結婚式というより私には町内会の納涼祭のように見えた。気付くと，鳥取大学の学生もカラオケをしていた。とてもおもしろかったが，今日知り合った人の結婚式で歌うなんてと思って彼女たちをぼーっと見ていた。しかし次の瞬間には，歌っていた鳥取大学の学生と親族のみなさんに誘われ，いつの間にかその輪の中にいて踊っていたのだった。とはいえ，

最初は入ることに抵抗があった。日本にいたら，踊ることは恥ずかしく照れくさいことである。しかし，インドネシアではその場でもじもじしている方が恥ずかしく，逆に浮いてしまうような気がした。全力になるというのは，自分をさらけ出すことだと思う。恥ずかしさや照れくささが先行してしまいそうなところで，またどんな場所でも，ふとした瞬間に全力に遊ぶ，騒ぐことができるのは素晴らしいことだと思った。そして全力になれたことで自分の存在が認められた気がして，自分に誇りが持てた。

日本では全力であることは嫌な顔をされることもある。全力になれない人は，全力な人を嫌う。努力という言葉を嫌う。しかしインドネシアはそうではなかった。みんなが全力になって，努力する。誰も非難しない。

私も全力で生きようと思うようになった。しかしずっと全力で生きていなかったからなのか，全然うまくいかない。今全力でやれないであろうことは全力でできるときにやろうとしてしまって，やらなければならないことも後回しにしてしまっている。むしろ前の自分よりも全力から離れてしまっている。全力は頑張りたいことだけ，頑張るのではない。それ以外の部分でも必要な考え方である。これを反省して，これからの生活につなげたいと思う。

3. インドネシアの問題と私

3.1 バンタールグバン

バンタールグバンとは，ジャカルタ中のゴミが集まる場所である。まず私たちはバンタールグバンにある学校に行った。そこで鳥取大学の学生の誕生日のお祝いをした。ハムカ大学の学生がサプライズでケーキを用意してくれたのだった。それだけでも感激だったのだが，そのケーキを渡すとき，バンタールグバンの学校に通う子どもたちが一緒に Happy birthday to you を歌ってくれた。大きな声で。笑顔で。それも何度も。止めるまでずっと全力で何度も。それを見て涙が溢れて止まらなくなった。私は誕生日の学生よりも先に泣いてしまっていた。泣かずにはいられなかった。初対面，言葉も通じない，いわば知らない人，彼らにとって私たちは勝手に自分の生活に土足で足を踏み入れたきた人たちである。そんな人の誕生日をこんなに盛大に祝うことができるなんて，とてもすごいと思った。私は家族や友達の誕生日ですら，ここまでの熱を持って祝ったことはなかったと思った。これほど強く胸に残った人の誕生日ははじめてである。この場に立ち合えてよかった。子どもたちからすごくパワーをもらった気がした。この日は友人の誕生日でもあり，私の何かが変わった，私の誕生日かもしれないと思った。

人のことで，これほどうれしかったのは初めてだった。私はどうしても自分と人は分けて考えてしまう。だから自分では人のことを思っているつもりでいるが，どこか本気で喜んだり，悲しんだりできていないのではないかと感じていた。だから人のことを本気で考えることのできる人がうらやましかったし，そうなれない冷めた自分が嫌いだった。しかし，ここで仲のよい友人が知らない人から盛大に祝福され，感謝ということばでは表しきれない感情があった。とても幸せな気持ちになった。自分のこと以上に嬉しくて，嬉しくて心が温かくなった。私も人のことを本気で思えているのだと気付いた。そしてずっと背負い続けた肩の荷が降りた気がした。

その後，学生で手分けをしてケーキを配った。手で。フォークがなく，手も洗えてない状態でケーキを手に取り，子どもたちに食べさせる。とても申し訳ない気持ちでいっぱいだった。わたしはそんなケーキ，あまり食べる気は起きない。しかし子どもたちのお母さんが食べなさいと彼らに言う。それまでは彼らがゴミ山の近くで生活しているということを彼ら自体から感じることはなかった。しかし私たちの手掴みのケーキを食べる子どもたち，そして母親たちを見たとき，貧しい，生活に苦しいというフレーズが急に頭に浮かんできた。彼らは何も悪いことをしたわけではないし，私の友人の誕生日を盛大に祝ってくれる心優しい人たちである。それなのになんで報われないのだろう。彼らはなぜこういう生活を送らなければならないのだろう。とても悲しい気持ちになった。

その後みんなで昼食を食べ，子どもたちと遊んだ。私は体を動かすことが好きだし，子どもが大好きなので，時間の許す限りずっと遊んでいた。サッカーをしたり，追いかけっこをしたりした。そして仲良くなった気がしたので，知っているインドネシア語で話してみた。しかし全く通じなくて，笑ってしまった。でもショックはちっとも受けなかった。心は通じている気がしたからだ。お互いに笑顔でいれたのだった。私は言葉が通じなくても，こんなに楽しい気持ちを共有できることに驚いた。そのときは日本人とインドネシア人とか，大人と子どもとか，貧しいとか貧しくないとか，何も私たちをわける概念など，存在しなかった。ただ人として，人を何のしがらみもなく，接していたのだ。あれから 2 ヶ月以上経つが，一日きりの出会いの子どもたちの顔がはっきりと思い

浮かぶ。

バンタールグバンを離れるときに，子どもたちが挨拶をしてくれた。最初はよそよそしかった子どもたちが，自らの意思で挨拶に来てくれたのがとても嬉しかった。インドネシアでは挨拶のとき，年少者が年長者の手に額をつける。今までこの挨拶は儀礼にしか思っていなかった。しかしこの挨拶は本当に心からの気持ちであることが分かった。とても笑顔の子，少し切なそうな顔の子，表情は一人ひとり違うが，どの子も挨拶のはじめとおわりに，私の目をしっかりと見てくれたからだ。

ある男の子は挨拶をした後に，私にキャンディをくれた。これはハムカ大学の学生が彼にあげたものだったらしい。私にくれるの？と思ってびっくりした。私は自分で買ったお菓子ですら，人に分けたくないと思うことがあるのに，ましてはここで暮らす，そして子どもの彼にとってキャンディは特別なものであったに違いない。それにもかかわらず，私にくれるなんてと感激した。ここでもまた涙が止まらなかった。キャンディは気持ちだけ受け取って，彼のお母さんにお返した。貧しくも人にモノを与える幼い少年は，心が貧しい私よりずっと大人のように見えた。

彼は私に，感謝の思いをしっかりと伝えてくれた。私は彼の感謝の気持ちに応えたいと思った。バンタールグバンで暮らしている人のほとんどが，バンタールグバンで一生を過ごす。だから彼をこの生活から抜け出させてあげたいと思った。しかし，現実的に私にそんな力はない。インドネシアのしくみを変える大きな力をなんて持っていない。もしかすると私が気付いていないだけで，実は私にも何かできるのかもしれない。でも結局，それも思い浮かばなかった。何もできない自分が悔しくてたまらなかった。

ゴミ山のもっと近くで生活する人たちのところにもいった。彼らはゴミを分けることを生業として，ゴミ山の上やその周辺で廃材を使って作った家を建てて，暮らしている。私ははじめて家を見たとき，本当にここで生活をしている人がいるのかと，目の前の光景を信じることができなかった。ゴミ山はジャカルタ中のごみが集まっている。インドネシアには分別のしくみがなく，分別という概念が全く浸透していない。日本で街にあるゴミ箱は可燃物や不燃物，資源ごみなど，数種類分設置してあると思う。しかし，インドネシアではゴミ箱は大体一種類で，たとえ分けたとしても一緒に処理されてしまう。それゆえ，どんなゴミもごちゃ混ぜだ。ゴミ山で暮らす人はその中から資源になるものを探し，売りに行き，お金を得ている。不衛生極まりないゴミの山の中を素足やサンダルで歩き，資源を探す人びとを目の当たりにして，現実にこんな人たちがいるのかと思い，唖然として言葉を失った。

私たち学生は実際にそこで働く人たちにお話を聞くことができた。私のグループで話してくれた彼は，もともとここで生まれたわけではなく，仕事を求めてバンタールグバンに来たらしい。私たちはどうしてこういう生活をしているのか，自分の将来をどう考えているかなど，彼にたくさんの質問した。そんな中，私は失礼かなと思いつつも，彼にこんな質問をぶつけてみた。「私たちのように見学に来る人をどう思いますか？」すると思いもよらぬ言葉が返ってきた。「嬉しい」という言葉であった。彼は「こういう生活をしている僕らがいるということを知ってくれるのが嬉しい」と答えた。惨めに思われて嫌だという返答があるかなと思っていただけに，衝撃は大きく，ただただ動揺し続けた。

思い返すと，一緒に行ったハムカの学生は分別のことやこういう現状に仕方がないと諦観していたように思う。バンタールグバンを後にしたとき，日本人学生は黙り込んでいた。

一人ひとりが自分の目の当たりにした光景を受け止めようとしていたのだと思う。それとは対照的にインドネシアの学生は，内心はどうか分からないが，歌ったり，いつもと変わらないテンションで楽しんでいたりした。私はそれを見て信じられないと思った。自分の国で起きている問題なのに，なんで関心がないの？とものすごく腹が立った。仲良くなって，いいところをたくさん知っている分，今までとは違う一面を見て，今後も彼らと一緒にいることに少し不安を覚えた。しかし考えてみると，彼らと同じことをしているかもしれないと思った。日本である問題を提示されても，ここまで真剣に考えることはないだろう。誰かがやってくれる，あるいはどうにもできないとしているのではないだろうか。私たちはインドネシアである社会問題を見たから，考えることができたのであった。

彼らはバンタールグバンで生活する人たちのことを気にしていないように見えた。しかし彼らがいるからこそ，インドネシアの社会は成り立っている。でもインドネシアの人びとは見ようとしていない。ゴミ山で生活する人がいるのに，省みる人は少ない。彼らは確かにインドネシアにいるのに，いないように扱われているような気がした。だから彼らはどういう形であっても，存在を認められて嬉しいのかなと考えた。

お話してくれた彼は 20 歳だった。同い年だよと言った私たちに，彼は初めて笑顔を見せた。そのぎこちない笑顔が印象的だった。彼の笑顔がもっと見える社会にしていきたいと思った。

ゴミ山から帰るときに，ゴミを持っていた私に，「捨てて帰りなよ」とハムカの学生が言った。私は「自分で出したゴミだから」と言って，持ち帰ることにした。しかしそれは意味のないことであった。ゴミを持ち帰り，ゴミをゴミ箱に捨てても，結局バンタールグバンに行ってしまう。私はそれに気付きながらも，結局持ち帰った。しかしそれは，バンタールグバンの人に対するものでなく，自分の気休めに過ぎないのではないだろうかと思った。ゴミ山で生活している人，働いている人を見てしまったため，どうにか自分の気持ちを整理し，落ち着けたくてした行為ではないかと思ってしまったからだ。

そしてとてつもない絶望感におそわれた。加えてインドネシアの 10 日間で出したゴミが全部あそこに行ったのだと思うと，つらい。今もやるせない気持ちがよみがえる。

3.2 カンプンナガ

カンプンナガは自然と共存する村である。そこで 2 泊 3 日のホームステイをした。電気も水道もない。日中は灯りがないのは当たり前，夜はランプをつけて生活する。トイレやお風呂は外の水路を利用している。そのトイレとシャワーは竹の囲いに布の出入り口で作られている。そのため上は筒抜けである。それゆえ，シャワー中に道を通る人と目が合うこともあった。最初の頃こそ動じたが，気がつけばその状態で「〇〇ちゃーん」と手を振っていた。今思えばまわりの人を少し困らせていたように思う。また，トイレとシャワーの水が流れる排水口から鯉が見え，口をパクパクして顔を覗かせていた。気持ち悪くてたまらなかったが，最後には当たり前になっており愛着が湧いてきそうだった。この鯉がまさか食用だなんて，とてもじゃないけど信じられなかった。このように日本ではなかなかできない体験を通して，少し自然と共存で気がした。

しかしどうしても腑に落ちないことがあった。それは生活用水を川に流していることである。村の人びとは自然に対してさまざまな配慮をしているのに，それはいいの？と思った。村の人に尋ねると思いもよらぬ言葉が返ってきた。水路が入り組んでいるから，悪いものは水路でせき止められ

て，川には流れないと言われたのだ。そんなはずはないと思った。ろ過されるということであろうか。

インドネシアは発展途上国である。それゆえ，先進国の技術で作られたモノが，たくさん送り込まれる。先進国のスピードで作られたものは，彼らのスピードとは合っていない。例えば，ゴミの分別である。前述したように，インドネシアではゴミの分別が徹底されていない。ゴミは全部同じゴミとして回収される。発展途上国にはゴミの分別の知識よりも先に，ゴミに出す際分別しなければならないモノが，先進国から送り込まれたのである。その結果，こうなっているのだと思う。それゆえ，彼らはその対応を知らないのだ。だから彼らを一概に避難することはできないと思った。

洗剤を流す彼らを非難した自分の生活はどうだろうかと振り返ってみた。洗剤を直接川に流さないのは流さないシステムがあるから，流していないに過ぎないのではないだろうかと思った。すぐ物を捨てて，資源を無駄にしたり，夜まで明かりをつけていたり，自然に逆らっていきている私たちである。自然と生きる，地球の中で生きるとは考える個人は少ない。私もそうだった。

私は環境問題を考えるときに人間と自然という捉え方をしてきた。「地球温暖化が～」とか「大気汚染が～」とか，大きな範囲で捉えようとして，何もできなくなっていたように思う。そうではなく，カンプンナガで生活する人のように自分と自然の関係として考えることができれば，私が自然のためにできることが出てくるのではないかと思った。

4. インドネシアから帰ってきて

4.1 学ぶということ

インドネシアから帰ってきて，授業が楽しくて仕方がない。今までも楽しいと思うこともあったが，その比ではない位に楽しい。授業の一番多い水曜日が待ち遠しい自分がいる。それまでなんとなくノートをとっているだけ自分から，ノートに思ったことを書き加えている自分に変わっていた。授業の感想を書いていると気付いたら授業時間がとっくに過ぎることも多くなった。自分自身の変化に戸惑っている。

私は大学生でありながら学ぶことが苦だった。授業中は時間を気にしたり，ついついスマホが触りたくなったりして，授業に集中できずにいた。それは先生の教え方がよくない，そうなってしまうのは仕方がないと思っていた。しかしインドネシアから帰ってきて，あれ？授業楽しくない？と気付いてしまったのである。気付いてからはもう大変である。時には睡眠不足で眠たくなったり，身が入らなかったりすることもある。しかし考えずにいられない，楽しまずにいられなくなっていたのだ。もはや学んでいるという感覚ではない。楽しいことをしている，遊んでいるという感覚に近い。何も苦ではない。そして学びは自分と離れたもの，ただ新しい知識を吸収するというものではなくなり，自分に引き寄せて，人生を考えることそのものになっていったのだ。その結果，生きているということを実感する大切な時間になっている。私にとって，とてもかけがえない時間になった。

4.2 みんなで賢くなる

インドネシアでのディスカッション中にある学生が「みんなで賢くなると聞いてドキッとした。自分だけ賢くなろうとしていた。」と言っていて，私もその言葉にドキッとした。「みんなで賢くなる」，この言葉はインドネシアに行く前の事前学習会頃からずっと仲野先生から言われてきた言葉である。はじめ私は「みんなで賢くなる」というのは，一緒に取り組むことくらいに認識をしていた。

しかしインドネシアプログラムでは，自分で考えたことを誰かに言ったり，誰かが考えたことを聞いたり，考えを共有するという機会が多かった。そしてプログラム中に「みんなで賢くなる」という言葉を改めて聞いたときに，それが実感として理解できたのである。

また，私は今まで思いや考えを言葉にすることを怠ってきたことも気付いた。それはつまり，「みんなで賢くなる」チャンスを逃してきたということである。非常にもったいないことをしてきた。これからは自分の思いを言葉にし，相手の言葉と重ねながら成長したい。みんなで賢くなりたいと思う。

「みんなで賢くなる」はとてもお気に入りの言葉になった。これからもずっと私の目標であり続けると思う。

4.3 等身大に生きよう

インドネシアプログラムでは，一緒に参加した学生から学ぶことも多くあった。ある学生は以前から知り合いであった。彼女とはインドネシアプログラムに参加して深く関わるようになった。私には彼女の人となりがとても素敵に見えた。一言で言えば，飾らない人だった。分からないことは分からないと素直に言える人だった。私はどうしても自分をよく見せようとしてしまう。賢く思われたいと思って分からないが言えなかったり，いい人に思ってもらいたくて自分の素直な気持ちが言えなかったりしていた。そのため，自分が見ている自分と他の人が見ている自分のギャップが大きくて，悩むことがあった。しかし彼女を見て，素直になっていいんだと思った。自分の気持ちに嘘をつかなくても，周りはそれを受止めてくれるのように思った。それに気付いてから，人間関係に悩むことはあまりなくなった。家族，友人，部活，バイトなど，それぞれ自分の立場は違うけれど，どこでも素直な気持ちを言えるようになったからだ。すると，自然に仲間に対する信頼もできてくる。相手も私を信頼してくれるようになった気がするのだ。等身大の自分がどこでもさらけだせるようになって，今まで以上に楽しく生活している。

5. さいごに

日本に帰ってから，インドネシアにたくさん教えてもらった。正直，インドネシアの生活は慣れることができなかった。そして滞在中はインドネシアの問題ばかりに目が行き，同じ参加学生が「インドネシア，すごいすごい」と手放しにほめているように見えて，なんか信用できず，あまりそう思えなかった。それよりもインドネシアにある問題の方が気になって仕方なかった。しかし帰って，日本のいる自分や日本の生活と照らし合わせると，インドネシアのいいところがたくさん見えてきた。人を思いやったり，今を全力で生きたり，私が見失いかけていたことをたくさん気付かせてくれたのだった。

インドネシアに行く前はイスラームを学ぶことを目標としていた。実際それも達成されたが，それよりも自分自身のことをたくさん考えることができた。私は何を大切にしているのか，どう生きたいかなど，今まで考えたことはなかったが考えなければならないことが思い浮かぶようになり，考えずにはいられなくなったのだ。「インドネシアから帰ってきてからもプログラムは続く」「プログラムが始まる」このことばが胸に染みる。自賛はしたくないのだが，インドネシアから帰ってきて自分の歯車が動き出した気がする。

インドネシアで過ごした愛の10日間

古山 恵莉（地域教育学科2年）

はじめに

インドネシアに行ってから，もう半年以上が経つ。帰ってきてから，「インドネシアどうだった？」と多くの人から尋ねられた。すると私は自慢げに，電気と水道が通っていない村に行ってね，水浴びするところはこんなふうだったよ，と私がみたインドネシアを説明していた。しかし，だんだん，ん？なにしてるんだろうと，自分が話している内容に違和感を覚えてくるようになった。けれど最近その違和感の正体が分かったのだ。インターネットで検索すればでてくるような情報ばかりを話していることに気づいた。誰が話しても同じようなことばかりを話していたのだ。

これからは，私だけが，私こそが，知っている話をしなければならない。どうして，日本に帰って半年以上たった今，インドネシアの友人から送られてくる音声メッセージに涙がでるのか。どうして，少し濁っている水で水浴びしているときに「ありがとう！」と叫びたくなったのか。どうして，プログラムがおわってから，自分に素直に生きられるようになったのか。どうして……インドネシアにいた10日間が「愛の10日間」だったのか。そういったことを私は，自分の頭で考え，表現しなければならないと思う。

1. インドネシアでできた，本当の友達

私たちがインドネシアにいる間，ハムカ大学の学生や卒業生，先生が私たちの傍にいつもいてくれた。彼らは，日本語を勉強していて，日本にいつか行ってみたいと願う，私たちと同じくらいの年齢のインドネシア人だ。

インドネシアへ行った学生9人とハムカ大学側の12人で4つのグループをつくり，そのグループごとで行動していた。そして，その同じグループのリザという私より1つ年下の女の子と私は特に仲が良かった。

「もしも〜し，えっこちゃ〜ん。聞こえますか〜？」

帰国してから半年以上が過ぎ，正直インドネシアでの記憶が薄れかけていた頃，リザからこの音声メッセージが届いた。久しぶりにリザの声を聞いて，ポロッと涙がでた。どうして涙がでたのだろう。リザが何か特別なことを言ったわけではない。誰もが電話の最初に言う「もしもし」なのに。また，地元の友達と久しぶりに電話をしても，その子の声を聞いただけで涙が出る経験などしたことはない。どうして，リザの声をきいて涙がでたのだろうか。私には「もしも〜し，えっこちゃん。聞こえますか〜。」というごく普通の言葉が，リザが発したことでとても力のある言葉に変化したように感じた。それはなぜだろうか。インドネシアでの出来事を振り返りながら考えてみたい。

1.1 毎日が準備な日本社会

インドネシアに着き数日がたって，改めて自己紹介をするときがあった。そのときに小学校の先生になりたいので子どもと関わるボランティアを色々している，ということを話した。それを聞いたハムカ大学のジュジュ先生が「日本人は授業でもアルバイトでもないのに，将来のために，と思

ってボランティアするのがえらいですね。インドネシア人はそんなことはしないです。今は今，過去は過去，未来は未来だから，今のことしか考えません。でも，今だけのことを考えて精一杯生きているから幸せです。」と言っていたということを聞いた。それを聞いたとき，ドキッとした。

経験を積んでいい先生になるために，と思って子どもと関わるボランティアを色々していたけれど，私は毎日，先生になるための準備をしているみたいだ，と感じた。将来のことを考え，準備することによって，今これしたい！という心のわくわくを消し去っていた。今思うと，とんでもなく，つまらない生活していたんだな，と思えるが，その当時はその生活こそが楽しいし，毎日が幸せだと思っていた。しかし私はジュジュさんの言葉を聞いて，将来のことについて毎日準備しなければならない，今を生きられない社会に自分が住んでいて，自分のしんどさに鈍感になっていたことに気づいた。その自分でも気づいていなかったしんどさを不意につつかれて，私は涙をながし，泣いた。

1.2 あなたが泣いていたら私も悲しい。

泣きやんだ後，リザと合流した。リザが私にすぐに気がつき，私のもとに寄って，「どうしたの？」と抱きしめてくれた。泣いていた理由はリザに分かりやすい日本語で説明するのは難しかったので言わなかったが，わけも分からず泣いている私を抱きしめ，「えっこちゃんが泣いていたら，私だって悲しいよ。」といって一緒に泣いてくれた。そのとき，本当に救われた。その抱擁と一緒に泣いてくれたことがとても嬉しかったのだ。

日本であれば，泣いている子がいても，そっとしておこうとする。それが優しさだと思っていたし，空気をよんだ行動だからだ。けれどリザはまっすぐ，私のもとへ来て，私を助けにきてくれた。リザからしたら，友達が泣いているのに，そっとしておくなんて，それが友達というの？というだろう。いや，本当にそのとおりだと思う。でも今まで私はそうしてこなかった。泣いている友達が心配だと思っても，おせっかいかなと思い，心の中で気にするだけで何もしなった。また，どうしたの？と聞くことも，ただの知りたがりだと思われたらいやだと思ってしなかった。

気になったら気にかける，心配したら声をかける，その当たり前なことをリザは堂々とやってくれた。空気の読みあいもしなくてよい。自分がしたいと思ったことをする。そして，そのときに，よし，やるぞ，という小さなふんばりもない。本当に，私を見つけた瞬間，スッときてくれたのだ。私は，そのとき，リザは本当の友達だと思った。

そんなリザから音声メッセージが届き，「えっこちゃん」と呼ぶあの愛おしい声に涙を流すのは当然である。半年たった今でも私を思い出し，連絡をくれ，「はやくあいたい」といってくれる，本当の友達だ。

2. 自然よ，ありがとう！ 人よ，ありがとう！ 私は優しい人になりたいです！

私たちはプログラムの中ごろ，カンプンナガという村へいった。電気と水道が通っていない村と聞いたとき，私は正直不安だった。どんな水で水浴びするのだろうかと，特に水のことが心配だった。なので，カンプンナガに行く数日前から，カンプンナガ用にと，ペットボトルの水をためこんでいた。カンプンナガ出発当日はリュックサックが水の入ったペットボトルでいっぱいになるほど持っていった。それくらい私は2泊3日のカンプンナガの旅を心配していた。

けれどカンプンナガについてみると，とても素敵な村だと思った。カンプンナガで暮らす人びと

は，自分達が住む家も近所の人たちと協力しあって建てていたり，そこらに生えている草を目薬や，タトゥーとして利用したりして，助け合いながら，自然と一緒に生活していた。電気をひいていないのは，意図的であり，テレビを持っている人と持っていない人など，差がうまれるからだと聞いた。そのことを聞いたとき，私たちとは違うものを大切にしているのだ，と思った。みんなが気持ちよく暮らすことを大切にしている。

私たちの社会ではどうだろうか。自分，自分，と自分が幸せだったらいいと思ってはいないだろうか。便利さを追い求めすぎて，本来の幸せを見失ってはいないだろうか。本当の幸せを見失ってまで，何がしたいのだろう。そして，そんな社会で生きている私は，みんなが気持ちよく，幸せにくらせますように，と堂々と大きな声で言えるだろうか。きれいごとだといわれても，私はこれが大事だと思っているのだ，ときっぱり言えるだろうか。カンプンナガでは，堂々と，みんなが幸せに暮らせることを願って，そして，願うだけではなく，そのためにはどうしたらいいか，彼らなりに考え，実行している。本当の幸せを知っていて，しかもそれを見失わず持ち続けている彼らをみて，私もそんな心が綺麗な人になりたい，と思った。

そんな気持ちが爆発したのは，水浴びの時だった。水浴びするところは，私の肩ぐらいの高さの竹で組まれていて，床も竹である。水がたまらないように隙間もある。その隙間をのぞくと，ため池があってそこには魚が泳いでいる。水は山から湧き出る水をろ過して，竹の筒からでてくる。ぱっと見たところは綺麗だが，ペットボトルに汲んでみてみると，少し濁っていた。そんな野性感丸出しの水浴び場だった。

最初は水も濁っているし，早くでたい，という気持ちで，一緒に水浴びしていた日本人の友達と，ギャーギャー言い合って，早くでようと急いでいた。けれどこの野性感がだんだん面白くなってきて，気持ちいい！と思うようになってきた。日本のお風呂では，お風呂でマッサージしたり，雑誌を読んだり，半身浴をして血流をよくするなど，お風呂でも忙しい。

しかし，カンプンナガでの水浴び場では，余計なものがないので，体を綺麗にするという本来の行為をちゃんとできる。そのことがなんだか，とっても気持ちよかった。「自然よ，ありがとう！人よ，ありがとう！私は優しい人になりたいです！」と叫びたくなった。カンプンナガでの水浴びを通して，本来の自分がチラッと顔をみせた気がした。

3. ありのままの自分が〇

私は周りからよく明るくて社交的だと言われる。私もいままでそうだと思っていたし，そんな自分が好きだった。けれどインドネシアから帰ってきて，私がそうなったのはありのままの自分に自信がなかったからだと気づいた。周りの人の目線が気になって，誰にでもいい顔をしてしまうからだ。いやだと思っても嫌われるのが怖くて断れなかったり，これがしたいと思っても周りからどう見られるかが気になって出来ずに終わったり。

けれど，インドネシアでは，これをしたらみんなどう思うかな，といったような気持ちを考えるすぎることなく，人の目を恐れず，ありのままの自分がだせた。だから歌詞をあまり知らない歌でも大声で歌えたりしたのだと思う。それは周りの人が，何をしても受け入れてくれる，かっこいい私じゃなくても，ただの私を受け入れてくれる，そんな雰囲気を持っていたからだと思う。

また，インドネシア人はみていて，気持ちが良かった。さっぱりしていた。行きたくなかったら「今日はいきません。疲れましたから。へへへへ。」と素直に言っていたし，自分の口にあわないものだったら，「へへへへ。これはちょっといらないですね。」と言っていた。私だったら無理して行

ったり，食べたりするだろう。だから私はインドネシア人をみて，羨ましく感じ，私もそんな風になれたらいいなと思った。

インドネシアに行って，素直で飾らない人たちと出会い，いい子ぶりっ子していた私に気づいた。私はもっと素直に自由に生きていいのだと思った。そして，私の周りには私そのものを受け入れてくれる人たちが大勢いたことに気づいた。しかもその人たちは私が自由をはきちがえ暴走しそうになったとき「調子にのるな」といってくれる。「お前は中身がないのに，前に進んでいくところがいい」といってくれる。自分を正直に出すと，周りの人が正直にぶつかってきてくれる。喧嘩や衝突を恐れ，ずっといい子ぶりっ子してきた私は，このぶつかりが意外にも気持ちよいものだと，初めて知った。

4. おわりに

ハムカ大学の友人は私たちが帰国してから，Facebook に「愛の 10 日間をありがとう」と言葉を残していた。本当に，その通り，愛の 10 日間だったと思う。温かさといくつもの笑顔と涙，優しさ，静かな強さが満ちた 10 日間だった。この愛たっぷりの 10 日間で私は自分のことを知ることができた。私はインドネシアに行く前の自分をハッピー野郎だと思う。何も気づかない，何も知らない，何も感じない，だからいつでもハッピーでいれた。インドネシアへ行ってから，そんなバカみたいなハッピー感じゃなくなって，ほくほくした心がじんわりなるようなハッピーを感じるようになった。大人になったハッピー野郎って感じです。

苦しみを乗り越えて
――インドネシアプログラムと私――

井上 舞（地域文化学科 2 年）

はじめに

インドネシアに行ってから，もう 5 ヵ月以上が経つ。インドネシアに行ったあのときの鮮烈な印象は，もう薄れてしまった部分もある。でもそれは新しい文化に出会ったときの驚きや物珍しさも含まれていた。今私から出てくる言葉では，インドネシアに行ったときの思いを新鮮に綴ることはできないかもしれない。しかし，そんな今でもなお，自分の中に強く残っているものがある。また，時間が経ったからこそ感じられることもある。それらのことを大切にしたいと思うとともに，このレポートに記しておきたい。

憧れと期待

私がインドネシアに行こうと思ったきっかけは，前年度インドネシアへ行った先輩方の姿が印象的だったからである。インドネシアから帰ってきてからの先輩方の姿を見て，私も先輩のように自分のやりたいことにまっすぐ向き合い，思い切って行動したいと思った。それほどまでに先輩方が

輝いて見えたのだ。インドネシアに行ったからといって先輩のようになれるとまでは思っていなかったが，インドネシアでの経験はその先輩に何かしらの影響をしていると感じた。自分も何かを感じたいという漠然とした希望と，インドネシアに行った先輩への憧れからくる，「インドネシアに行けば何か感じられるかもしれない」という淡い期待が，私をインドネシアに行きたいと思わせた。

逃げ出したかった出発前

インドネシアに行くまでには，プログラムに参加するみんなで事前学習を行った。文献もいくつか読んで，何度も集まって議論した。特に私にとって，イスラムについて考えることは大きな意味を持っていた。これまでの私は，「宗教なんてわからない」と決めつけて，考えようともしなかったし，知ろうともしなかった。今回インドネシアプログラムに参加したことは，イスラムについて知るきっかけ，考えるきっかけにもなったのだ。多分このプログラムに参加しなければ私はイスラムについて考えることはなかったと思う。考えないことは一番楽なことだから，何かにつけて私はその方法を選びがちであった。議論しても何も解決なんかしないと，諦めている部分もあった。でも本当はそんなことはなくて，一人と一人の出会いが何かを変えるきっかけになるのだ。私はインドネシアでそんな出会いを果たした。

参加メンバー同士では，メールでも毎日のようにやりとりが行われた。一日に何度もインドネシアプログラムに関するメールが届くこともあった。その頻度は，インドネシアに行く日が近づくにつれて増えていった。海外に行くのだから，お互いに連絡を取り合うことに慣れていかなければならず，そういった意味でも，メールでのやりとりは大切なものであった。

でも，私はそんな事前学習や頻繁なメールに怯んでしまっていた。インドネシアに行くこと自体が心の重荷になっていくようにも感じられた。何かを始める瞬間のしんどさはいつまでたっても私を苦しめる。そう感じる人がほとんどかもしれない。でも，そこで逃げ出してしまっては，「やってみよう」と思った自分が浮かばれない。少しでも興味を持った自分を大切にしたい。だから私は苦しさから逃げずにインドネシアへ行くことができたのだろう。今では，インドネシアに行かなかった私を想像することもできない。あの時，インドネシアに行くことから逃げなくてよかったと思っている。

温かさのある優しさ

インドネシアにいる間，ずっと体調が万全だったかと言われればそうではなかったし，衝撃は毎日のように私を襲ってくるので，頭もついていっていない部分が多かった。それでもハムカ大学のみんなや先生方は私たちのために動き回って，フォローしてくれていた。一日のプログラムが終われば，ホームステイ先の家族が温かく出迎えてくれた。確実に気を休めることができていたわけではなかったが，ふとした瞬間に人の温かさに触れてほっとしたり，心が温かくなったりした。

インドネシアに行って感じた優しさは，ただ優しいだけじゃなくて，その優しさの中に温かさがあった。私は彼らからたくさんの愛をもらった。それは日本に帰ってきてからの今でももらい続けているものだ。あとで触れるが，誕生日のメッセージもその一つである。

彼らの優しさはときに私を戸惑わせた。私は「どうしてそこまでしてくれるんだろう」と考えた。自分は何か返せただろうか，もしくはこれから何か返せるのだろうかと不安にもなった。それほどまでに彼らの愛は大きく感じられ，私を包み込んでくれた。

インドネシアでは体調は万全ではなかったと書いたが，私は途中で疲れが出たのかみんなが活動

している間，バスの中で眠っていたことがあった。その間，ハムカ大学のジュリタさんが様子を見に来てくれていた。私たちはジュリタさんのことをジュジュさんと呼び，慕っていた。ジュジュさんは，今回一緒にプログラムに参加していた堺くんが体調を崩したときにも，ずっと気にかけて堺くんに付き添っていた。それはハムカ大学の子もそうだった。でも，私が堺くんのところへ行ったのは，背中の跡を見に行くためだった。ハムカ大学の子が，堺くんのために風邪がよくなるおまじないをしてくれていたのだが，それはコインで背中をなぞって行うもので，堺くんの背中は真っ赤になっていたのだ。その話を聞きつけて堺くんに背中を見せてもらいに行ったときに，ジュジュさんにそのことを見抜かれてしまった。仲間が苦しんでいるのに，興味本位でここに来たんだねと，そんなことを言われて自分の愚かさに気づかされた。自分だって苦しいときにそばにいてもらったはずなのに，仲間が苦しいときにはそれができないんだと，自分の拙さを思い知った瞬間だった。ジュジュさんにそのことを見抜かれてすごくショックだった。

いつのまにか，苦しいときには心配されて当たり前という意識が自分の中にあったのかもしれないと思い，恥ずかしく思った。自分は人のために行動できると思っていた。それは，他人からも褒めてもらったことがあったので，自負もあった。その分だけ，興味本位で堺くんのもとを訪れた自分が恥ずかしかった。私は温かさのある優しさに触れて，自分のことを振り返ることができた。私にはもっと想像力が必要だと知ることができた。

誕生日のメッセージ

さきほど少しだけ触れた誕生日のメッセージのことだ。日本に帰ってきてから，インドネシアで一緒に活動していたハムカ大学の学生は，参加メンバーの誕生日が来るたびに，みんなに誕生日メッセージをくれていた。私も映像でのメッセージでお祝いをしてもらった。お祝いをしてくれた中の一人が以前ツイッターに好きな曲について書いていて，私もその曲が好きだと言ったことを覚えてくれていたらしく，その曲を歌って私に届けてくれた。その曲は，GooseHouse の『オトノナルホウへ→』という曲で，離れていてもつながっているよということを歌っている曲だ。その曲をハムカの子が歌ってくれたのだ。私はその映像を見て，歌詞の内容もあいまって泣いてしまった。何も考えず，ふと外でその映像を見たから，声を上げておいおい泣くことはできなかったが，人にはばれないように静かに泣いた。嬉しくて，本当に離れていてもつながっているんだなと思って，泣いてしまったんだと思う。きっとメッセージを送ってくれた彼女たちはそこまで考えてないんだろうけど，私にとってその誕生日メッセージはたくさんの特別であふれていた。

そんなふうに，嬉しいと思わせてくれる彼女たちの素直さやまっすぐな気持ちは，私をも素直にしてくれるのだ。

笑顔をみせて

私はインドネシアに，カメラを持って行った。私は大学に入ってから写真部に所属して写真を始めていて，インドネシアに行くときも，たいしたカメラではないがカメラを持って行き，「何か作品にできそうな写真が撮れればいいな」と思っていた。今考えれば，それくらいにしか考えていなかったとも言える。インドネシアに着いてからは，何気なくシャッターを切っていた。記録として残したいもの，画になりそうなもの，なんとなく雰囲気のあるものなど，いわば「それっぽい」ものを撮っていた。

なんとなくで写真を撮っていた私が，バンタル・グバンに行ったときのことだ。バンタル・グバ

ンは，ジャカルタ中のごみが集められる場所で，インドネシアのごみ処理場である。しかし，処理といってもきちんとした施設があるわけではなく，そこでは，集められたごみの分別をして働いている人たちがいる。バンタル・グバンには，そこでしか生きていくしかない人たちがいるという現実がある。私はその現実に打ちのめされそうになってしまったが，ハムカ大学の子は，「バンタル・グバンでごみの分別をして働いている人がいるから，自分たちの生活があるんだ」と言っていた。そう言われてしまうともう何も言えなかった。たしかにそのとおりで，その仕組みや，「仕方のないこと」と現状を受け入れる人のことを非難する権利は私たちにはない。それでも，何かしたいと思う自分はいた。何をすればいいのかそのときはわかっていなかったが，何かしたい気持ちだけはあった。でも何をしても自己満足になってしまう気がして，怖かった。何かしたいけど何かするのが怖いという複雑な気持ちが私の中に渦巻いていた。

バンタル・グバンには，学校がある。そこでしか生きていけない子どもたちが最低限の学びができるようにと建てられた学校である。私たちはその学校で保育園の年代に当たる子どもたちに会った。

この写真はそのときに撮った写真である。

私はこの写真に「笑顔をみせて」というタイトルをつけた。このタイトルには二つの意味があって，一つは「私に笑顔を見せてほしい」という願いである。子どもたちはカメラを向けただけでは笑顔を見せてはくれなかった。自分では無意識のうちにカメラを向けられると笑顔を見せているが，子どもたちはそうはいかなかった。このとき私の隣にもう一人いて，必死に子どもたちを身振り手振りで笑わせようとしていた。すると子どもたちはその様子に興味をもって，面白そうな顔で見ていた。そこで私はカメラをかまえた。

ついに笑わせようと頑張っていた子のジェスチャーが子どもたちのツボをつくことができたのだろう，ようやく彼らは笑ってくれた。この写真はそのときのものである。なぜか自然とこっちを見てくれて，こんなに素敵な笑顔を写真におさめることができたのだ。私はこの笑顔に魅せられてしまった。人を魅せるような笑顔，これが「笑顔をみせて」の二つ目の意味だ。彼らの笑顔は人を惹きつけるものがある。本当に面白いと思ったときの心からの笑みだからだろう。

この写真は，日本に帰ってきてから，大学内で行った展示会で作品として出した。大学内に数日間は展示され，何人かには見てもらうことができた。写真部では，作品の品評会を行う。その場で，自分がインドネシアに行って来たこと，バンタル・グバンという場所があること，そこで働く人がいるということなど，あらゆる話をした。でも，みんなの反応を見ながら，この写真を撮ったときの私の想いが伝わりきっていない気がした。そこで私は「伝えること」の難しさを痛感したのだ。

自分が体感したあのときの空気，空間を写真で伝えきることはできないのではないかとすら思ってしまった。写真の限界を感じたのだ。それと同時に，今まで自分は何も伝えてこようとしてこなかったことに気づかされた。写真一つにしても，なんとなく撮っていたから語ることもできなかった。それが，今度はたくさん言いたいこともあったし，伝えたいこともあったのに，いざそれを表現してみるとうまく伝えることができなかった。とても悔しかったし，自分の力不足を感じた。でも，この経験があったから，写真と改めて真摯に向き合うことができた。何かしたいけど何かする

のが怖いという複雑な気持ちを持っていたが，自分にできる無理のない範囲でのことから始めればいいんだと思った。私にとってそれは，写真でも文章でも，自分が見たものを誰かに伝えようと努力することだ。私にとってバンタル・グバンでの衝撃と，この写真は，「自分が何を伝えたいのか」「どうすれば伝わるのか」ということを考える大きなきっかけとなった。

苦しさを乗り越えて

インドネシアから帰ってきて，私はしばらく自分の変化に気づけずにいた。変化に気づかず，インドネシアでの経験をどうにか自分のものにしなければと焦っていた。今思えば焦ることなんてなかったのに，インドネシアで本当の自分を取り戻したような気がしていて，日本に帰って日常に戻ったときに，また流されてしまうのではないかと不安だった。だから，インドネシアで得た自分を逃がさず日本でも暮らしていくにはどうすればいいかをひたすら考えていたように思う。本当の自分という言葉を使うのも，あまり気に入ってはいないが，あのときの自分の心情を表すなら，やはりあれは本当の自分を取り戻したような感覚だった。その喜びと高揚感は確かにあった。でも，本当の自分を逃がさないようにしようとすればするほど苦しかった気もする。インドネシアでの経験を始めて文章にしようとしたときに苦しかったのもそのせいだろう。

段々と自分の変化に気づいていくにつれて，苦しさが紛れていった。本当の自分を取り戻したような感覚は，勘違いではなかったが，それが全てではなかった。自分の変化に気づいたきっかけは，これまでに敬遠していたあらゆるものへ，興味をもつことができるようになっていることに気づいたときのことだ。たとえば原子力発電，政治，意識の高い学生などもそうだ。原発も政治も，宗教と同じように考えないことを選んでいたものだった。私が考えても仕方がないと，自分ごととして考えられずにいた。意識の高い学生とは，「意識高い系」などと揶揄される学生のことで，現代の問題や流行に敏感に反応し，自分のやりたいことのために突き進んでいる人のことをそう呼んだりする。私の友達にもそんな学生はいて，仲はよかったが，深入りしないようにしていたのが事実だ。どこか無意識に避けていたように思う。

でもインドネシアから帰ってきて，そんな彼らを避けていない自分がいた。むしろ自分から彼らと話をしてみようとしていた。意識が高いだなんてそんなことはなくて，その人の興味が私よりももっと広い範囲であっただけだった。私が気づいたのは，自分の受け入れる器の小ささだった。そして，今感じるのは，確実にこれまでよりもたくさんのことを受け入れることができるようになっているということである。受け入れることができるようになった分，興味の幅も広がった。考えることは苦しいと思い避けてきたものと，向き合うことができるようになっていた。こんなに嬉しいことはない。

インドネシアに行っていなければ，考えることから逃げていた自分のままだったのだろうかと，ふと考えたりする。そんな自分はもう想像もつかないのだけれど。全てがインドネシアのおかげと言っているわけではないが，私に変化を生むきっかけとなったのは，インドネシアプログラムである。それほどまでに私にとってインドネシアプログラムは大切なものになった。

おわりに

インドネシアプログラムは，私を変えてくれるきっかけとなった。そんなインドネシアプログラムに関わってくださった全ての皆さんに，この場を借りて感謝の気持ちを伝えたい。本当にありがとうございました。そして私も，インドネシアプログラムに関わった一人となれたことを誇りに思

う。

インドネシアにいるときには，新しい経験を自分の中に落とし込むことはできていなかったが，あれから少し月日が経って，ゆっくりとインドネシアでの経験を自分のものにすることができた。少し変わってしまった自分にもようやく慣れてきて，そんな自分を楽しむことができている。これほどまでに嬉しいことはない。このレポートでそれを全て表現できているかはわからないが，そうであるようにと言葉を綴った。自分の言葉を振り返ってみて，私って意外と苦しいと思うことが多かったんだと気づいたし，そしてその苦しさは平和主義であろうとするうちに，考えることから逃げていたから生まれてしまっていたということにも気づいた。自分の言葉を振り返ってみることは，自分自身を振り返ることにもなる。

私は，誰かに伝えようとしてこのレポートを書いたが，書きながら自分のことをより深く知ることもできた。そんなふうに等身大で綴った私の言葉が，少しでも多くの人に伝わればと思う。そして私は，これからも誰かにインドネシアでの体験と自分の経験を，私自身の言葉で伝えていきたい。それが私にできる恩返しだとも思うから。

溢れ出る思い

加藤 聖月（地域文化学科 2 年）

はじめに

私にとって，この 10 日間のプログラムは忘れられない，そして私が今まで忘れていた感情を思い出すような大切なものであった。このプログラムに参加した理由は，最初は自分の知らない世界をみてみたい，そして最近疑問に感じていた，つながりについて考えてみたいと思ったからである。

思い返せば，事前学習のときから私のインドネシアに対するモヤモヤするような思いが始まっていた。鳥取大学での事前学習のときに，今回一緒に行動したハムカ大学の先生方に講義をしていただいた。その学習会のときに，昨年インドネシアプログラムに参加されていた先輩も参加されて，先生方に会ったとき涙を流していた。その先生は，先輩にとって，インドネシアでのホームステイ先のお父さんであった。そのときに出た，「よく分からないけど自然と涙が溢れる」と言う言葉が，当時の私にとって本当に分からないものであった。今まで涙を流すような感動や心の揺れを感じたことがなかったからである。それでもこのプログラムに参加したら私も分かるようになるのだろうかと思っていた。しかし，この言葉が，私にとってインドネシアで何か感じなければならないと，プレッシャーになっていたのかもしれない。今回は，私がインドネシアで焦りながらも，得ていった思いについて書いていく。

結婚式に参加して

インドネシアで初めて現地の学生に会った日，その日は結婚式に参加した。日本では，知らない人の結婚式に参加するということは考えられなく，びっくりした。インドネシアの結婚式は，特に座席が決まっているわけではなく，自由に料理を取ったり，動いたりしていた。

その中でも特に印象的な出来事があった。花嫁さんや花婿さんが座っている隣に，小さなステージがあり，歌を歌っている人がいた。そこに段々と人が集まりだし，気づいたら日本の学生が日本

の歌を歌い始め，みんなで踊り始めた。私は歌ったり踊ったり，自分を表現することが苦手で，どちらかというとその場面をみていたい。けれども，みんなに合わせなければ，ノリが悪いなとか思われてしまうのだろうかと不安な気持ちがあった。一緒に回っていたインドネシアの学生に，「踊る？」と聞かれたとき，私は携帯を持って，「みんなの写真を撮りたい」と，写真を撮ることを言い訳にして断った。「そうか」と言われ，つまらないなと思われていないか不安だった。しかし，踊っていなくても，その場に受け入れられている感じがした。無理に踊ることを強制するわけでなく，でも踊らない人を無視するわけでもない。いつの間にか，その踊りの輪に巻き込んでいるのである。みていると言った私であったが，みんなの踊りにあわせて手拍子など，音楽に合わせているうちに，気づいたら輪の中に引きずり込まれ最終的にはみんなで笑っていた。私と同じように少し離れていた子が，踊りの輪に参加していたり，踊っていた子が椅子に座りはじめたり，その場は自由だった。その雰囲気が私には安心できるものであり，ほっとしたのだ。

カンプン・ナガ

水道も電気もない村に２日間泊まるーこのように聞いたとき，わたしは一体どのような生活が待っているのかと恐れていた。特にトイレや水浴びのことを心配していた。日本の生活に慣れている私は，以前他の国へ訪れたときに紙がトイレに流せないだけでもストレスに感じ，ましてカンプン・ナガでは水道はないし，紙もないと，どうしたものかと本当に心配だった。しかし，生活してみると思いのほか気持ちが良くて，特に早朝の水浴びは清清しさを感じた。早朝に浴びる理由はなかったが，電気がないため寝るのが早く，朝早くに目が覚める。そこでインドネシアの学生のお祈り前の水浴びに付いていった。早朝の水浴びは寒かったが，すごくさっぱりして気分が良かった。この早朝に浴びるという体験が，私の心に余裕をもたらしたのかもしれない。

夜は，ランプを使い過ごした。部屋全体がはっきり見えない明るさだったが，人工的な明るさではない温もりがあった。その灯りの下で，村の人たちが伝統的な踊りのショーを開いてくれた。伝統的な踊りにも関わらず，途中から私たちも彼らに手を引かれて，踊り始めた。最後に，私たちも何か日本の踊りをすることになっており「妖怪体操第一」を踊ることにした。日本の学生に「踊れる？」と聞かれたときに，すぐ「なんとなくの雰囲気で踊るよ」と答えていたことに自分でもびっくりした。その時，この仲間たちの前だったら，踊っても大丈夫な気がしたのである。今まで一緒に過ごしていて，自分をみせることに抵抗がなくなったのか，それとも私の考え方が変わったのか。きっと，インドネシアの人たちが，どんな踊りでも，手を叩いてリズムをとってくれ，笑顔で見守ってくれていると想像できたからだろう。踊っても踊らなくても，何も言う人はいないし，受け入れてもらえる。ここなら踊っても大丈夫という確信が，その場にはあった。

インドネシアで働く日本人の先生

インドネシアプログラムは私たちで，第三回目のプログラムである。第一回，第二回に参加していた先輩が，今年からハムカ大学で日本語の先生として働いている。プログラムの間に時間ができ，その先生と日本の学生とで話をする機会があった。そのときに聞いた，「日本は閉じて守るけど，インドネシアは開いて守る」という言葉が心に残っている。日本は自分の情報を他人に知らせない。そうすることで自分を守っている。一方，インドネシアでは，自分のことを周りに知ってもらうことで，みんなから見守ってもらっているのである。このことはインドネシアで過ごすうちに私も実感した。ハムカの学生たちが，私のことを知ろうとしてくれて，一日中一緒にいてくれて，常に私

たちのことを気にかけてくれているのが分かるのである。だからこそ，インドネシアの優しさに触れて，飾らない，ありのままの自分で過ごすことができた。それは本当に楽なことで，日本にいるときの，距離をとっているような関係に息苦しさみたいなものを感じた。

こうして先生の話を聞いていると，日本の学生が自分の今までの生活を振り返って涙を流しながら話し始めた。私にとってこのときが，一番焦り，そして取り残されたように感じた瞬間だった。私も，インドネシアのみんなの優しさに触れて，どうしてこんなにも私自身を包み込んでくれるのかと，感動していた。しかし，その感動はまだ私にとって心を揺さぶり始めた始めの段階だったのである。だからこそ，その時みんなが遠くにいるように感じられた。素直に感動できない自分がどこか欠陥しているみたいで，みんながもうすでに心を揺さぶられる体験をしていることに焦りと羨ましさを感じた。事前学習のときに，インドネシアに行けば私も何か感じることができるだろうと思っていただけに，私は何も感じることができないのかとショックでどうしたら良いか分からなくなっていたのだ。今振り返ってみると，せっかくインドネシアに行くのだから，何か感じなければならないという思いに追われていたように感じる。そしてこのとき，みんなが自分の思いを吐き出している中でこの焦っている思いをみんなに吐き出すのは場違いだと思い，またとても言い出せるような雰囲気ではなく，何も話せないまま自分の中にこの思いを閉じ込めていた。

ホストファミリー

インドネシアでは，初日にホテルに泊まったことを除き，全てホームステイだった。私は二つの家庭にお世話になり，カンプン・ナガでの二泊三日と，残りの日はハムカ大学の先生の家に受け入れてもらった。昼間はプログラムがあり，関わることがなかったが，夜ごはんや朝ごはんを一緒に食べたりした。私が受け入れてもらった家庭は，日本語を話せる人はいないため，簡単な英語や，ハムカ大学の学生も一緒にホームステイをしているため，彼女たちに通訳をしてもらっていた。そうするうちに，インドネシア語での「美味しい」の言い方を覚えたり，先生が日本語を覚えたりして，日本語で話そうとしてくれる嬉しさや，自分でコミュニケーションがとれないもどかしさを感じた。

ホストファミリーと過ごした最後の日は，自由日であり，一日中ホストファミリーと過ごした。インドネシアの島々について紹介されているテーマパークに連れて行ってもらった。そのとき，ホストマザーから「楽しい？」と聞かれ，うなずいた私に対して，「〇〇が楽しいなら私も楽しい」という言葉をもらった。私はこうした言葉が普段の生活から出てくることにおどろいた。たった 10 日間ではあったが，そのなかに，こうして実感できる愛情があった。

そうして迎えた最後の夜，私たちはホストファミリーに向けて，準備したプレゼントを渡した。写真も取って，最後にホストマザーと話したとき，私は涙が止まらなかった。自分でも思いがけない反応で，涙を止めたくても止められない。ホストマザーに「遠く離れていても家族は忘れない。あなたは私の娘だ。」と言われたときに心の奥から溢れて出してくるものがあった。たった 10 日間なのに，娘として，家族として受け入れてくれたこと，私にとってこの場所が，ただ泊まるだけの場所でなく，いつの間にか家族になっていたことに気づいたのである。泣き出した私をみて，ホストマザーは私をぎゅっと抱きしめてくれた。その強さに，私はまた涙が溢れてきたのである。

部屋に戻り，まだ涙が止まらなかった私は，ベッドの上で泣いていると，気づいたら一緒に泊まっているハムカの学生が側に来てくれて，「泣かないで」と慰めてくれた。私は，その優しさにさらに泣いてしまった。包み込まれるような安心感と，優しさを感じずにはいられなかった。

おわりに

日本に帰ってきても，インドネシアの友だち，家族の関係は終わらない。ＳＮＳなどで連絡を取っているし，いつでも会えるという確信を持てるからだ。ホストマザーとの連絡で，とても印象的な出来事があった。「あなたの家族の写真を送って」と言われたのである。ホストマザーが私だけでなく，私の家族ごと受け入れようとしてくれていることが嬉しかった。出会ったのは，私とインドネシアのホストファミリー。けれども，その関係で終わらせずに，私の家族にまで広がっている。

私の焦りながら得ていった思いは，彼らの包み込むような優しさであった。出会った日数は関係がなく，その相手を突き放さない優しさが私を変えてくれた。途中，涙を流すほどの心の揺れを感じられなかったことに焦っていた私だが，実は最終日のハムカの学生と日本の学生全員での振り返りのときに，とてもすっきりする出来事があった。それはある日本の学生が，「みんながインドネシアに感動しているけど，私はよく分からない」というような言葉を言ったことである。私はこの言葉を聞いて，「あっ，言ってもよかったのか」と，胸にストンと落ちてきたのである。何か感じなければならないという思いが，自分自身の行動を制限していたのだ。

インドネシアに行って，とても楽になった。私にも，心の揺れがあったのだと気づき，今までその揺れが小さかったために，溢れることがなかったのだと分かったからである。無理に焦る必要はない。私なりのスピードで，自分に正直に生きていきたい。自分の思いを吐き出せ，それを受け入れてもらえる場所があることを実感したのだから。

(2016 年 1 月 29 日受付，2016 年 2 月 3 日受理)